

小学校児童作文能力の発達

藤原与一



# 目次

はしがき..... 1

序 説..... 3

一 作文指導の実践のために..... 4

二 汎作文教育..... 10

三 発 達..... 12

小学校 二 同 学 年 級 児 童 六 年 間 の 作 文 の 歩 み

— 調 査 と 考 察 —

◎ 発達を見つめる..... 17

◎ 以下にかかげる作文..... 18

◎ とりあつかいの方法..... 23

その一 とりあげかた..... 23

その二 見かた..... 23

① 作文内容      ② 発想・着想 — へきりこみかた、問題把握

④ 叙述面 — 表現力      ⑤ 表記法      ⑥ 推考・念入れ

その三 二題のとりあつかいかた..... 27

第一章 甲学級児童六カ年の歩み……………29

——通年一定題目「私のお父(母)さん」——

第一節 六児の歩みを追って……………29

前注……………29

a'くんの歩み……………30

b'くんの歩み……………39

c'くんの歩み……………46

a'さんの歩み……………53

b'さんの歩み……………64

c'さんの歩み……………74

第二節 甲学級他児童作文……………82

第二章 乙学級児童六カ年の歩み……………117

——通年一定題目「私のお父(母)さん」——

第一節 六児の歩みを追って……………117

前注……………117

### 第三章 甲乙両学級六カ年の歩み

——時の課題での作文——

#### 第二節 乙学級他児童作文

Aくんの歩み	118
Bくんの歩み	128
Cくんの歩み	135
A'さんの歩み	146
B'さんの歩み	156
C'さんの歩み	165

#### 第一節 甲学級四名のばあい

bくんの歩み	206
cくんの歩み	209
b'さんの歩み	211
c'さんの歩み	214
第二節 乙学級四名のばあい	217
Bくんの歩み	217

目次

Cくんの歩み	220
B'さんの歩み	225
C'さんの歩み	228
第四章 甲乙両学級六カ年の歩みを通観して	233
第一節 「私のお父(母)さん」のばあい	233
一年生	233
二年生	234
三年生	236
四、五年生	237
六年生	238
第二節 時の課題に応じた作文のばあい	241
一年生	241
二年生	242
三年生	243
五年生	245
六年生	246

汎 説 作文教育の道

- 第一 「いかにして、その深刻な生活経験をとらえさせるか。」が、指導の第一歩になる。……………251
- 第二 作文指導は、すすめはげますしごとだ。……………251
- 第三 相手はだれしも、もともと作文ずきであったのを、忘れてはならない。……………252
- 第四 やがて伸びるのだ、と期待する。……………253
- 第五 一つだけ、つねに言う。「心からのことばで書け。」と。……………253
- 第六 短作文教育を生かす。……………254

むすび

- あとがき……………257
- そえがき……………259

小学生が、一年生から六年生までで、作文力をどのように発展させていくものであるか。これを追っかけてみたいとの願望は、早くから私にあった。そのゆめをかなえて下さったのが、広島高等師範学校附属小学校訓導でいられた原田直茂先生である。先生のおかげで、私は、附小の同年二学級の児童のみなさんに、年々つづけて、文章を書いてもらうことができた。その結果、小学校児童の作文能力の発展をものがたる、貴重な資料が得られた。これを今、原作者各位のご諒解を得て発表する。

私は、これが世の毎日の作文教育に役だつことを念じてやまない。また、これが、明日の作文教育研究に役だつことを祈ってやまない。

この書には、『幼児の言語表現能力の発達』の書が先行すべきである。——本来、幼児の部を第一部とし、学童の部を第二部として、一冊のものを編むつもりでいた。が、量がかさむので、第一・二部を二書仕立てにした。本書に次いで、幼児の部を発表したい。

は し が き  
学童のとりあつかいからさらに上級に行つては、中学生・高校生・大学生・成人一般を見ることになる。(む

かしの中学生については、さきの小学校六カ年の調査につづけて、三カ年間（一年から三年まで）、二学級について調査した。これは私自身が、受持ちの組で実施したものである。諸君に、後掲（二二頁）の四題について、連年、同時期に作文をもらった。学校時間一時間のうちで、四つの短作文をつづってもらった。この方では、『書く生活の教育』とのまとめがなされるべきである。

今、本書をこのような形で発表しうるのは、私の過分の幸とするところである。つつしんで原作者各位に感謝し、原田先生に厚くお礼を申しあげる。また、出版書肆に深謝する。

序

說

## 一 作文指導の実践のために

どうしたら自他ともにたのしい作文教室をうみだすことができるか。

近来、作文の教育が、ようやく着実さを見せはじめてきたように思う。この傾向をほんものとしていくための努力が、今、私どもにも必要であろう。せっかくの今日の好傾向に根をはらせたい。作文指導は、どのように実践していったらよいか。なにはともあれ、作文は、指導するものも、指導されるものも、ともに、しごとがたのしくなくてはならない。

一つに、気がるにやれたら、きつとたのしかろう。

「気がるにやる。」これは、作文させるがわについても、させられるがわについても言えることである。

A 短く書かせれば、処理は比較的可んたんである。処理の可んたんなことなら、気がるにやらせることができよう。

書かされるほうも、短くてよいのなら、比較的気がるに書くことができよう。おのずから、そこで、書くたのしみもおぼえるようになる。

B 長く書かせても、その結果を、教室で、児童・生徒の相互処理の方法にうったえることにすれば、教師は気がるになれる。——相互処理をさせるのには、たとえば句読点の検討とか、「です」「ます」の混雑の検討とかの、明白な観察点を定めて、その作業に進ませる。

相互処理の作業は、当事者たちにとっても、かなりおもしろいものにちがいない。

C 教師は、相手がたになんの圧迫感もあたえないため、作文成績を点数化することをやめる。(甲乙をつけることもやめる。) 指導者としては、じつは、相手がたの真率な人間表現の作文を点数で評価することなどは、苦痛なはずである。気がるではない。

点数化されなかったら、児童・生徒は、どんなに気らくなことであろう。圧迫感から解放されたときのこちよさはかくべつである。

D 相手の作文に関して、じょうず・へたを言わないことにする。となれば、指導者は、気がるに指導していくことができよう。(気がるにやりたく思う人が、とかく、じょうず・へたを言いがちである。)

、また、へたと言われた。と思う子どもに、作文のたのしさはないのが当然であろう。

じょうずの人が、そうそうあるものではなからう。私どもは、みんながへたなのだと考えたほうが幸福である。(——幸福な人が進歩しよう。)

## 説 序

一二つに、相手がたにいろいろな生活を経験させれば、かれらは書きたのしみをおぼえるようになる。かれらが発表したければ、指導のがわもたのしいわけである。

相手がたの生活内容を高めるしごととは、一教師の一文教育のしごとにとどまるものではない。学校教育の指導の全部が、つねに、相手がたの生活内容を高めようとしていくものである。そうではあるが、作文指導としては、また、作文指導の立場で、かれらの生活内容を高めさせる指導に心を用いるところがなくてはならない。子どもの喜びそうな読みものを、とくに力づくよく推せんしたりすることも、一つの生活指導となる。読書感想を書かせても、かりそめの感想と思われるようなものがさずとらえて、その持つ意味を、教室で、ぐっと深くほりさげて見せれば、これによってもまた、相手がたは、当人のみならず、多くの人たちが、いろいろな刺激を覚え、かれらは、自身の生活経験を深めていくことになる。いそがしいしごとの中での生活指導ともなれば、手をつくすことなどは、なかなかできない。ではあっても、こちらと相手がたとの、日々の体あたりが、すなわち有形無形の生活指導になることを信じることには、大いに、つとめなくてはなるまい。

いろいろな生活をたがいに経験しあい、各自の生活を深めあうことは、おそらく、むずかしいことではないはずである。おたがいに、めいめいの生活をまじめに考えるようになれば、そこにすでに、生活内容の、その人相応の高まりがあろう。

生活内容が高まれば、高まったのに応じて、その内容を発表しなくなるのが人情のしぜんである。思うことがあれば、だれしも言いたいはずである。したことがあれば、だれしもそれを人に語ってもみたいはずである。人間にとって、発表欲は、もっともしぜんなもの、むしろ本能的なものであろう。人間は、本来、表現者であると私はつねづね考えている。

その発表したがる相手がたに、早くも規制を加えることなどは、禁物中の禁物である。まずは自由自在に発表

させること、そのことがあってよいばかりである。發表させてこそ、指導もありうる。

ここにたいせつなのは、方言による表現、方言による作文をじゅうぶんに是認するということである。「方言をつかわせてもよいか。」などは、第一次的には、考えないことにしたい。方言と言われるものは、まったくかれらの生活語である。(一語の方言例をとってみても、それはすなわち、生活語の一事実と言える。方言の状態全体をひとまとめに見ても、それは、生活語という大きなまとまりと見られる。)生活語による發表であるから、これは全面的に容認するのが当然である。容認どころか、そうした發表は、奨励・鞭撻してよいことである。このような鞭撻が正確に機能を發揮したら、おそらく、自己の發表欲を満足させつつ、自在にものを書いてくれることであろう。ここで、作文教育の第一線を、私どもは越えることができる。

ところで、中学校三年を終えて、もはや社会人となろうとするものが、まだ方言による文章しか書けないというようでは、ことがじゅうぶんではない。義務教育の最後段階では、一方、共通語による自由な表現もできる、というようになっていくことが願わしい。したがって、たとえば小学校六年という段階でも、共通語によって表現しようとするれば、かなりできるといふようにもしつけられていることが望ましいのはもとよりである。このように、發展的にはかれらのすべてが共通語人にもなっていくことが期待されるが、それはあくまで、かれらがむりなく自身の言語生活を拡充・向上せしめていくのによって達成されることをねらいとすべきものであって、言排斥等の手段によってねらわれるべきものではない。言ってみれば、かれらの方言表現の生活を助成しつつ、共通語表現の生活をも、しぜん獲得(開拓)させていくのである。

むりなく、共通語生活にはいらせるようにしたい。したがって、指導上では終始、方言表現または方言的表現

の生活を、あたたかいまなこで見つめていくことにしたい。——いつまでたっても、かれらのすなおな発表欲をそこねてはならないことである。かれらにとって、つねにたいせつなのは、自分の心の中のことばで、自分の心を表現することである。

三つに、指導のため、自分の身たけにあった一研究を持つようにしたら、きっと指導がたのしくなろう。

「自分の身たけ」とは、いそがしい身のことを言おうとしている。さて「研究」と言うと、人はもはや、何かのあらたまったもの、かたくるしいものを感じるのではなからうか。私は、そのようなものを研究とはけっして考えていない。むしろ私は、生活の中の研究を重視している。人はだれしも、その人なりに、生活の中で、身たけにあった研究を持つことができるはずである。

作文教育に関して、いそがしい生活の中で一研究を持つとしたら、どんな研究が持てようか。私が本書で発表しようとする、小学校児童二学級についての六カ年継続の作業なども、まさに、いそがしい人たちの生活の中に持たれてよい一研究ではないかと思う。六カ年をけなくともよい。三カ年でも、二カ年でもよい。あるいは一カ年の中で同一目標の作業を数回おこなってみるのもよい。私のやったしごととは、要するに、素朴な継続作業である。やろうとすれば、だれしも、すぐにやれることである。気ながなしごとであるから、あせることもない。のどかな研究である。それが、つづけしごとなので、関心だけはいつも頭からはなれない。そういうことがたいせつなのだと思う。いつも何かの関心をもってやるようであれば、作文指導の実践が、たしかにたのしいものとなろう。——深いたのしみ、滋味のあるたのしみとなろう。

この種のたのしみを教師がわが味わう時、相手がたもしげんに、何かのたのしみを味わうようになる。先生が何かをやっていらっしやる。と、かれらが思いはじめると、じぶんらも、ただごとですますわけにはいかないぞ。というような気分になって、しだいに燃えてくる。こちらが何かをすれば、相手がたも燃えずにはおかない。このようなことは、すでに人びとの痛感するところであろう。

近來、ティーチング・マシンなどと言われて、教育の機械化がとりざたされ、実施されている。教育上での機械利用には種々の長所がある。集団を指導して、しかも個別指導を全うするため、機械力を仰ぐことができるのならば、私どもは、躊躇なくそういう力によりたい。さて、作文指導のばあいには、機械力をどのように活用することができるのであるか。今のところでは、教育方法の機械化によって、相手がたの作文のたのしみを大いにかきたてることなどは、できにくそうである。せつかくの新しい方向ではあるが、この方向に向かって私どもが、自分の身たけにあった一研究を持つことは、いまだ容易ではないようである。加えて思うのに、なにか、作文は人間の心を表現するしごとである。人それぞれに心がちがひ、心のはたらきがちがう。真の自発的な表現を誘うがためには、けつきよく、個人個人（個性個性）への個別的なはたらきかけを重要視していかなくてはなるまい。となつて、指導のためのなんらかの研究を持つとしても、今のところ、その方向は、おのずから、非機械化の方向に限られてくるように思われる。

## 二 汎作文教育

作文教育は、広く考えなくてはならない。手ぜますぎると、しごとが、とかくたのしくない作文教育になる。相手がたも、きゅうくつな作文指導を受けたのでは、たのしくない。

私は、汎作文教育の見地で、「幼児の言語表現能力の発達」も問題にしている。幼児の、ものが言えるようになったところには、もはや「作文」が認められる。ひとえに作文である。おさなごたちは、たどたどしいことばつきで、ときにはおとながとんでもないと思うことを言うが、その一つ一つの発表が作文である。この段階から作文を考え、作文教育を考えていかななくては本格的でない。作文教育は大射程を持つものである。

汎作文教育のつもりで、また、私は、小学校六カ年継続観察というような気の長いしごとも問題にしている。こせこせしてはならないのだと思う。なにさま人は一生のあいだ、ものを書いていくのだ。作文していくのだ。作文教育の考えかたも、広く大きくなくてはならない。

紙に書いても作文であるが、口で言っても作文である。私どもは、口頭作文——つまりはことばを口で話すこと——も、一種のだいじな作文であると考えたい。作文教育も、ずいぶん力づくよく、口頭作文をもねらうことにしたい。(口頭作文を見おとした、あるいは、あえて除外した、一方的な、かたくなるしい作文教育が、考えられ

がちではなかったか。現に、考えられがちではないか。その証拠に、話しあいだというとき、かれらはわっと湧くこともあるのに、先生が作文用紙を教室に持ちこんだを見ると、かれらは早くも、「書くのか。」といったような、嗟嘆めいた声を発する。口頭作文を、むしろ大はばに認めて、これの背後に書記作文をおくようにしたら、かえって書記作文教育の能率もあがるのではないか。ともあれ口頭作文と書記作文とは、表裏一体のものである。書記作文の句読点にしても、これは、口頭作文、つまり話しでは、ところどころの間あい、間である。適所にほどよく間をおいて話すような習慣がしつけられれば、かれらはおのずから、書記の文章のうえでも、ほどよく句読点をうつようになろう。

書かれた文章（書記の文章）を読解すること、読解という作文である。ふつう、作文の時間は紙に書く時間で、読解の時間は、解釈の時間であって作文の時間などではないと考えられがちであろう。それもそうである。が、読解してその解釈の結果を表現するとなったら、話して表現しても、もはやそれは口頭作文である。さらに言えば、解釈にあたって、頭をはたらかせ、ことばをあれこれと考える。考えてことばにしてみる。そこにすでに作文がある。解釈のいとなみは、心のうちのいとなみであろうと、ことばにあらわすいとなみであろうと（——ことばにあらわして、しかも、書きつけてみるいとなみであろうと）、みな、作文の活動であると言える。作文の世界はじつに広い。作文教育の対象界はじつに広い。私どもの前には汎作文があり、汎作文教育がある。教師のからだには、いつでもどこでも、作文教育のしごとがくっついていられるとも言うことができよう。

こういう目で、ものを見ると、何を見ても、それが作文教育考究の資料となるからおもしろい。作文教育の参考書・参考物は、身のまわりに、いろいろとよこたわっていることが知られる。（——私が以下に提出する作業

結果も、一つのおもしろい資料として観察していただけるならばさいわいである。

### 三 発 達

作文教育は、たえず発達を目標としていくべきものである。

これは自明のことにはちがいない。発達を目標としない教育活動があつてよいわけはない。が、ここではとくにつぎのような意味あいだ、発達を目標とすべきことを強調したい。人は生活の中で、つねに作文し、人生のかぎり、これをやめることがない。やめることができないとやめてもよい。その長い作文生活で、人は、人さまざまにはあるが、大なり小なり、作文能力を発達させている。幼児からおとなへ目をやれば、作文能力の発達がまことに明らかであろう。心を用いるならば、また努力するならば、作文能力、あるいは話す力、書く力は、無限に発達する。人が生きる努力をし、したがって作文の努力をするならば、生きるかぎり、作文能力は発達していく。このような作文能力の発達が見とおされるだけに、日々の作文教育は、たえず、忠実に、人間の作文能力の発達を目標とすべきことになる。

私どもは、ときに、自己の文章力の低下を感じることもあるか。(私などは、低下や沈下を感じることがしばしばである。) それにもかかわらず、私は、原則的には、作文能力の発達を認めたい。低下の自覚は、やがて発達

につながると思うのである。今はとくに、すぐれた作家たちの努力精進の生活を手本としたい。あの人たちは、ときには骨をけずるような思いで、自分の作文能力にいどみ、たえず、みずからとたたかいつつ、能力の新しい展開をはかっている。そして、時とともに、それをみごとに実現してみせてくれるのである。明らかに認められる事実をふまえつつ、私は、人間の作文能力の発達を、幼児からおとなへと見とおしていきたい。

このような遠大な見とおしを持って、しかも汎作文教育にしたがうことが、私どもの作文指導の道であってしるべきではないか。ここに理想追求の大きなたのしみがある。こういう教育現実が、また、的確に相手がたに反映しないはずはあるまい。影響を受ける相手がたは、こせつくことなく、足どりもさわやかに、「書く生活」の練磨にしたがっていくことであろう。

小学校

同 学 年  
二 学 級

児童六年間の作文の歩み

— 調査と考察 —

作文教育は

無限のしごとである。

人間の心を見

人間の心を養っていく

しごとだからである。

## ◎ 発達を見つめる

小学校の児童たちは、一年生から六年生にかけて、自己の表現能力を、どのように発達させていくのであろうか。

六カ年間で、子どもたちの表現力の開花・発展を、追跡してみたい。

人はだれしも、学校へあがった自分の子が、その作文能力を高めていくことをこいねがうであろう。わが子のことを思うにつけても、よその子はどんなふうであるだろうかと、他に対する関心を持つ。今、私は、そういう人に、ああこんなふうにのびていくものなのか。とすぐに観察していただくことのできる資料を提出したいと思う。

教師として作文教育の指導にあたる人々も、受けもちの組の作文能力の発達を願って指導につとめる時、他の組の児童はどんな状態であろうかと、また他に対する関心をいただくことであろう。私は、人々のそのような比較の欲求に、以下、直接にこたえたいと思う。

要するに、これを見てくださいというつもりで、以下に、生き生きとした資料をかかげる。

一個人について、またはクラスの全体について、人はだれしも、以下にかかげる資料により、作文能力の開花・発達を、縦横に見つめることができるにちがいない。”ぜひ見つめてください。” 作文能力の花開くさまを、思うさま追跡していつてみてください。“と私はお願いしたい。

幼児期の、あどけない、しかも奔放な「作文」の生活から出発して、子どもたちは、小学校一年生から六年生にかけ、どのように、その純雅な表現心・表現能力・作文力（——文章力より文章表現力）を伸ばしていくか。

## ◎ 以下にかかげる作文

なにより、これらは、多くの人に、めずらしい調査記録と認められるものであろう。小学校六カ年間にわたって、一定計画のもとに、同学年二クラスについて、作文能力の発達を追跡したのがこの記録——すなわち以下にかかげる児童作文——である。

作文能力の発達を、実証的に研究してみようとする願望は、早くから私にあった。その研究のため、小学校から旧制中学校を経て、その上のもはやおとなびた人たちの学校まで、全学校系統にわたって、作文能力発達の、調査をしてみたかったのである。じっさいに、計画的な調査を実施し得たのは、小学校と旧制中学校において

◎ 以下にかかげる作文

であった。そのこの段階のものは、散発的にしか、ものをとらえていない。それにしても、いちおうのことはやりお世話とも言える。(昭和十四年から十七年までのことである。)

小学校についての調査は、以下のとおり実施した。

対象とした学校

広島高等師範学校附属小学校

調査開始期

昭和十四年十二月

対象学級

同学年二学級入以後これを、甲学級・乙学級と呼ぶ。▽

作文してもらった時期

昭和十四年十二月(一年生二学期)

昭和十六年 一月(二年生三学期)

昭和十七年二(乙)月(三年生三学期)

昭和十八年 五月(五年生一学期)

昭和十九年五(乙)月(六年生一学期)

作文の題目

通年一定の題についてと、応年の制題についてと、二様に作文してもらった。

一定題の題目は、「私のおとうさん」（または「私のおかあさん」）であった。応年の制題は、一年「（朝、学校に来るまで）」、二年「興亜奉公日」、三年「陸軍記念日」、五年「遠足」、六年「（向洋、畑作り）」であった。

以上の調査を全面的にとりはからってくださったのは、じつに、当時の広島高等師範学校附属小学校訓導、原田直茂先生である。先生の継続的なご努力をいただくことなしには、この調査は了し得なかったのである。

先生は、なお、私の研究意図を諒とせられて、いっさいの作文結果を、お手を加えられることなく、そのまま下さった。純粹資料のいただけたことは、まことに幸甚であった。

私は、ここにくりかえして原田先生への感謝を披瀝し、かつ、今やと、ひとかどのとりまとめをなし得たことを先生に報告するしだいである。

対象校を高等師範学校の附属小学校にとったことには、多少の問題があろう。が、当時、広島文理科大学助手であった私には、附属によらせていただくのが、まずは最善の道であった。

以下、作文の実作をあげていくに当たっては、すべて、個々の作者名をふせていく。作者は、第一部の児童をa・b・cであらわし、第二部の児童をA・B・Cであらわすことにしたい。文章中の固有名詞その他についても、今は、作者に敬意を表して、諸種の遠慮をしなくてはならない。

二学級とも、六カ年間には、クラスの人員に増減があった。以下のとりあつかいでは、全五回、つねに筆者であった人たちだけを問題にする。（残念ながら、四回以下の筆者を割愛した。）

筆者のかたがたには、すべて発表の許可をいただいている。年月もへだたった今日、無署名にしての発表とはいえ、こうした発表を許諾せられ、この独特の資料の公表を応援してくださる筆者のかたがたには、お礼の申しあげようもない。調査者は、深く感謝してやまないものである。

年々の、時の題目について書かれたものは、「私のお父さん（私のお母さん）」という一定題のものとはとりあつかいを別にして、しかも今回はその、少数者のものをかかげることにする。それにしても、これらがまた、おそらく、読者各位に、注目すべき読みものとして歓迎されるであらう。私はもはや、言うことをひかえて、ただ、ものをそのままに提出することにした。念願するのは、各位が、作者おのこの生活と表現との発展を、子細に読みとってくださいることである。また、一般的学年状況を見くらべて、その発展の相を、あるいは徹視的にあるいは巨視的に、よみとってくださいることである。

（これらの児童作文は、当時の社会なり、世相なりをじつによく反映せしめた、好個の読みものであるとも言える。ここに見られるいっさいの内容は、今日の私どもに、多角的な回顧と反省とを強いる。わが国の教育史の一コマがここにあると言ってもよい。）

附属小学校の調査に関連させておこなった、旧制附属中学校三カ年での調査は、つぎのとおりである。

#### 対象学校

広島高等師範学校附属中学校

#### ◎ 以下にかかげる作文

実施時期

昭和十五年 二月から

昭和十七年 二月まで

対象学級

南北二組

三年連続の短作文課題

一、ぼくの父(母)

二、学校に来るまで

三、帽子

四、眼

この計画調査によって得られた作文もまた、貴重な研究資料と考えられる。

## ◎ とりあつかいの方法

### その一 とりあげかた

まず、個人ごとに見ていく。——その発展を見ていく。

つぎに、学級単位で見ていく。——学級での全体状況と、その学年発展の状況とを見ていく。

甲学級（正式に言えば「第一部」の学級）・乙学級（正式に言えば「第二部」の学級）の両方を、甲乙の順序で見ていく。

### その二 見かた

作文そのものの見かたとしては、つぎの観点にしたがう。

#### ① 作文内容

作文内容、すなわち作者の生活経験である。——作文の主題ということにもなっていく。学年が進むとともに、作者の生活経験はどのように発展していくか。

## ◎ とりあつかいの方法

(作者の生活経験は、その作文の価値内容をなすものにほかならない。内容のもり上がりに正比例して、表現の形も緊張する。)

② 発想・着想——へきりこみかた、問題把握

作者は作文するに当たって、どんな思いつきかたをしているか。同じ題目について、連年、いくども書いた作文結果が、学年の発展に応じて、着想のどのような変化を示しているか。また、その時その時に与えられた、同年の題目に対して、各作者は、学年なりに、どのような反応を示しているか。

③ 全体構造

一つの作文がつづられたら、そこには、構想の形成がある。短かい文章でおわることもあれば、長い文章でおわることもある。長短それぞれに、その一文章・一全体はしくみを持っている。しくみはすなわち分段でもある。作品に即して、段落の状況を大観した時、全体構造が見られる。

学年発展に応じて、全体構造上の、いわゆる起承転結に関するくふうなどの移行するのが、おもしろく見られるよう。

④ 叙述 面——表現力

第一に語彙が注意される。発展の段階に応じて、そこそこで、作者の用いる語彙に特色が見られよう。語は文のもととなるものである。どこでどういう語を用いるかに、作者の個性が出る。語の選択の事実は、いかにも興味ぶかい事実である。語彙の比較的豊富なものもあれば、豊富でないものもある。ところで、語彙が貧弱であったからといって、ゆきとどかない文章ができるものでもない。基本的な語彙を活用すれば、そうとうにのびの

びとした文章を書くこともできるのではないか。

児童たちは、その場の発案で、さっそくに、自己の新語を創作することがある。これによって、かれらは、自己の生活の表現を成しとげる。児童に見られる語詞創作（造語法）は、かれらの生活語彙の拡充の活動として、大いに注目される。

第二に表現法が注意される。表現法すなわち生きた文法である。一年生の段階では、ときに、いかにもたどたどしい表現法が見られる。——言い表わそうとするのであるが、どうもすっきりとは言いあらかせないのである。（が、それはそれなりに、真率な表現として注目されることが多い。）学年が進むにつれて、見ちがえるように、かれらの表現力が伸びていく。それは、だいたいなものを正しく発展させていくのであってもらいたいが、ときに、本来のすなおな表現法を落とす去っていくようなことがありはしないか。指導は、できるだけ、かれらのこの本来的なもの、そのみずみずしい表現法のすべてを、とどこおりなく伸ばしていくものであってしかるべきである。学年が進むとともに、かれらが、いよいよ思考を自由にして、新しい表現法をみずからうち出していくようであるならば、国語に生きる人の発展のしかたとして、それは理想的なことであると言える。表現法に関しては、まことに観察すべきことが多い。

## ◎ とりあつかいの方法

一 作文での全体にみられる集中度・緊縮度、つまり、まとまりのよさ（——むしろ、「まとめる力つよさ」とも言いたい。）は、作文の叙述面の表現法を問題にするうえで、最後に重要な注意事項である。かつて私がアメリカの作文教育について聞いたところによれば、大学での作文教育では、集中力を徹底的に問題にするという。（——私の聞き得た、一つの話しである。）指導者は、ひとえに各作文の集中度・緊縮度を問題にして、いく

たびでも書きなおさせるのだという。なるほど、作文のためにたいせつなのは、作者の集中力であろう。作者が諸種の表現法をどのように活用しようとも、最後の、集中度の高いものをつくりだすことができなかつたら、叙述は破綻である。(集中力が発揮されてはじめて、テーマのはっきりとした作文ができる、とも言えよう。)

### ⑤ 表記法

これが一つの観点になる。

ここで一つのおこわりをしておきたい。私が以下の作文を得たころは、かなづかいと言えば、現代かなづかい以前の、歴史的かなづかいの時代であった。したがって、一年生の児童たちも、歴史的かなづかいで書いている。本書では、ものをすべて原文どおりに公表するので、かなづかいも歴史的かなづかいのままである。

なお、当時は、ひらかな、カタカナのうち、カタカナがさきに教育された。一年生の作文は、カタカナで表記されている。

表記は、けっして作文の末端ではない。作文のしあげそのものが表記面である。叙述面は表記面と、まったく一枚のものである。

### ⑥ 推考・念入れ

通常、作文に関しては、推考の過程が考えられよう。そこには作者の自己批評というものもあるはずである。ではあるが、以下の作文のばあい、推考・念入れのあとを云々することが、かならずしも容易ではない。(書いたり消したりしたあとが、そのままに見られるようなことも、ときにはある。このようなばあいは、推考の問題をとらえることが、いくらかできる。)

◎ とりあつかいの方法

※ ※ ※

以上の、①から⑥までの六つの観点をもって、以下、各作文に臨む。作文そのものをかかげたあとで、右の番号を用いながら、任意の観点について、私見を加えてみたいと思う。

その三 二題のとりあつかいかた

二題のうち、通年一定題の「私のお父(母さん)のほうを、主対象としてとりあつかう。

## 第一章 甲学級児童六カ年の歩み

——通年一定題目「私のお父(母)さん」——

### 第一節 六児の歩みを追って

#### 前注

○ 学級には年々に転出入の異動があった。それとは別に、作文を書いてももらったその日に、病氣などによって欠席した人もあった。これらのために、一年生から六年生まででの全五回の作文を、一回も欠かさず、しおおせてくれた人には、かぎりがある。

甲学級のうちで、五回の作文の全部を出してくれた人は、二十六名である。(男児十四名、女児十二名)

○ 甲学級の二十六名の人たちを a・b・c 式の略号であらわす。

男児は「aくん」などと呼び、女児は「aさん」などと呼ぶ。

○ 本節では、男児三名・女児三名をとりあつかう。

○ この当時は、「現代かなづかい」以前の時代である。また、一年生はカタカナから習ったのであった。

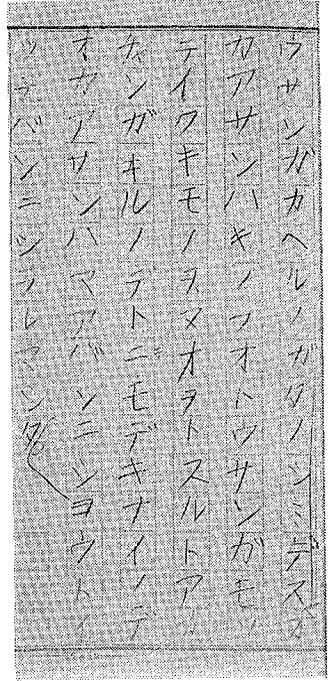
※ ※ ※

a くんの歩み

私ノオトウサン  
 ウチノオトウサンハ、キノフギンカウノトマ  
 ノトマリデイラッシャイナカッタ。アサカライツテ  
 カライツテケフマデニカヘラレルダ  
 ラウトオモツテクノシミダオトツイハギンカウノ  
 コツカイサンガフロノフタラモツテキタフロノ外ニヒクイ  
 タモモツテキタ。マダダイドコロノ外ニヒクイ  
 ニヒクイダヲモツテクルボクハオトウサンガカヘルノ

私ノオトウサン (一年)

ウチノオトウサンハ、キノフギンカウノトマリ  
 デイラッシャイナカッタ。アサカライツテ  
 ケフマデニカヘラレルダラウトオモツテタノ  
 シミダオトツイハギンカウノコツカイサンガ  
 フロノフタラモツテキタフロノ外ニヒクイタ  
 モモツテキタ。マダダイドコロノ外ニヒクイ  
 タヲモツテクルボクハオトウサンガカヘルノ



左記の番号は、二三ページに言う「見かた」での所定番号である。

- ① 身ぢかな生活内容がよく表現されている、と言うことができよう。
- ② 「ウチノオトウサンハ、キノフギンカウノトマリデイラッシャイナカッタ。」と、お父さんの不在のことから語りはじめられている。いかにもしぜんにえらばれた、特定のきりこみかたである。
- ③ むりなく、全体が、用紙内にまとめられている。らくな作文であつたらう。  
ただし、段落わけは見られない。
- ④ 題が「私の父」となるのは六年生になってからである。それまでは、みな、「オ（お）……サン（さん）」である。

「イラッシャイナカッタ」と言っている。「カハラレル」とも言っている。（——「コヅカイサン」に

ガタノシミデスオカアサンハキノフオトウサンガモツテイクキモノヲ、又オラトスルトアカチャンガキルノデトニモデキナイノデオカアサンハマアパンニシヨウトイッテパンニシラレマシタ。

ついでには、「モッテギタ」「モッテクル」と言っている。「オカアサン」についても、「シラレマシタ」と言っている。「セラレマシタ」とはしないで、「シラレマシタ」としているのはおもしろい。「スル」「シタ」になじんでいる気もちのままに、「シ」へ「ラレマシタ」をつけたか。

敬語法の判別が、かなりあると見てよからうか。

センテンスのむすびかたが、文章の後方では、「です・ます」調になっている。気づかないしぜんの変化であろう。

おかあさんのことばを、「マアバンニシヨウ」と直接法で写しているのは、印象的である。この作文の表現全体を見とおすとき、全編の緊張度はかなり高いことが認められる。作者は、「私のお父さん」を語って、特定の生活面にきりこみ、その線をつらぬいた。集中力をよく發揮している。

⑤ 句読点の意識はまだよわい。

⑥ 一、二の誤記がある。表記に念を入れることなどは、まだ考えないのである。一題の文章を書きおえたら、「ヤア、スンダ。」と、安心するのが通常なのである。

ぼくのお父さん  
ぼくのお父さんは、  
銀行へ出  
ていらしゃいます。ぼくは毎日お父さん

ぼくのお父さん (二年)

ぼくのお父さんは、○○○銀行へ出ていら  
っしゃいます。ぼくは毎日お父さんといっし

んといしに學校へ行きませす。お父さん  
は時時わらひ話をして下さいます  
あ、父さんはかへるとすぐすまうを  
きいていらします。ぼくはあきの  
うみがかつかたないかがたのしみ  
です。きよ年のなつうちのをみん  
なべつおへつれていて下さいました。  
べつおに行く時は、きも持って行きまし  
た。べつおからかへるとすぐしゆくだ  
いをしました。ぼくはおとうさんが大  
すきです。

③ 全体が、段落わけなしの一文段になっている。

④ 「ぼくはあきのうみが、かつか、かたないか、がたのしみです。」この「かつか、かたないか、」の言いかたがおもしろい。いかにもこのころの表現法らしくおもわれるものである。

段落はかえていないが、「きよ年のなつ」から回想の文章になっている。その「ました」「ました」の

よに学校へ行きませす。お父さんは時時わらひ  
話をして下さいます。お父さんはかへるとす  
ぐ、すまうをきいていらします。ぼく  
はあきのうみが、かつか、かたないか、がた  
のしみです。きよ年のなつうちのをみん  
なべつおへつれていて下さいました。べつ  
おに行く時は、きも持って行きまし  
た。べつおからかへるとすぐしゆくだ  
いをしました。

言いかたをうけて、「ぼくはおとうさんが大すきです。」と現在形でむすんでいるところは、りっぱである。——全文章のまとまりがはっきりとしている。

⑤ 二年生のこの作文になると、まことにはっきりと、句読の意識が出ていて、その表記は整然としている。

僕のお父さん(せうしゅう)

僕のお父さんは今せうしゅうがかゝつて  
兵隊さんです。お父さんは二月十五日(日曜)  
曜に出られました。お父さんは電信隊の  
から近いからついでいかうと思ひまし  
その日は午前九時までに行かなければ  
けないので僕は六時はんにとびおきまし  
た。客間を見るともうよその人が一ぱ  
来て居られました。おなかのおぢさん  
たき火をしよう。と言はれるとお母さん  
今頃は木がはいきゅうだからたかんでま  
いでせう。とおっしゅうが言はりました。服をきて

僕のお父さん(せうしゅう)

(三年)

僕のお父さんは今せうしゅうがかゝつて兵  
隊さんです。お父さんは二月十五日(日曜)  
に出られました。お父さんは電信隊だから近  
いからついでいかうと思ひました。その日は  
午前九時までに行かなければいけないので僕  
は六時はんにとびおきました。客間を見ると  
もうよその人が一ぱい来て居られました。お  
なかのおぢさんが「たき火をしよう。」と、  
言はれるとお母さんが「今頃は木がはいきゅ  
うだからたかんでまいでせう。」と、おっ  
しゅうが言はりました。服をきて庭へ出て見ると木の

へ出て見る。葉の上に雪がかゝつて居たので僕は始めて雪が降ったといふことがわかりました。やうやくいく時間が来たのでお父さんは家の前であいさつをしてくみさつをして又みゆき橋であいさつをしてくみさつをしてくみさつをした。電信隊に行きました。

葉の上に雪がかゝつて居たので僕は始めて雪が降ったといふことがわかりました。やうやくいく時間が来たのでお父さんは家の前であいさつをして又みゆき橋であいさつをしてくみさつをしてくみさつをした。電信隊に行きました。

① 題目に「せうしゅう」の語がかっこづけで記されている。作者はもはや、このように主題を意識している。

当時のことである。お父さんの出征こそは、家庭の大事であつたらう。

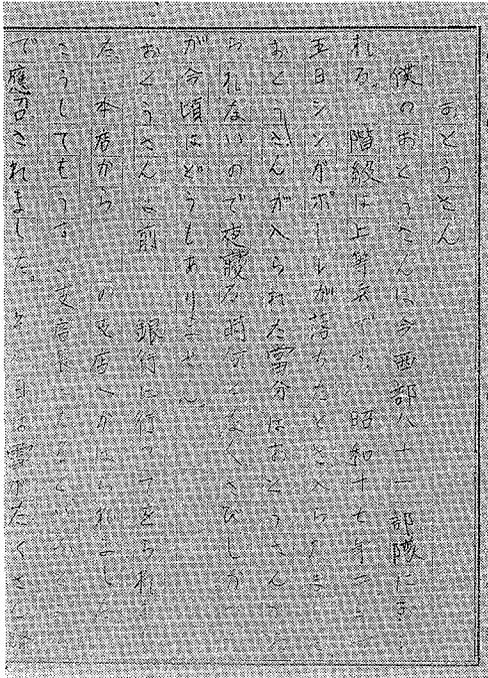
③ やはり、段落わけは見られない。

④ 「せうしゅうがかゝる」ということばを知っている。「はいきゅう」の一語は、当時の国民耐乏生活のなかで、はやくもこの人たちが身につけた単語であつたらう。

「お父さんは……出られました。」では、「出られました」と父への敬語法が用いられている。この言いかたには、広島弁の影響があるうか。「僕は六時はんにとびおきました。」とある。作者の気持ちがよく表現されている。ついで、「……もうよその人が一ぱい来て居られました。」と表現されていて、情景は

目に見えるようにあざやかである。おわりのほうで、「あいさつをして」「あいさつをして」と述べられており、入營の道行きがよくわかる。なごりのつきない、また、緊張を持続しなくてはならない、複雑な気持ちの入隊であった。

⑤ 息の長いセンチメンスが多く見える。よく、表現のすじはとおされているが、読点はあまり見えない。このころの読点意識はどうなっているのであろうか。

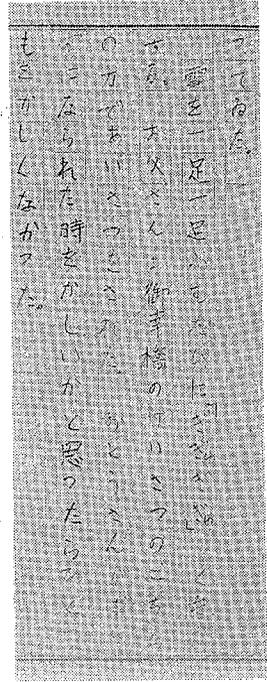


おとうさん

僕のおとうさんは今西部八十一部隊に  
 いる。階級は上等兵です。昭和十七年二  
 月五日シンガポールが落ちたとき、入られま  
 した。おとうさんが入られた当分はおとうさん  
 があられないので夜寝る時何となくさびしか  
 ったが今頃はもうありません。  
 おとうさんは前　銀行に行つてをられまし  
 た。本店から〇〇の支店へかはられました。  
 さうしてもうすぐ支店長になるといふこと  
 で応募されました。その日は雪がたくさん降

おとうさん (五年)

僕のおとうさんは今西部八十一部隊におられる。階級は上等兵です。昭和十七年二月五日シンガポールが落ちたとき、入られました。おとうさんが入られた当分はおとうさんがあられないので夜寝る時何となくさびしかったが今頃はもうありません。おとうさんは前〇〇銀行に行つてをられました。本店から〇〇の支店へかはられました。さうしてもうすぐ支店長になるといふことで応募されました。その日は雪がたくさん降



つてゐた。

雪を一足一足ふむたびに「ぎぎゅぎぎゅ」と音がする。お父さんは御幸橋のけいさつこちらの方であいさつをされた。おとうさんがぼうずになられた時をかしいかと思つたらひとつもをかしくなかつた。

- ① 内容の進展がよくわかる。
  - ② 最初の書きだしが、いかにも当時の作者のいちばん言いたかったことであるように思われる。
  - ③ これには段落わけがはっきりと出た。
  - ④ 「おとうさん」に関して、終始、「れる・られる」敬語が用いられている。自家のものに敬語を用いるのはどうか、という問題もあるが、この学年の段階では、それは問題にしないでよからう。むしろ、一貫して、きれいに「れる・られる」の言いかたをとおしているのが、作者の表現力として賞賛される。応召の日、「その日は雪がたくさん降つてゐた。」やはり大事についての記憶は、このように鮮明なのか。
- 雪を踏んだ時の音を「ぎぎゅぎぎゅ」と表現しているのは卓抜である。
- 「をかしいかと思つたらひとつもをかしくなかつた。」を、おとなの考えで理解するとなれば、これは、深刻な表現とも受けとられることになる。

私の父  
 私の父は今北支に應召で行つてゐます。行くとすぐ相変らず元氣だ。皆も體に氣を付けて、といふことと氣候はそちらと同じやうだといふことなどたくさん書いて送つて來れました。それから後の手にはかならず體に氣をつけてよく勉強しなさいといふことが書いてありました。私は親のありがたさをしみじみ感じました。まだ應召にならない時は銀行につとめてゐましたが、はいくの会などが宮島である時は私と弟をかならず連れて行つてくれました。歸りには、宮島のお宮のお話をしてくれたり軍艦の組立て細工や球の組立て細工など買つてくれたりしました。又日曜に二ならべを教へてもらつたりして勝負をしたり算数を教へてもらつたりしました。この前きた手紙に

私の父 (六年)

私の父は、今北支に應召で行つてゐます。行くとすぐ、相変らず、元氣だ。皆も體に氣を付けて、といふことと氣候はそちらと同じやうだといふことなどたくさん書いて送つて來れました。それから後の手にはかならず、體に氣を付けてよく勉強しなさいといふことが書いてありました。私は親のありがたさをしみじみ感じました。まだ應召にならない時は銀行につとめてゐましたが、はいくの会などが宮島である時は私と弟をかならず連れて行つてくれました。歸りには、宮島のお宮のお話をしてくれたり軍艦の組立て細工や球の組立て細工など買つてくれたりしました。又日曜に二ならべを教へてもらつたりして勝負をしたり、算数を教へてもらつたりしました。この前き

ち	う	ら	に	く	る	と	急	は	手	紙	が	ほ	し	く	な	ア	た	か	ら	一
週	間	に	一	度	は	手	紙	を	く	れ	と	い	つ	て	来	た	の	ア	近	
い	う	ち	に	出	さ	う	と	思	っ	て	あ	ま	す							

た手紙にこちらにくると急に手紙がほしくな  
つたから一週間に一度は手紙をくれといつて  
来たので近いうちに出さうと思つてあります。

① 事件は推移する。作者の成長と、当時の時局の進展とが、このようになりまわっているのだ。六年生ともなると、「親のありがたさをしみじみ感じ」るのか。しきりに過去を回想している。愛惜の心情であらう。

「私と弟をかならず」とあるのがよくきいている。慰問の手紙のことが、最後の話題となっている。

③ なぜか段落わけはしていない。

④ 集中力のつよさがよくうかがわれる。作者はずいぶん、表現力をつよめている。

**b** くんの歩み

私ノオトウサン

ボクノオトウサンハアメリカヘオリ  
マスボクハサビシイオウウサンハボク  
ガニネン生ニナツラアメリカカラヘ

私ノオトウサン (一年)

ボクノオトウサンハアメリカヘ、オリマスボ  
クハサビシイオウウサンハボクガ、ニネン生  
ニナツラアメリカカラ、カヘテノデス。ボク

テノコトス。ボクハソレカウレツイデス  
 ボクガニ年生ニナルノカタノソノイ  
 ニス。ボクハソレマデマタソマセソ、ホ  
 クガイマニモウニ三年タラボクモ  
 アメリカヘイキマフボクノスキノハ  
 ソコデス。ボクハソレマデベンキウラ  
 シテエラクナトクンデスオカアサン  
 モオニイサンモエラクナラナイト  
 スリカニイカレマセントオツヤイシマ  
 シタソレデボクハソレマデベンキウ  
 ウランテイイルンデスボクハオトウサ  
 ンノトコロヘイクノデス

ハソレガウレシイデス。ボクガ二年生ニナル  
 ノカタノシイデス。」ボクハソレマデ、マ  
 タレマセン、ボクガイマニモウニ三年タツタ  
 ラボクモアメリカヘイキマフボクノスキノハ  
 ソコデス。ボクハソレマデベンキウラシテ  
 エラクナトクンデスオカアサンモオニイサン  
 モエラクナラナイトアメリカニイカレマセン  
 トオツヤイシマシタソレデボクハソレマデ  
 ベンキウウラシテイイルンデスボクハオトウサ  
 ンノトコロヘイクノデス

- ① 「ボクノオトウサン」への思慕の情が、流露していて、純朴な美心が読みとられる。
- ④ 「ボクハソレマデ、マタレマセン、」こだわりなしの天真の表現がほほえましい。

ぼくのおとうさん  
ぼくのおとうさんは、ぼが一年生の  
時にアメリカからもどつたのです。  
しばらくのあひだ横川におたのです  
がまたかへってしまひました。ほひ  
ろしまえきにおくつていったこと  
を思ひ出すと、またいきたいなと思はな  
いことはありません。おとうさんが  
ゐた時一ばんおもしろかつたことは  
ふくやにいつて本を四つかつてゐた  
たいたことがおもしろかつたのです。

作者には、「カヘテノデス」「ペンキヤウヲシテエラクナトクンデス」などのように、「ノ(シ)デス」と言う表現習性がある。——これがのちの学年へもつづく。

ぼくのおとうさん (二年)

ぼくのおとうさんは、ぼが一年生の時に、  
アメリカ、からもどつたのです。しばらくの  
あひだ横川にゐたのですがまたかへってしま  
ひました。ひろしまえきにおくつていったこ  
を思ひ出すと、またいきたいなと思はない  
ことはありません。おとうさんがゐた時一ば  
んおもしろかつたことはふくやにいつて本を  
四つかつてゐただいたことがおもしろかつた  
のです。

④ 「アメリカ、からもどつたのです。」とある。一年生の時に見られた「のです」である。

「本を四つ」とあるが、この段階ではまだ「四つ」などと言うのがしぜんな段階でもあろうか。

「一ばんおもしろかったことは」と言いはじめて、「……がおもしろかったのです。」と、「おもしろかった」をくりかえしている。このころにありがちな表現法である。私は、現場でこの人の指導にあたるとしたら、にわかにはこの重複表現をいじったりはしない。はじめのうちはむしろこの種の表現法をたいせつにしようと思う。本人がそこそこで、なっとくづくの言いかたをするおもむきなのを、大いに肯定したいのである。ついでに、「のです」の習慣についても、にわかにはこれをとりさたしない。考えてみれば、「のです」のことばづかいは、将来、いつになっても、だじなことばづかいなのだ。

ただ、だまって放置するのが、指導ではないことは言うまでもない。とすると、この段階では、右の、問題とした事項を、どう指導するか。読み返させて、君にこんな習慣がありますねと語りかけるくらいが、さいしょの適切な指導になると思う。

ぼくのおかあさん

ぼくがびやうきするときでもしんせつにかいはうしてくださったときどき本んだうりに  
だうりにつれてきてくれたときどき

ぼくのおかあさん (三年)

ぼくがびやうきするときでもしんせつにかいはうしてくださったときどき本んだうりに  
つれてきてくださったいろいろなものをかっ

なものをかかってくださんです。夜のおか  
 ーばんすきな人はなんくと。つてもおか  
 さんがーばんすきです。朝は早くから  
 せてごはんをたひたりよるおそくまで  
 きておられます。時どきしかたれつ  
 あるがおかあさんがーばんすきです。べ  
 んたうでもおいしくくつてくださるの  
 もみなおかあさんのおかげです。どん  
 ながあつても大すきです。

てくださんす。家の中でーばんすきな人は  
 なんとつてもおかあさんがーばんすきです  
 朝は早くからおきてごはんをたひたりよる  
 おそくまでおきておられます。時どきから  
 れる時があるがおかあさんがーばんすきで  
 す。べんたうでもおいしくくつてくださる  
 のもみなおかあさんのおかげです。どんな  
 ながあつても大すきです。

④ 「ーばんすきな人はなんといつてもおかあさんがーばんすきです」、例のようにくりかえしの言いかた  
 がなされている。

さいごに、「どんなことがあつても大すきです」と、つけそえて、しかも強調しているのは、この時期  
 の児童の心情を思わせて、心が引かれる。

⑤ 句点を用いてなくても、一画あけることは心得ている。

僕のお母さん  
 僕のお母さんは、お母さんだ。僕がねてから僕のお母さんの服のよこねびえをしないやうに用心をしてくださる。僕は考へる、母は僕たち、あるひは私たちのたからなのだ。くはしくいへば命の綱なのだ。僕たちがいつもこうしてたのしくしてゐるのもみんな母なのだ。母といふだけ聞ただけでも頭がさがるばかりだ。僕がわるいことをした時にはよくしかられる。がとてもいい母だ。

母 (五年)

④ 作者は「僕のお母さん」という題目をしるしながら、やがてこれを消して「母」という一字の題にしてゐる。自身の家族を「さん」ぬきで呼ぶことをもはや心得ているのか。「くはしくいへば」などということが、もはやできるのか。

私の父  
 私の父はやさしい父だ。だが時々悪いことをするとたたかれます。父はタバコが一番好き

「私の父」 (六年)

私の父はやさしい父だ。だが時々悪いことをするとたたかれます。父はタバコが一番好き

第一章 甲学級児童六カ年の歩み

た	ひ	ま	さ	へ	あ	れ	ば	枕	を	ひ	き	出	し	ね	こ	ろ	ん	で	新	聞	や	ま	た	は	、	ぎ	っ	し	を	よ	ま	れ	る	。	ね	こ	ろ	ん	で	タ	バ	コ	を	吸	は	れ	る	姿	は	た	の	も	し	さ	う	で	あ	る	。	だ	が	お	こ	ら	れ	た	ら	鬼	よ	り	こ	は	い	と	思	っ	て	あ	る	父	は	り	く	つ	が	大	き	ら	ひ	だ	ち	よ	つ	と	り	く	つ	を	い	ふ	と	「	り	く	つ	を	い	ふ	な	っ	。	」	と	い	っ	て	し	か	ら	れ	る	。	父	は	か	わ	し	が	と	も	す	き	だ	日	曜	に	は	木	通	に	僕	を	つ	れ	て	つ	て	く	だ	さ	る	。	僕	は	そ	れ	が	た	の	し	み	だ	つ	た	。	僕	が	一	年	生	の	時	の	九	月	に	い	ち	ば	ん	た	く	さん	お	か	わ	し	を	か	つ	て	帰	へ	つ	た	時	の	こ	と	を	お	は	へ	て	る	あ	の	日	朝	食	の	時	父	が	「	今	日	は	朝	い	か	う	い	か	う	さ	し	て	昼	は	食	堂	で	昼	め	し	を	た	べ	や	う	。	」	僕	は	か	う	い	ふ	時	は	父	が	よ	い	な	ー	と	思	っ	た	。	本	通	を	歩	き	な	が	ら	「	ど	こ	で	か	ほ	う	か	。	」	と	い	っ	た	ら
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

だ。ひまさへあれば枕をひき出しねころんで新聞やまたは、ぎっしをよまれる。ねころんでタバコを吸はれる姿はたのもしさうである。だがおこられたら鬼よりこはいと思つてゐる父はりくつが大きらひだちよつとりくつをいふと「りくつをいふなっ。」といつてしかられる。父はかわしがとてもすきだ日曜には木通に僕をつれてつてくださる。僕はそれがたのしみだつた。

僕が一年生の時の九月にいちばんたくさんおかわしをかつて帰へつた時のことをおはへてゐるあの日朝食の時父が

「今日は朝いかういかうさして昼は食堂で昼めしをたべやう。」

僕はかういふ時は父がよいなーと思つた。

本通を歩きながら

「どこでかほうか。」

といつたら



ぼくのお父さん  
 ぼくのお父さん、今は中きなので、ぼくと、おかあさんと、日えう日や、休みに、おまいに、行くので、なみだを出して

ウチノポチ  
 ウチノポチハオツカヒニマタトキウツ  
 手ノポチハツイテクルカヘルトキモ  
 ツイテクルオ、テモオツテモツイテタル  
 木ウトウオカシラタヘ、タトウトウ  
 ウチマデツイテキタ。ボクガマリナガ  
 ラスルトポチガスグトリマス。

① 「私ノオトウサン」について書きはじめたのだが、どういうつもりだったのか、「ウチノポチ」の話しにうつっている。この気らくさもあどけない。

ス。」ウチノポチ

ウチノポチハオツカヒニマタトキウツチノポチ

ハツイテクルカヘルトキモツイテクルオツテ

モオツテモツイテタルトウオカシラタベ

チャッタウトウウチマデツイテキタ。ボク

ガマリナゲラスルトポチガスグトリマス。

ぼくのお父さん (二年)

ぼくのお父さんは、今は中きなので、ぼくと、おかあさんと、日えう日や、休みに、おまいに、行くので、なみだを出して喜こぶん

喜ぶんで、みかんやくだものやおい  
 しをくださるんで、ありがたうありが  
 たうと書いてあましたう、だん／＼元  
 が出て来ました。そして、まもどく  
 くようになると、ごかく強に後で見る  
 いてひひ出しました。が、おひしやさん  
 がそんなむりをいったら、またひどくな  
 ると、たのびやめしました。そして、  
 早くおきろと、きりがかかかて、ぬるのて  
 下に見へるのが見えます。しんぞした

をほり

で、みかんやくだものやおくわしをくださる  
 んでありがたうありがたう、と書いてあまし  
 たら、だん／＼元気が出て来ました。そして  
 字もよく書くようになったので、がく園「い」か?に行  
 って見たいといひ出しましたが、「おいしゃ  
 さんがそんなむりをいったらまたひどくなる  
 といったのでやめました。」そして朝早くお  
 きると、きりがかかかてゐるので下に見へる  
 のが見えませんでした。

をほり

- ④ さいごの一文は叙景である。どういう心理で、このくふうをしたのだろうか。こどもの胸中にはいつてみ  
 たいここちがある。

おとなの目で見ても、読みすてかねるのは、「ありがたうありがたう、と書いてあましたら、だん／＼元気

僕ノお父さん  
 僕ノお父さんは、よいお父さんだが、おこ  
 ったら、とてもひどい。だが時どきニュー  
 スを見につれて行つてくださる。夏には  
 海いすいよくはなんかいもくもつれ  
 て行つて下さる。夏休に東京へつれて  
 行つて下さる。冬はスケイトやスキーにも  
 つれ行つて下さる。時にはれんへい  
 を一週してこいといはれる。その時は  
 犬と一つしよに走る時もある。夏は犬を川

が出て来ました。」というところである。作者、子どもは、どの程度の気もちで「おましたら」と、「た  
 ら」の言いかた（「理由表現」の言いかた）をしたのだろう。  
 ⑤ 書き出しの一画あけに、とくべつの考慮がはらわれている。この君がまた、さいごに、「をはり」と完  
 結を明言しているのはおもしろい。この段階の人たちにも、首尾意識が、このように、はっきりしている  
 のか。

僕ノお父さん (三年)

僕ノお父さんは、よいお父さんだが、おこ  
 ったら、とてもひどい。だが時どきニュー  
 スを見につれて行つてくださる。夏には  
 海いすいよくはなんかいもくもつれ  
 て行つて下さる。夏休に東京へつれて  
 行つて下さる。冬はスケイトやスキーにも  
 つれ行つて下さる。時にはれんへい  
 を一週してこいといはれる。その時は  
 犬と一つしよに走る時もある。夏は犬を川

を川にのせて行ってさうしたり砂ばらで走し  
られることもある

につれて行ってあらつたり砂ばらで走しられ  
ることもある

⑤ 「僕」という漢字を書こうとする気もおこるこのころでも、ひらかなとかたかなとの混用はやむをえないことなのか。

一方、「ゝ」と「。」をつかいわけようとする気もちが発達してもいる。

お父さん

僕のお父さんは日露戦争の時に兵隊さん  
になつて出陣されたのである。時には無限の  
ころのお話をよくお話になるが自分のこと  
は一つもお話に出ないからおもしろくない時  
にはとちゆうでわすれたとかといつて  
話をやめてしまふからおもしろくない  
前に旅行をするときでも僕がもしこし見よ  
うといふと

「お父さん」

お父さん (五年)

僕のお父さんは日露戦争の時に兵隊さん  
になつて出られたのである。時には兵隊の  
ころのお話をよくお話になる、が自分のこ  
とは一つもお話に出ないからおもしろくな  
い時にはとちゆうでわすれたとかといつて  
話をやめてしまふからおもしろくない。  
前に旅行をするときでも僕がもしこし見よ  
うといふと

「お父さん」



しては、おれが自分の子はとておはいかられ  
 ます。おれが自分でそのおれをあげると比呂志とい  
 ふ僕の下の子がゐます。それがあつて子供に泣き  
 けた時比呂志が  
 「あの子が僕をおつたんよ。」  
 とおつた子供を指さした。その時はたまた  
 ておれがまじたがその子供がまたいぢわる  
 事をしたときお父さんは比呂志の前でとて  
 おれとお怒りになりとうとうゆるされまし  
 た。お父さんのきげんのようにときは夏であれ  
 ば、もうビールのまれ冬ではお酒をとて  
 た。お父さんのまれ冬ではお酒をとてた  
 顔はとておれ  
 人のまれ冬ではお酒をとてた顔はとておれ  
 られぐんぐんいびきをかいて寝られます。そ  
 してたばこすきていつもたばこをふかし一日  
 に三箱に十分にはれます。ので部屋がたば  
 この煙りでふたたくてたまりません

① なるほど、このお父さんは「とてもからだが健康」なかなのだ。

私ノオトウサン  
 私ノオトウサンハ  
 ヨソカラカヘッ タトキハオトウサン  
 スグオゴハンヲ、タベテスグ、  
 ヨソヘツレテイッ テモラヒマス、  
 ウチノオトウサンハダイスキデス、  
 アサオキテミルトガッカモウツイッ  
 ヤウイガシテアルノデ、

前の作文について、この作文でも、お父さんの生活を、よくとりまとめて見せてくれている。

④ 「ある子供に泣された時」などと、「ある」が言えるのか。

お父さんのきげんのよい時は、「夏であれば、もうビールをのまれ」、この「もう」が生きている。——  
 くりかえし読み味わずにはいられない「もう」である。

お父さんの歩み

私ノオトウサン (二年)

私ノオトウサンハ、  
 ヨソカラカヘッタトキハ、  
 スグオゴハンヲ、タベテスグ、  
 ヨソヘツレテイッテモラヒマス。  
 ウチノオトウサンハダイスキデス。  
 アサオキテミルトガッカモウツイッ  
 ヤウイガシテアルノデ、

私ハウレシイオゴハンヲタベテ、  
 ガツカウヘイクシタクヲシテ、  
 オトウサンモウイッテモインデスカ、  
 トイヒマストオトウサンハモウイッ  
 テキナサイトイヒマシタ。私ハササトニ  
 モツヲモツテガツカウエイキマシ  
 タ。

私ハウレシイオゴハンヲタベテ、  
 ガツカウヘイクシタクヲシテ、  
 オトウサンモウイッテモインデスカ、  
 トイヒマストオトウサンハモウイッテ  
 キナサイトイヒマシタ。私ハササトニ  
 モツヲモツテガツカウエイキマシタ。

- ① お父さんについて言いたく思ったことを、こだわりなしに言っている。あどけない。
- ⑤ 一行一行のもうけかたに特色がある。

私のお父さん									
私のお父さんは、	い	っ	て	も	私	を	お	よ	ば
はれになる時には、	ち	ゃ	ん		ち	ゃ	ん		

私のお父さん (二年)  
 私のお父さんは、いつでも私を、およぼれ  
 になる時には「○ちゃん、○ちゃん。」といは

といはれますので私はすぐおとうさん  
 のしこないよ行って私ははいとい  
 っておたいどころへ行ますとおとう  
 さんに「ちゃんたばこうをもつてお  
 いで」といつて私に「行ってはいはれ  
 るのでお父さんのしこないをいつて  
 いますとお父さんはやかましい」と  
 いはれますので大いそぎでもつてき  
 ますとお父さんにおりこうだった  
 といはれます お父うさん所はよこ  
 がばですかうあさおつとめにいかれ  
 るのは七時三十五分ころにでかけ  
 になりますのでお父さんと「いよ  
 にいきます おつとめからかられて  
 私たちをおよばれになるとき私のお

れますので私は、すぐおとうさんのしこない  
 よいって、私は「はい。」といっておだいどこ  
 へ行ますと、おとうさんに「〇ちゃん、た  
 ばこうをもつておいで。」といつて私にいっ  
 ても、いはれるので、お父さんのしこないを  
 いつていまして、お父さんは「やかましい。」  
 といはれますので、大いそぎでもつてきます  
 と、お父さんに、「おりこうだった。」といは  
 れます。お父うさんの所は、よこがばですか  
 ら、あさ、おつとめにいかれるのは、七時三  
 十五分ころにでかけになりますので、お父  
 さんといっしょにいきます。おつとめからか  
 いられて、私たちをおよばれになるとき、私

ちに、は大かた「と」がつくのですから  
 まようちへんにいつておるおとうとおよ  
 まだはみすすの「と」しかづとしみつ  
 つとしみつ、「と」ははれすす  
 のでよくわかりませんです。そして  
 おはあさんかざくわかうないてしよ  
 うと。おっしやいました。さの、うお  
 とうさんが、私のうたをつくられま  
 したので、私は、けふの、あき、お父さん  
 のうたをつくりました。

のうちに、は大かた「と」がつくのですから  
 いま、ようちへんにいつておるおとうとおよ  
 ばれますのに、「と」しかづ、としみつ、「と」  
 あき、「としひこ。」といはれますので、よくわ  
 かりませんです。そしておはあさんが「よく  
 わからないでしよう」と。おっしやいました。  
 きのおとうさんが、私のうたを、つくられ  
 ましたので、私は、けふの、あき、お父さん  
 のうたをつくりました。

② 前につづいて、この作文ものびのびとしたものである。興にのって、ずいぶん長く書いている。(ぬきんでて長いほうである。)

おとなの知恵で言えば、とかくのことも言われるが、これはこれなりに、内容のゆたかな、その展開のさせかたの自由な作文である。読者として、私は、このような日常生活の幸福をたっとびたく思う。

③ どういうきわに、分段意識などが、あたまをもたげてくるのであろうか。

④ 「私を、およばれになる時」、「私たちをおよばれになるとき」、このようにていねいな言いかたがなされている。広島弁のもとの家庭のことばのしつけの反映がここにある。 (広島弁には、とかく「れる・られる」敬語をよくつかうという特色がある。)

私がひきつけられた一つのおもしろい言いかたは、「お父さんの所は、よこがばですから」の一句である。

私のお父さん

私のお父さんは、やさしいお父さんです。いつも日曜日には、どこかに行つて行つてくたさるので私は、日曜日かたのしみです。この前の日曜日に、けつこんしきがあつたので行かれましたが、それに行つて行つてもらつた。雨の降日は火鉢にあたりながらお話をして下さいます。あんまり遊べなざるとべんきやをさします。此春、いなかにいながら行つて行つてもらへます。今年

私のお父さん (三年)

私のお父さんは、やさしいお父さんです。いつも日曜日には、どこかに行つて行つてくたさるので私は、日曜日かたのしみです。この前の日曜日に、けつこんしきがあつたので行かれましたが、それに行つて行つてもらつた。雨の降日は火鉢にあたりながらお話をして下さいます。あんまり、遊びすぎる、べんきやをさします。此春、いなかに行つて行つてもらへます。今年お休の時によそ

お休の時はよーりようかうをします。  
なによりお父さんが一番よいと思ひます  
私のお父さんはなんでもかつて下さいま  
す。それからお父さんはかへうれであす  
わりになるすぐその日のことを私たちに  
おたづねになります。私のお父さんは一  
番よいと思ひます。此春お父さんはしな  
に行れるのでつらいやら、さびしいやら  
学校に來て居ます。

へ、りようかうをします。なによりお父さん  
が一番よいと思ひます私のお父さんはなんでも  
かつて下さいます。それからお父さんは、  
かへられて、おすわりになるすぐその日のこ  
とを、私たちにおたづねになります。私のお  
父さんは一番よいと思ひます。此春お父さん  
はしなに行れるのでつらいやら、さびしいや  
らで、学校に來て居ます。

① 内容がととのえられてきた。一年生の作文から、この三年生の作文へと見とおしてきて、いかにもと、作者の発達が理解される。

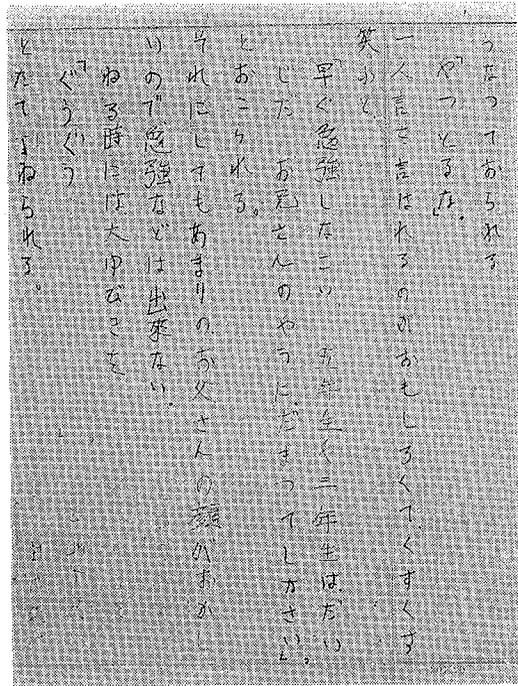
② 「私のお父さんは、やさしいお父さんです。」とあって、作文のきりこみかたが肅然としている。以下の内容の整頓のようす・傾向は、はやくもこの一文によってうかがうことができる。

④ おわりが、「つらいやら、さびしいやらで、学校に來て居ます。」となっている。私など、思いもよけることもできなかったことは、全文章がむすばれていて、心をうたれる。「やら」ということは、もはやこんなにつかうことができるのか。「……やら、……やらで、がっ学こ校う來に居きています。」と言っていると

ころに、この一文章の表現をしめくくろうとする意識も美しく輝いていて、注目をひく。

「おとうちゃん、りりん……。」  
 「がら、くくく。」  
 「おとうちゃん、お帰へり。」  
 台所の方からお母さんが、手をふきふぎ出てこられる。にここに顔に、自転車の電灯の目かきを消される。  
 みんなそろって夕食だ。  
 お父さんを、始め、みんなにここに、御飯をいただく。お父さんは、絶ずお酒を、のんでおられる。  
 今では、目がえを、はめて、おられる。目がねを上により下にやりめんどうさうにされてある。  
 やがて夕食もすんで、私達は、勉強にかゝるのだ。お父さんは、目がねをのけて、虫めがねを持って、新聞をひろげてよまれる。  
 「ふむ」

私の父 (五年)



うなつておられる

「やつとるな。」

一人言を言はれるのがおもしろくて、くすくす笑ふと、

「早く勉強しなさい。五年生や三年生は、

だいいだ お兄さんのやうに、だまつてしなさい。」

とおこられる。

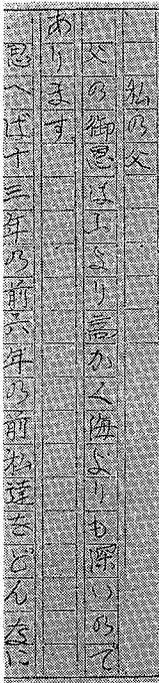
それにしてもあまりの、お父さんの顔がおかしいので、勉強などは出来ない。

ねる時には、大ゆびきを

「ぐうぐう……！」

とたてゝねられる。

- ① 題が「私の父」となる。六年生のも「私の父」である。この時期になると、こうなるのか。
- ② 「私の父」などと言えるころあいの子らしく、もはや作文のしくみを考える。劇構成ふうの発想である。ずいぶん発達したものだ。私もはしぜんにおもしろく読まされてしまう。
- ③ 以上に述べたことがらと相応することであるが、段落わけのくふうがりにみられている。
- ④ 段落わけのくふうのなかで、要所要所に、「みんなそろって夕食だ。」「やがて夕食もすんで、私達は勉



私の父 (六年)

父の御恩は山より高く海よりも深いので  
あります。

思へば十三年の前、六年の前、私達をどん

強にかゝるのだ。」というような、きっぱりとした表現がとられる。(作者は女性である。)

「ふむ」、「やつとるな」、こうしてお父さんのことばの直写に成功していく。

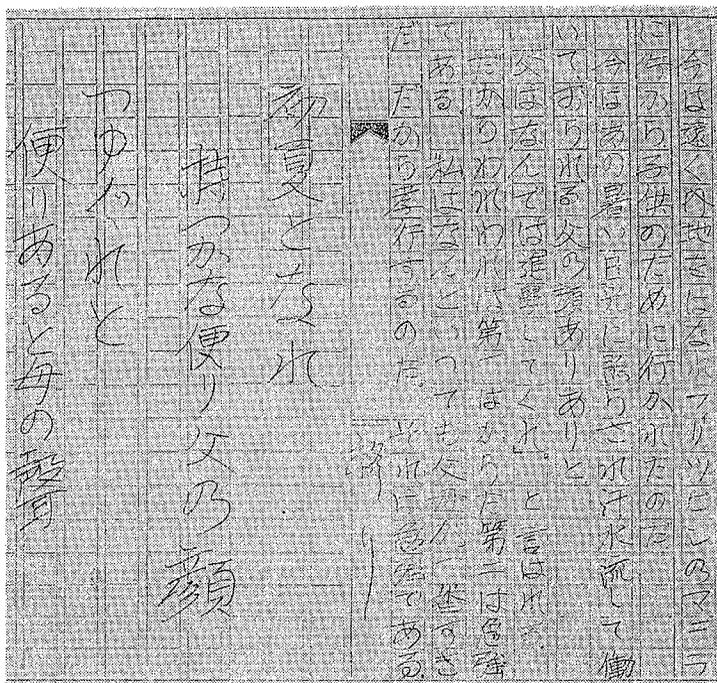
あとは私などが指摘しないで、読者のかたがたに、この作文の表現のおもしろみを求めていっていったほうがよからう。——前後に、とりたてたいことが多い。

⑥ 「ねる時には、大ゆびきを」以下の、さいごの三行については、作者は、念を入れて読みかえすことをしたのだろうか。全体の完成のために、このところは、もうすこし考えてもらいたかった。

(私が、作者とここを問題にしたとする。まず、夜分のことからの移りゆきを追っている、作者の記述を、共同で確認する。つぎに、「早く勉強しなさい。」と言われているのに、「お父さんの顔がおかしいので、勉強などは出来ない。」というのであれば、そのさきをもっとおもしろく書くことはできないかたずねてみる。そのあたりをもうすこし考えて、「ねる時」の記述にうつっては、とすすめてみる。——あるいは、理屈ぬきに、『おわりの三行を書きかえてごらんください。できればいくとおりにも。』とも言ってみたい。)

育て、下さつたか。六年前、附國のしけんがある時、白神社におまひりして下さつた時、私達兄弟の事であればどんなことでもまされます。その父は、とてもねほです。私達がおこしに行く時、半分ぐらゐねておられます。おきられる時は、さつとおきられますが、そんなことは、めつたにありません。それに父は、新聞ばかり見て、たばこを、よくのまれます。おこられる時は丸い目をいつしやう丸くしておこられますから、とてもこわいんですが、なかなかおこられません。十八年の大風の時に、かへつてこられたかつかうはゆうまでありません。とてもおましるひかつかうです。しやつ一枚になつて、くるい、つくろつてあるずほんをまくりあげ、黒いぼうしをかぶり、タホルを首にまきつけ、弁当箱をこしにさげたかつかふ。

しかしながら父は子供の事ばかり思つてゐられる。



④

「です・ます」調でとおすすめのかとおもったら、あとのほうで、そうでないものになっていく。これにと

今は遠く内地をはなれ、フィリッピンのマニラに行から、子供のために行かれたのだ。  
今は、あの暑い日光に照らされ汗水流して働いておられる父の顔ありありと。

父はなんでは「進学してくれ。」と言はれる。  
だからわれわれは、第一はからだ第二は勉強である。私ほんといつても父母が一番すきだ。だから孝行するのだ。それは勉強である。  
終り

初夏となれ

持つかな便り父の顔

つゆぐれと

便りあると母の聲

もなつて、叙述内容にも不整頓が見られる。

が、ここで私は、その不整頓などを言うよりも、むしろ、作者はいたいという表現心理だったのでらうと、そのことにとくに興味をおぼえる。六年生の表現者としては、私どもに考えさせることを、ずいぶん多くなげだしてくれている。

六年生ともなると、こんどはどのように父をえがこうかといったふうに、さうとうの考慮をはらったり、また苦慮したりもするのだろうか。ともかく課題は与えられていて、「父」を書かなくてはならない。えがく態度はかくかくでなくては、といった判断も、もはやさうとうにはたらくことか。

## b'さんの歩み

私ノオトウサン  
ウチノオトウサンハキョクカラカヘツテボウ  
ボウヤハイツデモオトウサンニダカレテキマス。  
レテキマス。オチアサレガ  
ボウヤハイツデモ外へ出タガッテタマリマ  
リマセ。

私ノオトウサン (二年)

ウチノオトウサンハキョクカラカヘツテボウ  
ヤハイツデモオトウサンニダカレテキマス。

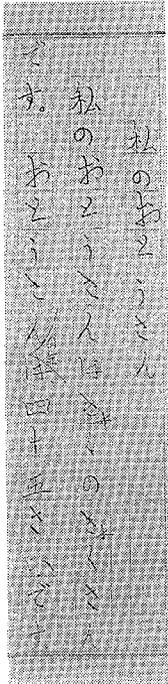
(作者消去)

ボウヤハイツデモ外へ出タガッテタマリマセ  
ン。

② 第一のセンテンスの主部分は、「ボウヤハイツデモオトウサンニダカレテキマス。」になっている。そのようなはこびになっていくのにもかかわらず、このセンテンスのはじめは、「ウチノオトウサンハキョクカラカヘッテ」と、「ウチノオトウサンハ」の書きだしとされている。題目に応じて、ウチノオトウサンのことを書こうとした発想のさまが明らかである。

私は、「ボウヤハイツデモ」という言いかたになっていくセンテンスであるのにもかかわらず、この文が「ウチノオトウサンハ」ではじめられているところに、作者のいとも従順な心性を見る。——(きつと、すなおな性質の持ち主なのだろうと想像したくなるのである。)

④ 第二センテンスに「出タガッテタマリマセン。」との言いかたが見える。「出タガッテ」のあとで思考が屈曲している。——あなたになっっている。おとな流の判断をもってすれば、ちょっと変な表現になっっているとも言えようが、子ども流の思考生活に即応してこれを受けとるならば、児童の柔軟な思考がここに見られるとも言える。言いたいことを、ぼつんぼつんと自由に積み重ねていっているのだ。このようなことは、児童たちが、しぜんのうちに、思考力の自己訓練をしているのだとも解することができる。



私のおとうさん

私のおとうさん (二年)

私のおとうさんは、きよくのきよくさんです。おとうさんの年は、四十五さいです。朝



おとうさんは私よりあ、と、きよく  
いかわれます。

あと、おとうさんは私よりあ、と、きよく  
いかわれます。

- ① 一年生の作文からこの作文にきて、作文内容の成長・発展におどろかされる。こうものびていくものか。
- ② 「私のおとうさんは」と書きはじめるところは、さきの「ウチノオトウサンハ」と、まったく同一の発想法である。

全体に「私」が頻出する。この事実は、作者の「書く生活」の自覚の一表示と見られて、とくに注目される。

- ④ 「おとうさんがしんぶんをよんでぐらゐに、私はかほをあらひよると」の「よんで……」はおもしろい。この「よんで」は、読む人を尊敬した言いかたになっている。(広島方言流の言いかたである。)おとうさんが新聞を読んでいるあいだに、作者は顔を洗う。「ぐらゐに」の言いかたがまたおもしろい。

私のお父さん  
お父さんは局へ行つてお仕事をなさ  
ます。起るとすぐ新聞をよまれます。  
は、いそがしい。お父さんのそばでは、

私のお父さん (三年)

お父さんは、局へ行つて、お仕事をなさ  
います。起るとすぐ、新聞をよまれます。朝は、  
いそがしいので、お父さんのそばでは、静か

ふにしていなければなりません。私達が学校からかへつて、勉強をすませて、遊んで、五時頃お歸りになります。すぐ弟は、「お父ちゃん、おすまふをとらう。」と言つて、待つて居ます。一度は、かたなければ聞きません。又は、妹や私もお父さんをころがしに行きます。とう／＼叱られて止めます。御飯がすむと、妹や弟達と一しよに、ラムネツキンを渡して、お父さんに、「てじなをして下さい。」と言ふと、お父さんは、「よしのむよ。」と言つて、口の中へいれます。「今度は、出すよ。」と言つて、上手に出されます。お父さんは、「今度は目の中へいれるよ。」と又、上手に、いれます。お母さんは、涙が出し／＼、笑はれます。私達は、見えた／＼と言つて、今度は、私がして見ましたが、すぐ

に、していなければなりません。私達が学校からかへつて、勉強をすませて、遊んで、五時頃、お歸りになります。すぐ弟は、「お父ちゃん、おすまふをとらう。」と言つて、待つて居ます。一度は、かたなければ聞きません。又は、妹や、私もお父さんを、ころがしに行きます。とう／＼、叱られて止めます。御飯がすむと、妹や弟達と一しよに、ラムネツキンを渡して、お父さんに、「てじなをして下さい。」と言ふと、お父さんは、「よしのむよ。」と言つて、口の中へいれます。「今度は、出すよ。」と言つて、上手に出されます。お父さんは、「今度は目の中へいれるよ。」と又、上手に、いれます。お母さんは、涙が出し／＼、笑はれます。私達は、見えた／＼と言つて、今度は、私がして見ましたが、すぐ

お父さん  
 私のまとうところはよくたばこをおのみに  
 なります。又は新聞をよまれます。新聞をよ  
 まれないときは、めつたいにありません。  
 二階へあがつて見ると新聞がたくさんおい  
 てあります。又は、火鉢の中にたくさんあり  
 ます。ころげてあたり灰の上にたててあたり  
 してあります。下へもたくさん火鉢の中へも、  
 庭へもおちてあります。

たねが、わかったのもう、  
 うまく、かくされるわかります。暖い日曜に  
 は、どこかへ連れて行って下さいませ。私  
 は、お父さんが大すきです。

- ① 生活内容の表現が、こんなにはっきりしてきた。
- ④ 文章をしめくくる意識も、しっかりとしている。

お父さん (五年)  
 私のおとうさんは、よくたばこをおのみに  
 なります。又は、新聞をよまれます。新聞を  
 よまれないときは、めつたいにありません。  
 二階へあがつて見ると新聞がたくさんおい  
 てあります。又は、火鉢の中にたくさんあり  
 ます。ころげてあたり灰の上にたててあたり  
 してあります。下へもたくさん火鉢の中へも、  
 庭へもおちてあります。

わかりました。たねが、わかったのもう、  
 うまく、かくされるわかります。暖い日曜に  
 は、どこかへ連れて行って下さいませ。私  
 は、お父さんが大すきです。

二階の火鉢も、下の火鉢も庭へもたばこがたくさんおちてある。でたばこの花でも咲いてる。多やうに思はれるほどたくさんおちてある。おとうさん、新聞がくるころにちがうに、おとうさんは新聞がくるころにちがうに、すぐ子どもたちに「新聞はまだか。まだか。」といはれます。私たちは、「こないよ。」といひます。そんなに新聞やたばこがおすきでせうと思ひます。日曜の時にしやぼんだまの中にたばこの煙をいれになつて子どもたちをよるこぼされになります。私がおとうさんに「たばこをやめなさい。」といふとおとうさんは「こんどからやめるやめる」といはれてもなかなかおやめになりません。

③ はっきりとした思考作用が、この作文の分段をきれいなものにしてゐる。——このように、子どもの考える力は、どんどん発達してくるのだ。

私の父は郵便局長で、毎日朝八時頃お出  
 かけになり、夕方は早い時は四時頃お早い時は  
 六時半頃歸へられる。  
 毎日、々々新聞を読まれたは、こも目に何回か  
 ちまれる。いつか、たばこのすいがらを見るとき  
 たばこのかすがたくさんある。時にそれを  
 うじすると父は喜んで下さる。  
 時には私・妹・弟を相手にしてみんなを笑  
 はせたりなさる。内中、父は一番おもしろい。  
 時にはすもふをしたり、歌を歌つたり、弟と相手  
 になりたりなさる。しまひには弟は立ま出し

④ かぎかっこをつけながら、会話を写している。この会話文投入の技量と、明確に文章段落を立てていく力とは、密接に関連したものである。

父親に「たばこをやめなさい。」と言っている。このような表現もやはり、思考力の発達からくる当然の一帰結であった。

私の父 (六年)

私の父は、郵便局長でおられる。毎日、朝八時頃お出かけになり、夕方は、早い時は、四時頃お早い時は、六時半頃歸へられる。

毎日、々々、新聞を読まれ、たばこも、日に何回からまれる。いつか、たばこのすいがらを見ると、たばこのかすがたくさんある。時に、それをさうじすると、父は、喜んで下さる。

時には、私・妹・弟を相手にして、みんなを笑はせたりなさる。内中、父は、一番おもしろい。時には、すもふをしたり、歌を歌ったり、弟と相手になったりなさる。しまひに

つくまつて母の所にすがる。  
 父は内中でかしらでなされる。  
 日曜にはいつても遠方の方へ子どもたちを  
 つれて元気に外へでる。今では日曜は意気  
 揚に出られるので父とあそべない。時には  
 散歩につれていつても下さる。日曜は  
 いつても肩のミヒばかりなされる。  
 父は夜になると毎日々々のやうに習字を  
 する。  
 父は何でもやりぬくといつたらどこま  
 でもやりぬかれる。私も父のやうにどこま  
 りぬかなければならぬところを実行  
 するまねをしなければならぬ。  
 父は大すぎだ。

① ここで「郵便局長」がはっきりと出てくる。

作文の内容が、読者によく伝わってくる。このような作文の書き手は、すでに、「時に、それをさうじ  
 すると、父は、喜んで下さる。」と、気をきかせてそうじする人にもなっているのである。

は、弟は泣き出してしまつて、母の所にすがる。

父は、内中で、かしらでおられる。

日曜には、いつても遠方の方へ、子どもたちをつれて元気に外へでる。今では、日曜は、屋まで肩に出られるので父と、あそべない。時には、昼からでも、散歩につれていつても下さる。日曜は、いつても、肩のことばかりなされる。

父は、夜になると毎日々々、のやうに習字をなさる。

父は、何でもきらいな物は一つもない。

父は、何でもやりぬくと、いつたら、どこまでもやりぬかれる。私も父のやうにどこまでもやりぬかなければならぬところを実行するまねをしなければならぬ。

父は大すぎだ。

このような人であるから、また、「父は、何でもやりぬくと、いつたら、どこまでもやりぬかれる。」と、父の長所を指摘する。ついでは、自己の決心を述べるのである。

③ 分段のさまがよいよきれいになってきている。むすびの一段落・一文段、「父は大すきだ。」は、力づよいものになっている。

④ 「日曜には、いつでも遠方の方へ、子どもたちをつれて元気に外へでる。今では、日曜は、昼まで局に出られるので父と、あそべない。時には、昼からでも、散歩につれていつて下さる。日曜は、いつでも、局のことばかりなさる。」ここには、一文段形成での、思考の混乱がある。が、私は、四つのセンテンスのかかわりあい矛盾をつく前に、この第一センテンスのつきには、このような第二センテンスを持ってき、そのあとまた、このような第三センテンスを持ってき、やがてまた、このような第四センテンスを持ってこなくてはならなかった(あるいは持つて来ないではいられなかった)作者の心情を、このましく思う。思考の混乱とも言える状況が、かえってよく、作者とその家庭の日常生活をほうふつさせているのではないか。

もっとも、いつまでもこうして肯定してばかりはいられない。このような表現の心情に同情したあかつきは、やがて、このような表現内容の分節について指導するところがなくてはならない。指導して、書かせれば、作者は、このところを、矛盾なく書きひろげていくことができよう。

じさんの歩み

私ノオトウサン  
 ウチノオトウサンオトウサンハ、シゴトカ  
 トカヲカヘテラレタシタ。オゴハンノツギハ  
 カイツモカエラレヌ。ワタカシハ  
 ホウサンガカヘテラレタシタオガオ  
 ハヤチカベテトオモイユシカスル  
 ナフロエハイレノコトヲソドワ  
 ズハンオタバラレタスル。スルトボ  
 ッケトカラオカシオガサレタシカハ  
 シワリノリキニオトウサンガオス  
 オウサンガオスシカ。

① 一口に言えば、未分節的とも言えようか。

私ノオトウサン (二年)

ウチノオトウサンオトウサンハ、シゴトカ  
 カヘラレマシタ。オゴハンノトキイツモカエ  
 ラレマス。ワタクシハオトウサンガカヘラレ  
 マシタオガオハンヲタバテトオモイマシタ  
 スルトヲフロエハイレマシタコンドワラゴ  
 ハンオタバラレマシタ。スルトポケッケトカ  
 ラオカシオダサレマシタ。ハシワソノツギニ  
 オトウサンガオスシオクダサイマシタ。

私のお父さん

きのふお父さんがくみやいからおかへりに  
 かりに正なりました。それからお父さんが「〇〇〇き  
 さんが」そのまをすてく不  
 でおしやいました。それを私に  
 しました。それから人どはどこ  
 おでかけになりました。それから  
 さんは「やすだへ。」とおしやいま  
 した。それから「おみやげか  
 けてあげ。といひました。それから  
 おでかへおでかへていりました  
 おはんをたへてすこしおさんで  
 力をねえとすましたかお父さん  
 かへるのまちたいのでまだねません  
 でした。お父さんがかへると

私のお父さん (二年)

きのふお父さんがくみやいからおかへりに  
 になりました。それからお父さんが「〇〇〇き  
 ものをだしてくれ。」とおしやいました。  
 それを私はだしました。それからこんどは、  
 どこへおでかけになりますかとときまると、お  
 父さんは、「やすだへ。」とおしやいました。  
 すると、いもうとが「おみやげかってきて。」  
 といひました。それからお父さんは、おでか  
 きになりました。ごはんをたべて、すこしお  
 さんでそれから、ねようとなりましたがお父さ  
 んがかへるのまちたいのでまだねませんでし  
 ました。お父さんがかへったときはもう十時でし

そう十時でした。みろとお父さんの手にもっていらるそのは、大へんのおみやげでした。それをみたくもつた。よろこびました。

た。みるとお父さんの手にもっているものは、大へんのおみやげでした。それをみたくもつた。よろこびました。

① この内容のもりあがり、まったく、私どもの目をみはらさせる。一年の作文にくらべて、なんと発展の大きいことか。

思考の整理が、こんなによくできるようになった。ずいぶんの発達である。

③ 全体のしくみが、みごとにできあがっている。「それをみたくもつた。よろこびました。」のむすびのセントランスも、そうかと、私どもにひびきをうたせるほどのきになっっている。

④ 「お父さんがかへるのまちたいのでまだねませんでした。」の「まちたいので」の言いかたに心が引かれる。

よく言えたと、大いにこれをほめてはどうか。

私のお父さん  
 朝は早く家をでて夜  
 はおそくおかへりにたります  
 間なく日が暮れてきた。お父さんはまだ  
 おかへりにたりますせん。私はけいちゃん  
 をおひいてお父さんをおむかいに行きま  
 した。すると向かふのはうに小さくじてん  
 車のつてくるものがありました。だんだん  
 えちかよつて見るとそれはお父さんで  
 あつた。私はお父さんといつた。お父  
 さんは「けいちゃんとおつしやつた。私  
 はけいちゃんを見た、するとけい  
 ちゃんを見つけた。新聞につつまおもち  
 ました。」

私のお父さん (三年)

私のお父さんは、○○○○○○○○○○に出  
 出しておられます。朝は早く家をでて夜はおそ  
 くおかへりになります。

間なく日が暮れてきた。お父さんはまだお  
 へりになりません。私は、けいちゃんを、お  
 へりにお父さんをおむかいに行きました。する  
 と向かふのはうに小さくじてん車にのつてく  
 るものがあります。だんだんちかよつて見る  
 とそれはお父さんであつた。私はお父さんと  
 いった。お父さんは「けいちゃん」とおつし  
 やつた。私はけいちゃんを見た、するとけい  
 ちゃんは新聞につつまおもちらつてゐた。

② 作者の観察力を認めたい。「すると向かふのはうに小さくじてん車にのつてくるものがあります。だん

だんちかよって見るとそれはお父さんであった。「三年生ともなれば、もはやこのようなことが言えるのか。「私はけいちゃんを見た、するとけいちゃんは新聞につつまおもらってゐた。」と、これまた、冷静な観察である。作者のきりこみかたには注目すべきものがある。

④ 観察力の発達、着想力の向上、問題把握力の発達にともなつて、叙述力もまた増進していく。「私はお父さんといった。」読んではっとさせられる的確な叙述である。

子どもたちも、その精神の発達につれて、しぜんのうちに、叙述をくふうする力を見せるようになるのだ。描写力ともいってよいものが、また、だんだん発達する。

さきの二年生の作文のさいごには、「それをみたいもうとはよろこびました。」とあった。この三年生のさいごにもまた妹が登場せしめられており、「私はけいちゃんを見た。すると………もらつてゐた。」とある。前後の二つの作文に、およそ一年のへだたりのあることであるが、作者はこうして、どちらへも、妹を登場させ、各作文の結末を、うつくしいもの、みのりゆたかなものにしてゐる。

お父さん

私のお父さんはお酒がだいすきでいつもお酒によつては、よくとちゆで、ねて帰り、時には、朝の一時に帰る事があります。ゆうべでも十二時になるにまだかへられ

お父さん (五年)

私のお父さんはお酒がだいすきでいつもお酒によつては、よくとちゆで、ねて帰り、時には、朝の一時に帰る事があります。ゆうべでも十二時になるにまだかへられ





第一章 甲学級児童六カ年の歩み

No.	
だ い れ	「だーれ。」 と い っ て お き ま す。
ま た 父 は 朝 酒 に お 酒 が す き な の で 配 給 所 の 人 か ら よ ん で も ら っ た り し ま す。	また父は非常にお酒がすきなので配給所の人からよんでもらったりします。で父が帰るのがたのしみで、夜十一時でも十二時でもまたれます。
父 は お そ ろ し い 時 は お そ ろ し く も う そ れ は そ れ は ね と ば さ れ さ う で す。	また父はいちがひで母もこまってるゐます。父はおそろしい時はおそろしくもうそれはそれはねとばされさうです。
朝 靴 の か ゝ り は 私 で す。	とくにお酒をのんだ時。
でも私は父がだいすきです。	朝父の靴のかゝりは私です。でも私は父がだいすきです。

⑥ 作者の思考力がいかにすぐれたものになっているかは、ここでの推考のあとによっても、じゅうぶんにうかがうことができる。作者はみずから赤線を用いて本文をなおしている。「批判力」といってよい、作者の力も、またここに明らかであろう。

第二節 甲學級他兒童作文

d くん の 歩 み

私ノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサンハ、アサヲキルノガハヤクヲキテゴハ、ソヲタイテデキタラ、ゴハンノオカマヲ、オロシテ、マタオカズヲタイテオカズガデキルトオサラニオカズヲタヒテ、ダイヲダシテ、オカズヲダイニノセテマッテキラッシャイマシタ。オトウサンハ、ヒトリテオゴハンヲタバテイラッシャイマシタ。

ようにある、かぢよしに、いらっしやいましたので、

うちがさびしくなりました。お父さんが、かへられるとその、あくる朝八時半までに〇〇〇〇の学校へいかれます。おとうさんは、女学校の先生です。ほくは、

一べん、お父さんに、つれられて、女学校にいった時は、みんな、おもしろそうにあそんでゐました。また、おとうさんは、おごはんを、いただく時にもおそいです。ほくといっしょにたべても、どうしても、お父さんの方がおそくなります。また、うちを、出るのもお父さんの方がやっばり、おそくなります。

ほくのお父さん

(二年)

冬やすみに、お父さんは、きしゃにのって、さいじ

僕のお父さん

(三年)

僕のお父さんは、もう大分年をとつていらつしやる

ので朝はおそくをきられます朝お父さんのじげふがある時は、〇〇女学校へおつとぬになります。夕御飯を

お父さん

(五年)

いただくときは、毎日〳〵その日のできごとやいろ〳〵のお話をなさいます。僕のお父さんは、お酒をたくさん飲まれます。お酒のない時ははつかいちの谷口へ行つて、もらつておいでになります。お父さんは、

僕の家のお父さんは、今頃〇〇高女の先生でもう年をとつてをられるので、学校へ出られる時と、出られない時が時々ある。もう年をとられたせいとか、今頃は、かぜをよくひかれる。

僕がおかしくおかしくて笑つて行ただけでは、なかなかお笑ひになりません。はらがわれるぐらい笑つたら、お父さんも笑れます。お父さんがお叱かりになるとひどいので、僕はなるべく叱かられないやうにしました。しごとをする時には「年をとるとしごとができません」とおつしやいます。僕が学校でわるいてんを取る時、しつかしべんきやうをしたら、そのやうにわるいてんを取られんよ。とおつしやいます。いいてんを取つて来ると、べんきやうしたら、「えゝてんを取るだらうがい。」とおつしやいます。

御飯の時、僕達が御飯を、をはつて、すこし話しをしてゐる時から御飯をたべられる、いつでもお父さんは、御飯をたべられるのがおそい。又御飯の時、みんなで、今日一日のできごとを話すのだ。お父さんは、「もう年をとつたせいとか、仕事が出来ないやうになつた。」

とおつしやつた、するとお兄さんが、  
「やつぱり年をとると仕事が出来ませんね。」  
とお答へになつた。

僕の家には、蟲が大分<sup>ダイブ</sup>あつて、僕達のいない日には、いつもお父さんがやつて下さるのだ。が僕達が家にいる時はせいっぱい働くのだ。お父さんは、若い時か

ら、畠・田を耕されるのだらうと思つた。

私の父

(六年)

僕の「父」は、もう年よりです。父は、めつたに笑はれません。夕食の時は、お酒を飲んでおられました。配給になつて、あまり飲まれなくなりまし。又歯が悪いので、三度の御飯は、大方おかい。又

今「父」は、六十五才で、「父」の六十才の頃は、僕等といっしょに畠をたがやしに行つておりましたが、今では、その元気がなく、おもに兄がしてゐます。

父は、酒は飲まれますが、煙草は、あまり飲まれませ

ん。  
今頃、話で聞いて見ますと、父の、若い頃は、ちよつとでも、不平をいふと、とてもきびしく恐つていたのださうです。だが、今頃は、年を取られて、あまり恐られません。

父は、元〇〇〇〇高等学校の教ゆをしておられました。が、そこをやめられて、今の〇〇〇〇女学校(昔の、〇〇女学校)へ通つておられました。が、つい最近にやめられて、今では、ずっと家へ居られます。

又、ちよつと、町に出て行くのも、

「足がだるいので、行かれん。」

といはれます。だから、あまり外へ出られません。外と行つても、家の前の畠やら、中の畠などには、よく行かれます。家の中では、よくおさう掃をされます。

父は、もとくゝ体は、よかつた方ではなかつたさうです。だから、僕達に、「体を、よくきたへ。」といはれます。

夕食の時など、よく、兄と話をします。兄が学校から帰るのが、おそいと、父は、御飯もおいしくないと言はれるほどです。

僕は、今からうんと父に孝行しようと思ひます。

「終」

eくんの歩み

私ノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサンハ、マイニチガツカウヘイラツシヤ  
イマス。オトウサンハ、イクモガツカウヘイクノガオ  
ソイデス。ソレハ、ナガクネルカラデスボクガゴハン  
ヲタベルトキニハ、マダタイガイナラネテキマス。  
マタオトウサンガアカリヲツケルグラヒハヤクオキル  
日<sup>ヒ</sup>ガアリマス。オカアサンモノ日<sup>ヒ</sup>ハハヤクオキマス  
ボクモニイチヤンモオバアサンモネイヤモハヤクオキ  
マス。ボクハカホラアラテゴハンヲイタダキマスゴハ  
ンハ、オントニオイシイデス。ゴハンヲス。ンデカ  
ラオネヤヲタトムヒカアリマスマタアソズヒモアリマ  
ス。

ぼくのおとうさんは、朝おきるのがおそいです。ぼくたちが、学校へ、行く時、目をこすって、出て、いらっしゃいます。

かへってあらしやるのは六時ごろかへってあらしやいます。またよそでごはんの時もあります。ときくくりよこうもあります。ぼくのおとうさんは、かぐくです、おとうさんはじっけんよしの、めがねを持ってあらしやいます。

時々、おやすみになります。時々、おやすみがない日があります。

毎日かぐくのべんきやうがあるのでせう。おとうさんの年は四十五です。きよ年はとうきやうへ行きました。さうしてこくぎかんへおぼさんたちへ行きました。しなの家だといって手のぶらぶらしたのがいすべやといひますからびっくりしました。

ぼくのおとうさん

(二年)

僕のお父さん

(三年)

僕のお父さんは、毎晩、勉強をしておいでのになります。お父さんは、大学の先生をしておいでのになります。前は、電車で学校へおいでになつて居られましたが、今頃は、ジテンシャでおかよひになつて居られます。学校から、帰へつておいでになる時間は、だいたい、五六時です。おせい時は、八九時です。ちか頃は、りよこうへ幾度もお行きになりました。おととひもお父は、りよこうから帰へつておいでのになりました。わすれましたが、お父さんは時々七時頃、寢床に入いられる事があります。

お父さん

(五年)

僕のお父さんは、大学の先生です。お父さんは学校へ、自転車でおいでのになります。いつでも雨が降つたら電車でおいでのになります。

朝は、お父さんはおそく晩僕が勉強をしてゐる時に、学校からお帰りになります。それで僕がお父さんを見てゐる時はすくないのです。

お父さんはいつでも、

「静かにしてくれ。」

とすぐおつしやいます。

僕が三つの時上野動物園へつれていただきました。ちやうど、おつとせいがはなの上へマリを、のせてゐたのがまだ、きおくにのこつてゐます。お父さんは静かなのがおすきなだからそれをまもらうと思つてゐます。

私の父

(六年)

僕の父は大学の化学の先生をしてゐます。あまり遊ぶのはすきではない方です。しかし鳥や学校の仕事になると一生けんめいでやつてゐます。そして父はあん

まりきちょうめんな方ではありません、そのしようこに大学の父の部屋へ行つてみると机の上の大こんざつをしてゐます。

私は勉強でいくら考へてみてもわからない時はいつも父に聞きます。するといつでもていねいに教へて下さいます。しかし一番こまつた事は父がゞだとかむつかしい事を言ふ時です。それから父はひぢようにお寢ぼうです。晩十時頃寝て朝は九時頃いつも起きておいでゝす。しかし今頃はだんぐ早くなつて僕より早く起きる事があります。父はまた、たばこが大すきです。朝から晩までぶかりぐとやつておるでゝです。それで僕がよく

「にこちんのちゆうどくになりますよ。」

といと「うんぐ」と言ひながらまたぶかりぐとすつてゐらつしやります。またお酒のきらひなのにはおどろきました。お友達があるれば少しはのむのですがあんまりのまない方です。お父さんはやつぱりいゝで

す。

### f くん の 歩 み

私ノオトウサン

(一年)

アキニオトウサントラクラクエンヘカイスイヨクニイ  
キマシタ。ラクラクエンヘツイタトキアイスケーキト  
キヤラメルラカツテクダサイマシタ。ソレカラオルゴ  
ハンヲタベマシタゴハンガスムトヤスンデ、ソレカ  
ラアビニイキマシタ。ソレカラアビテアガツタラカニ  
ヲトリマセウトイヒマシタソレカラカニヲトラウトス  
ルトエビガデテキマシタ。ボクガムカフノハウニカニ  
ヲトリニイタトニボクハカニオトツテカヘツテミタラ  
エビヲオトウサンガテニモツテイラツシヤイマシタボ  
クハオトウサンエビヲトツタノデスカトヒヒマシタオ  
トウサンガトツタノヒトオツシヤイマシタソレカラボ  
クモドコニオッタノトイヒマスタアナニオツタヨトイ

ッテクダサイマシタ。ボクハソレカラエビオトリマシタ。

僕のおとうさん

(三年)

ぼくのお父さん

(二年)

ぼくのお父さんは、舟へのつてゐます。のる前は、まい朝ぼくがねていると、お父さんが、おこしてください。ま。それでぼくはおきます。学校からかへると、すぐべんぎやうをしないとおつしやいます。時には、お父さんが、まちへつれていつてくださいます。それから、ほんを、かつてきてくださいます。いまも舟にのつていらつしやいますが、ちやうせんのはうでりんごを、おくつてくださいます。かへられた時は、せんべいをもつてかへられて、みんなにはけていただきます。ぼくのお父さんはほんたうによいお父さんです。

僕のおとうさんは、船長だ。時々、帰へられる。帰へられた時は、とてもうれしい。なぜかと言ふと。おはなしや、おみやげがあるからだ。前へかへられた時は、ドイツノせんたうきメサーシユミツドで今どは、日本のせんしやだ。おとうさんは、ドイツせいのぼうえんきやうをもつておられます。おとうさんの船。は、マレーヤフリツピンやタイや。ホンコンの方へ行つておられます。時々手がみをもらふときもある。ぼくのおとうさんはよいおとうさんだ。

をはり

ぼくのおとうさん

(五年)

ぼくのおとうさんは船長だ。

「じやぶじやぶ」風呂の中だ。「おとうちゃん今度の船の名は何丸。」とぼくはきいた。「〇〇丸。」といは

れた。「何千トン。」ときくと、おとうちゃんは「一万二千トン」といはれた。

ぼくのおとうちゃんはよいおとうちゃんだ本でもかつてくださるし。ニュウスでもどこでもつれてあつてくださる。二年生のとき一度船に乗せてもらつたことがある。ぼくのおとうさんは渾軍よび中尉だ。おとうさんは渾軍のことならたいしてつておられる。おとうさんはドイツにもアメリカにも昔しいかれたことがある。ドイツにいかれた時に自動車と馬をかつてきてくださった。たいで一ヶ月するとかへつてこられる。長い時でも一ヶ月と少しするとかへつてこられる。長く家におられる時は春だ。

ぼくのおとうさんはとてもよいおとうさんだ。

をほり

私の父

(六年)

僕の父は船長だ。今まは、家におられるが、また、今度船にのつてのだ。父はやさしい時はとてもおもしろいことをいはれる。

ひまな時はいつも、つくの前にすはつて新聞を読むか又た、なにかの計算をしながらたばこを吸つておられる。父は、たばこが大すぎだ。酒も大いぶすぎだ。

父は、朝はやくおきて新聞よむか鳥の手入れをしている。今頃運ゆう部にとめてゐらつしやる。父はドイツにもアメリカにも船でゆかれた。時々その時のお話をしてくださいます。本でも為になる本であつたらかつてくださいます。運ゆう部でもらつたものでも全部もつてかへつてくださいます。父はたくさんお菓子をとたべません。父はとにかくたばこがすぎです。風呂に入いつた時も手先についたやにを軽石でごしごしとこすつてのけてゐます。朝は早くおきてよるもおそくねてです。よる、おそくねても朝早くおきるの船で毎日のやうにやつてゐのからなれてこられたのでせ

う。

をはり

## gくんの歩み

私ノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサンハマイアサカイシヤニイッテンゴト  
オシテカヘッテデスカヘテノハバンニカヘッテノデ  
ス。コノマノ日エウニオトウサントボクトカイシヤヘ  
ツレテイッテモラヒマシタ。カイシヤニハ小サイニモ  
ッラッンデイクキ、シヤガアリマシタボクノ前ヲバリ  
ニノカネオッンデトホリマシタ。

ぼくのお父さん

(二年)

ぼくの、お父さんは、向ひなだと、かいたの、あひ

だにある〇〇せいこうしよにつとめて、いらつしやい  
ます。朝七時にうちを、出てです。お父さんは、かい  
しやでてっぼうのたまなどを、作っていらつしやいま  
す。ぼくが、一年生の時、お父さんは、ぼくを、つれ  
て、お父さんの、かいしやに、いったこともありま  
す。お父さんのかいしやには、トロッコが、ありま  
す。お父さんが、かいしやからかへつての時に、は、  
時々おすしを、かっってくださいます。お父さんは、こ  
のあひだ、レコードをかっつけてくださひました。お  
父さんは八時にかへられます。

僕のおとうさん

(三年)

僕のおとうさんは、かいしやへ、つとめて、いらつ  
しやいます。毎日、朝早くから、夜おそくまで、かい  
しやて働たらいていらつしやいます。時々、かいし  
やへとまつて、其つぎの日のひるかへつての日もあり

ます

日曜日には、グライダーやひかうきなどをつくって  
くださいます。晩には、時々食堂へつれて行つてもら  
ひます。おとうさんは、やさしい時にはやさしく、叱  
つての時にはひどく叱つてです。

お父さん

(五年)

お父さんはよく会社から電話をかけられる。きのふ  
も電話をかけられた。ぼくが出ると、

「マイクロゼーを買つておいてくれ。」

と、言はれた。お母さんに話すと、

「家にかへつてから言つてもいいのに。」

といつて笑はれた。

おとうさんの会社は、〇〇製鋼所だ。ぼくもその会  
社の前まで行つて見たことはある。会社の前に、小  
さい川が流れてゐた。その川の、はしにはトロツコの

線路がしいてある。ぼくが行つた時はトロツコが通つ  
てゐた。小さな機関車が五六だいつないで、走つてゐ  
た。

おとうさんは、時々おもしろいことをなされる。おく  
わしを小さいおとうとに、見せびらがした。おとうと  
は、それをほしがつて取らうとする。おとうさんはた  
べるまねをしてかくされる。おとうとは、泣き声を出  
す。すると耳の方からだしておとうとにやる。ぼくに  
くれていることはない。さんばつはおとうさんにしても  
らつてゐる。少し、いたい。いたいよといふと、さう  
かと言つてバリカンをなほされる。ぼくはおとうさん  
がすぎだ

私の父

(六年)

僕の父は会社につとめてゐる。いつも晩はおそく帰  
るので楽しい晩御飯も楽しく過すことが出来ない。し

かし、日曜日などは、いっしょなので、とてもおもしろい。

身長はしらないがさうたう高い。そうして体かくは大変よい。御飯の時など姿勢が悪いと、すぐ注意してくれてので、今頃は、だいぶ姿勢がよくなった。

父はもと電信隊に出てゐた。それで電信隊のお話をしてくれる。でき事とか、聞いた話などいろいろある。又、通信訓練のやうな事をしてくれる。僕は、父にはとてもかなはない。

父の顔は真面な顔といつても、少し笑つたやうな顔である。その顔が笑つたなら、いつそうおもしろそうに笑ふ。しかるときは、横目のやうにしてしかるので、とてもおもしろい。

しかし平生は、いつもやさしく、会社でおくわしの配給などがあると、物つて、帰へり弟や僕に下ださる。又、ノートがないと言へばノートを買て来て下さる。そうしてよく意見をのべて下さるので、まちがふ

事、少くして行けるのだ。

このやうな父であるから、僕達は安心して、のびて行くのである

### hくんの歩み

私ノオトウサン (一年)

ウチノオトウサンハボクトオフロヘイッタトキイツモ  
ボクヲアラツテクレマスウチノオトウサンハオサケハ  
キライデオサケライッコモノミマセンソレカラオヤツ  
ハイッコモタベマセンオトウサンハアサ早くカラオキ  
マスバンハオソクカラネマス

ぼくのおとうさん (二年)

ぼくのおとうさんは、○○○○○○○○の、地理の先生です。朝、学校へ行かれる時と、昼から、学校へ行

かれる時と、朝、学校へ行かれて、昼から、また行かれる時も、あります。おとうさんは、京都へ行かれる時が、あります。おとうさんが、京都へ行かれた時は、たべものを買って、こられます。おとうさんが、さんぽへ行かれる時、遠い所へ行かれる時は、ぼくをつれて、近い所へ行かれる時は、弟をつれて、行かれます。おとうさんが、学校から、一番おそくかへられる時は、ぼくたちが、夕ごはんをたべて、ゐる時、にかへられます。京都から、かへられる時は、夕ごはんすんでから、かへられます。

僕のおとうさん

(三年)

僕のおとうさんは、○○○○○○○学校の地理の先生です。しかし、時々用事があつて、京都やたい北へ行かれて、そこで生とををしへられます。京都へ行かれた時は、五日位で帰られますが、たい北へ行かれた時は、

は、半月ほどたつてからお帰りになります。おとうさんは、今年四十六さいになりました。さうして、二月一日にお生まれになりました。おとうさんは、いつも午前六時半頃に、起きられます。さうして、午後十一時頃寝られます。おとうさんは、僕たちがじつと、おとうさんのおかほを見て居ると、すぐおかしいかほをされるので、僕たちは大笑です。僕はおとうさんが大好きです。

おとうさん

(五年)

僕のおとうさんは、○○○の地歴の教授である。時々、台北へ行かれて、○○○○○大学で、地歴をお教へになる。又、京都へ行かれて、○○○○○大学で、地歴をお教へになることもある。今年で、四十七歳になられた。今年の二月のはじめに、台北へ行かれた。帰つてこられてから、台湾のはなしや、船のはなしをして

をられた。台湾は、二月でも、とても暖くて、二月頃が、一番、花の咲く時だといわれた。又、果物は、反対に一番少い時であるが、それでも、バナナなどは、いつでもあるさうだ。船のはなしをしてをられた時、大洋丸が沈んだ時のはなしを、せられた。はなしの仕方、おもしろいので、みんな大笑ひだつた。おとうさんが、はなしをなさる時は、おもしろいことを、すぐいはれるので、おかしくてたまらない。

### 私の父

(六年)

僕の父は、○○○○の地理の教授である。それでよく、○○○○の生徒さんが、うちに来られる。

父は、いつも、六時頃起きて、僕達より後で、学校へ行く。

僕達はみんな、お座敷に寝るが、父だけは、離れに寝てゐる。

父は、とてもたくさん本を持つてゐる。二十位ある本箱に、本がいつばいつまつてゐるが、それでも、まだ本を入れきらず、本箱の前や、階段などに本が積んである。離れの三では、本でいつばいだ。

又、雑誌も、いろいろなものを、とつてゐる。全部で、十種類位あらう。

父は、日曜の午前中、ほかに用事がなかつたら、きまつて本通の方へ行く。さうして、本を買つて来るので、本がますます多くなる。午前中といつても、いろいろな用事をすませてから行くので、十時から十一時の間に家を出て、帰つて来るのは、十二時から、一時過ぎまでの間だ。

父は、いつもやさしいが、おこつたらひどい。しかし、やさしい時には、いろんな話もしてくれる。僕は、父が大好きだ。そして、この父に、しつかり孝行をしようと思つてゐる。

d'さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

ウチノオカアサマトヨシエチャントオカアサマノオクニハイッテイラッシャイマス。私ハオトウサマトオバアチャン、オニイチャントマイニチコタツニネテマイニチオカアチャンハ9ノカニオカイリニナルトイッテマイニチネルネルオトウサマトマイニチイテネマシタソレカラアサオキテガッカウヘイキマス。ソレカラベソレカラアサオキテアソビニイキマシタ。

私のお父さん

(二年)

私のお父さんは、このおとついごくんじゃに、おいでになりました。ごくんじゃからおかへりになつておふろにはいりました。それからおごはんをた

べて、かるたやすごろくをしてばんきやうをしてねました。けふからひろ島けんや山口けんやいろんな所のかんぬしさんが六十人私のおいえにおとまりになりました。おとうさまが毎日六時におきて、たいこをおならしになります。その人にはぎっじんじやでばんきやうをする人です。その時私はおかしがほしかったので、おとうさんおかねを下さい。ときくとここにあるといてさいふをおあけになって「そらとばしたそのれんきどけいの下に」とおっしゃいました。私が「あのおかねわあながあいとらんよ」といふと、お父さんはたんの所にあるよ」とおっしゃいましたので、「あれはたんすの、あなよ」といひました。「私がねえちやうだい」といふとお父さんは、「あははおかし」とおっしゃいました。「ちよこれーとをあげるよ」といってちよこれとを下さいました。なかには、つくたへびがにーとでました。

私のお父さん

(三年)

私のお父さんは、いつもほがらかで、いつも元気で  
す。からだはとても太つてゐます。私の小さい時に  
は、毎日のやうに、映画館かんにつれていつて下さ  
たが、今頃は晩強がいそがしいのでちっともつれていつ  
て下さらない。しけんてよいてんをとれば、ときど  
き、にぎやかな所えつれていつて下さる。つれていつ  
て下さらない時は、おみやげをたくさん帰つてきてく  
ださる。

お父さん

(五年)

私のお父さんは、とてもよくふとつて、とても体格  
がよいのは、ちよつとみておどろきます。

私の家は、お宮なので朝夕毎日お父さんはお宮をおは  
きになります。

「おほい——。」

「はあ——。」

「ごみとりかごをもつてきてくれ。」

といはれるので

「かごだけ。」

といふと

「そうそ。」「ごみとりかごと、くまでだ。」

といはれるので

また

「はあい——。」

と大きな声をたてて

お風呂の前に行きかごとくまでとをもつて行きますと

「えらかつた。」

とおほめになります

それをいつもくくりかへしになりますだからよくふ

とつて、体格がよいのでせう。

私の父、

(六年)

私の父は、とても体が大きく、すもう取さんのやうです。

若い時は、二十四かんも、あつたそうです。

今では、神職として、毎日く白い着物、を着いろい  
ろな、のりとを、いそがしさうにかいてゐます。

朝と夕方は、いつも、つかさず、竹ぼうきで、お宮  
の前を、はきます。

「小さい時は、病気をして、とても、体が、よわか  
つたが、神職を、しだして、お宮を、はきだしたか  
ら、こんなに、じやうぶになつたんだ。」

と、いつも、とくひそうに、言ひます。ので、私も、  
いつも、中着一枚になつて、お宮を、はいたり、水ま  
きをしたりします。

おきげんのよいときは、ときどき牛田の方へはたる  
をとりにつれてゐつたりして、くださる。映画につれ  
て行つて下さつたり、夏などは、舟にのつて、魚を、

つりに、海へつれていつたりして下さる。

およばれに、いつて、おみやげを、たくさん、もつて  
かへられるので、私たちが、ほうぼつて、たべると

「けんかを、せすに、よくかんで、おいしいか、お  
いしくないか、よく、あじあつて、たべなさい。」  
とやさしくおつしやいます。

お菓子のかんかで、

「わたしのが、小さい、わたしのが、大ほいい。」  
といつて、けんかをすると、

おほきな顔を、もつと、もつと、大きくなさいませ  
そんなことは、一箇月に、一回か二回かしかありませ  
ん。

「この間、けんこう、優良じに、えらばれたんよ」  
といふと、お父さんは、顔を、おいべつさんのやう  
に、目を、細くして、真赤な顔でお笑ひになりました  
ので、一家、一どに、おほ笑ひです。

## e' さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

ウチノオトウサンハ、私ガカヘルトイツモコタツニハ  
ツテキマス。私ガエウフクラキカヘテベンキヤウラシ  
テコタツノ所ヘキテミルトイツノマニカオトウサン  
ハ、イナクナツテキマス。マタアソンドコタツニハ、  
イルト大キナアシガアリマス。上ニムイテミルトオト  
ウサンカグウグウイビキラカキテネキマス。アクル  
アサオキテマタフトンニハイッテキマシタ。スコシタ  
ツテカラオキテエウフクラキエウトスルトオカアチャ  
ンガクンチャンオキナサイトイヒマシタ。スルトオト  
ウサンガドウシタコトカフント大キナ大キナコヘデド  
ナリマシタ。

私のお父さん

(二年)

私のお父さんは、せいが高く、めがねをかけていら  
っしゃいます。お父さんは、おいしゃさんです。それ  
で、いつでもしんさつばへ、いらっしゃいますが、  
ひまな時おくへは行って、いらっしゃいます。さうし  
て、こたつへあたつて、ねていらっしゃいます。私  
は、日えう日かどえうの、ぼんにはお父さんにスート  
へ、つれていってもらひます。

私は、お父さんよりお母さんの方が好きです

私のお父さん

(三年)

私のお父さんは海軍の軍のさんです。治はくれの海  
軍病いんへかよつていらつしやいましたが今年の二月  
に昭南島へお出になりました。お父さんは、とても背  
が高く、目がねをかけていらつしやいます。さうし  
て、やさいを作のがおすきなので、庭いばい島にして

いました。お父さんがくれへかよつていらつしやる時は、いくら夜、おそくなつても、かいちゆう電燈を、つけて、虫を取つていらつしやいました。

おとうさんが、いよく軍艦に乗つておいでになる前に、「毎日『よい子供元気な子供つよい子供。』といつたらお父さんは、あん心する。」といひのこして行かれました。

お父さん

(五年)

私のお父さんは、海軍の軍医です。

少し背が高く、目がねをはめて、をられます。

病院へ居る時は、朝から、ずつと表へ出てをられ、夜は、おそくまで、おきてをられ、御飯を一しよに食へる事は、めつたありません。又、朝は、九時頃まで、寝てをられます。式の日、学校から帰つてから、お父さんがおきてこられ、

「早く学校へ行かないとおくれるよ。」

と、いはれた事さへあります。

お父さんがおうしやうになられて、呉きんむの時も、日曜だけお帰りになり、昭南島に行かれた半年は、一度もお父さんのお顔は、みられませんでした。けれども、時々送つてくるお手紙の中に、元気なお父さんのお写真がはいつてみました。今度、仙台へ行かれてから、一度、しゅきんで、帰へられ、春休みに私たちが行つたので一月に一度は、みてみます。

私の父

(六年)

私の父は、今年四十四歳であります。怒ると、とても恐しく、反対にはめられる時のやさしいあの顔といつたらまるで人が違ふやうです。

父は、いつも私達子供のことを考へてくれます。堺町の病院では、空気が悪くて、子供の健康によくない

といふので、わざわざ、舟入へ新しい家を立ててくれたり、庭に鉄棒をつけてくれたり、いろいろな事をしてくれました。

朝は、私達より、ずっと早く起き、庭の畠へ出で一生けんめい働きます。さうして、野菜などには、不自由をしないやうにしてくれます。又、なすの手入の仕方だとか、とまとの芽のつみ方、おいもへの肥料のやり方など、いろ／＼私達に教へてくれます。

夕食など一しよに食べると、よく、偉人の話や、衛生の話、世の中のいろいろの話をして、私達を感ぜさせます。それから父は、寝ることがよほどすぎと見えて、ちよつとひ間があると、すぐ、横になり、牛の鳴き声みたくないびきをかいて寝ます。私達が夜おそくまで、起きてゐると、

「早く寝なさい。／＼。」

とすすめてくれます。私の父は、ほんとうによい父だと思ひます。

## f'さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

私ノオトウサンハ、カイシヤガハヤイトキニハイツモ  
オフロヘイキマス。サウシテカヘツテオゴハンオタバ  
テネマスサウシテヨガアケテアサゴハンヲタバテオト  
ウサンガカイシヤニイツテサウシテ私ガガツカウヘイ  
クシタクオシテガツカウヘイキマシタ。サウシテガツ  
カウカラカヘツテペンキヤウオシテキマシタラオトウ  
サンガカヘツテイラツシヤイマシタサンシテオゴハン  
ヲタバテネマシタ。サンシテアサヲキテオゴハンオタ  
ベテオトウサンケフハドコヘイクノトキキマストオト  
ウサンハクレテイクトオツシヤイマシタ。

私のお父さん

(二年)

一月十九日の日曜日、おとうさんが、ゐなかへ、いらっしやるので、朝ごはんを、早くたべました。おとうさんが、「もうそろそろ行くしたくを、しやうかな。」と、おっしゃいました。とうとうおとうさんが、おでかけに、なりました。「いってらっしゃい。」と、私がいひました。お父さんが、「今日は日曜日だから、赤ちゃんのおもりを、しなさい。」と、おっしゃいました。私は、赤ちゃんのおもりを、して、べんぎやうをして、あそびました。夕方おとうさんが、ゐなかから、おかへりに、なりました。その時お父さんが、「つかれたよ。」と、おっしゃいました。

私のお父さん

(三年)

私のおとうさんは、とてもやさしくて、よいおとうさんです。私が、けんくわなどとすると、こはいが、学校

で、勉強をよくしたり、先生にほめられたりすると、お父さんはとても気げんがよくて、何でもして下さる。

お父さんに叱られると、私は、いつも心の中で「お父さんは、おらない方がよい。」と、此の間、頃は、思つて居たが、此の頃は、私が、悪かつたと、思つて、すぐなほす。お父さんは、時々、「〇〇はとてもおねえさんらしくなつた。お父さんが、おこつたのは、悪かつた。」とおっしゃる。私は、うれしくて、涙が出た。お父さんは、いつでも会社へ、行く時には、かならず、「一生けんめい勉強しないよ。」と、おっしゃつた。私は、お父さんよりもよい人はないと、思つた。

おとうさん

(五年)

私のおとうさんは、私が、よいことをすると、やさしい顔です。

とこやからおとうさんが帰られると、いつでも、外の

所は、きれいにそつて、あるが、鼻の下のひげが、きまつたやうに残つてゐます。

「おとうさん、どうして、鼻の下のひげをそつてもらはないの。そつてもらつたらほがらかなのやうで、やさしいが。」

といふと、

「それもよいが、やさしかつたら○ちゃんたちが、あまへてばかりゐるからよ。」

とおつしやる。

おとうさんが居られると、とても、にぎやかです。この間のぼん、暁も小夜子も眠つてから、お父さんお母さんと、仕事をしてゐると、突然お父さんが、

「ぼつぼつぼ鳩ぼつぼ。」

と歌ひ出された。

お母さんも、まげずに、

「てつぼうかついだ兵隊さん。」

と歌ひだされた。私も、

「山田の中の一本足のががし。」と歌つた。ほんたうに、ほがらかな、晩だつた。

## 私の父

(六年)

私の父は、第一によくしかる父です。

でもその割に、会社から帰つた時やなどは、とてもほがらかで、私たちがよい事をしたりなにかすると、よくほめて下さる。

この間弟が、私のものを取つて、「ぼくは取りやしない。」といつてなかく聞かないので、父にいつたら、ひどいことを、弟がしかられた。その時は私に、少し、ひいきをして下さつていたからだ。家では、父に何でも、たくさんあげる。

父は、酒とたばこをいつもよく吸ふので、いつも父が、

「お父さんは、酒とたばこをよく吸ふから、もうや

めようかね。」

よくおつしやるが、

「でもね、お父ちゃんが、今まで吸つて居た、たばこをやめたら、体を悪くするよ。」といつて私が、とめてあげる。

父は、とても、妹をひいきされる。いいものは、妹に一ばんたくさんで、一ばんよい所をやられるので、へんな顔をして居ると、

「○ちゃんたちは大きいので、小さい時に、たくさんたべたから、もうあげなくてもいいんだよ。」と、おつしやることがある。

私は、父の前では、いはれないので、弟とよく、

「でもね、晁ちゃん、わたし等のお果子の配給は、あるから、それだけたべなきやいけないね。」

といつたりする。でも、どう考へても父よりありがたい物はないので大切にせねばならない。

### g'さんの歩み

私ノオトウサン

(一年)

私ノオトウサンハマイバンヨソカライツモイツモヨソカラバンニオカヒリニナリマス。ノデ私ノオカアサマガネムクテモネラレマセン、アサニナルトオトウサマガオキテキテ私ノオハナラツマミマス。ノデ、私ハ、ネムラレマセンノデス。マタ私ノホオベタヲライライニナリマス。コンドハオニイサマノ所ヘイツテオミミヲライライニナリマス。マタ。オニイサマノオハナラヲツカミニナリマス。マタ。私ノホオベタ。ラツメツタリシマス。私クシハオコツテオトウサンラツメツタリタタイタリツメツタリシマス。私ノオトウサマハバンオネボシマス。ノデ私ハ、オハナラツマミマス。

ヲハリ」

私のおとうさん

(二年)

私の、おとうさんは、一月二十一日に、しんるいのおちさんが、せんちから、がいせんなざるので、一月十八日に、ゆかれてけふの昼すぎごろをかへりになるのでしんるいのふみこちゃんや、おかあさんわしんるいのおちさんが、がいせんなざるので、えきにゆかれましたが、私とをばあさんだけわをるすばんをしました。私ハ、学校にいつてゐたのでいかれませんでした。おばあさんは、うちのやうじがあるのだからかれません。私ハ、けふおとうさんがしんるいのおぢさんと一しやうにかへられるので私ハ、うれしくてたまりません。私は、おとうさんがおかへりになるとすぐおとうさんにだきつきます私はおとうさんが一ばんすきです。いつでも日ようびには、すぐどこでも、つれてゐて下さいます私ハ、おとうさんが一ばんすきです。うみこちゃんわ私のおとうさんはだいすきよといわれました。その時私が、ぼうくわぐんじんだいすきよと

うたうとふみこちゃんがそうじゃあないのこういふの「私のおとうさんはぐんじんだいすきよとうたうのよとおっしゃいました。」

私のお父さん。

(三年)

私のお父さんは、会しやからおかへりになると、すぐ私のほつべたを、ひげにすりあわしになるので、私ハ、お父さんがかへられると、すぐ、家中を、かけまはる、すると、お父さんが、おつかけてこられるので、私ハ、すぐつかまる。お父さんと、私ハ、じようだんはんぶに、けんかを、するの、いやになつた。私ガ、二年生の時夕方ごろ雨が降出たすると、かみなりガ、「ごろく。」と、大きな声で、なり出たので、私ハ、「きや。」と言つて、おしこみの中に、飛はいつた、するとお父さんが、〇〇は、弱むしだなあと言はれたので、私ガ、「こわくないよ。」と、言つて、外

に、出た。前より、あつそうこわくなつたので、私は、お母さんにしがみついた。私は、お父さんが一番好きだ。

お父上

(五年)

私のお父さんは、会社のしやちやうです。いつも、私と、お兄さんが、「お父私ちゃんおせんべいをかつて来てね。」と、言ふと、いつでも、お父さんは、そのつぎの日に、もつて、かへつて下さる。私にとって、は、お父さんが、自分のかほにはへてゐるひげを、私のほくに、すりつけられるからだ。

お父さんは、会社の御用ぢで、いそがしいのか、いつでもよるおそくなつてかへられる。それにしても、朝おきられるのは、とても、有名です。朝のしよくちと、昼は、一っしよです。私と、お兄さんは、お父さんにしかられると、すぐ

「おねほさん。」

と、言つて、ひやかす。ある日夕方のことでした。外の方で、

「むにやい、むにやい。」

と、言ふ声でしたので、私は、二階のまどから見ると、酒よいが、私の家のとを、たゞいてゐたので私が、

「ばか酒よいの。」

と、言ふと、酒よひが、二階の方を、見て、「にやに。」と、言ったので、私は、すぐかくれた。

私の父

(六年)

私の父は字品の会社に、つとめてゐます。

いつも、会社から帰られる時などには、お菓子を私に、もつて帰つて下さいます。会社から帰られた時に、私がお菓子と、言ふと、「今日は、ないよ。」と、言は

れた時などには、大へん、つまらなく思つた。いつも、  
いたい／＼ひげを、私のかほに、あてられる時などと  
ても、いたいで、逃げまはるが、すぐに、大きな手  
で、つかまつて、しまふ。

おそろしい時には、ものすごく、やさしい時には、と  
てもやさしいあのお父さんと、言ふことを、私と、お  
兄さんは、つくつたのである。

このあひだ、東京に、行かれた時などには、帰りに、  
岡山で、おいしさうな、びわを、たくさん、買つて、  
きて、下さつた。お父さんの、おられない人には、と  
てもかわいさうな、気が、してくる。それから見ると、  
私は、いゝ方です。お父さんが、しゅちやうされて、  
私と、お母さんの二人で、ある時は、何かしらん、心  
さびしい感じが、する。このあひだの、敵機らしいしう  
の時には、お父さんは、東京に、行つて、あつしや  
つたのである。私と、お母さん二人である。すると、  
しんるいの中村の、おぢさんが、こられて、いろ／＼

と、しんせつに、して下さつた。その時、『お父さん  
が、おられたらなあ。』と、心の中で、心ほそく感じ  
た。お父さんお母さんの、おあつてい心が、その日に、  
わかつた。

「オハリ。」

### h' さんの 歩み

私ノオトウサン

(一年)

私ノオトウサンハアサオキテシンブンヲヨンデゴハン  
ヲタベテマタシンブンヲヨンデシタ。ソレカラダイ  
ガクニイッテデシタ。私ハサキヘイキマシタ。○○○  
○サンヲサソッテイキマシタ。ガツカウヘキテミルト  
七八人キトッテデシタ。リンガナルトキハマダキャウ  
シツデアソンデイマシタ。

私のおとうさん

(二年)

私のおとうさんは大学の先生です。おとうさんたちは一っしうかんに一ぺんか二へんおやすみがあるさうです。それで私は「おとうさんになつたらいいな。」とお思ふことがあります。きのふの夜おとうさんが、私に「耳かきを持っておひで。」とおっしゃったので持ってきました。おにいさんの耳の中を見たあと、おとうさんが「ささっくがない。」とおっしゃったのでみんなわらひました。

私のおとうさん。

(三年)

私のおとうさんは、大学のさんじゅつ先生です。おとうさんは、家におられる時はたいいてい勉強をしておられます。ひるねをなさるので晩は、十二時ぐらゐまで勉強か、何かをしておられます。一しよに遊んだ事は、めったに、ありません。お正月の時ぐらゐだと、

思ひます。おとうさんは、とても、せいが高く、着物

をつくるのに、ふつうの人、より、きれがたくさんいるので、おかあさんが「困る困る。」と言はれます。此の間、私は、おとうさんに、そろばんのれんしゆうをしてもらわうと思つて、そろばんをもつて帰りました。がなんにもなりません。「あんさんで、できるでせう。」と私が言つたら、「うんまあ。」と言われたので、やつてみたら、おにいさんの方がじやうずでした。

おとうさん

(五年)

うちのおとうさんは〇〇大の先生です。

おとうさんは、とてもからだだが、よはく、今年の正月から、病氣になつては、よくなり、よくなつては、病氣になるやうなのを、いつもくりかへしておられます。私も、よはいなので、おとうさん、おかあさんは、心配されて、氣持をわるくさせるのではないかと思ひ

ます。さうして、いつも、学校から、お帰りになると  
すぐ勉強さて、昼ねも、なさいますが、夜は、十二時  
頃から、やうやく、おやめになります。おとうさんの  
勉強は、ただ見ると、すはって、本を、にらむやうに  
してみても、おられるだけのやうです。でもそれが、お  
とうさんの、大じな仕事ださうです。それが、また、お  
とうさんのからだをくるしめてゐるのだと思ひます。  
私は、おとうさんと私のからだが早くなほればよいの  
にと、いつも、言っています。

### 私の父

(六年)

私の父は、大学の数学の先生です。

父は、とてもからだが悪く、朝、七時頃起きます。

学校に出て、一、二時間教へ、すぐ帰って来ます。帰  
ると、夜の十一時頃まで休みなしに勉強してゐます。

七年前頃は、父もまだ元気で、私と、八木の梅林へ

行ったり、宇品へ行ったり、してゐましたが、近頃  
は、全々いかないので、私は、よく、八木へ行ったゆ  
めをみます。

私は、わからない事があると、何でも教へて、くれ  
ます。この前、歯車の歯がいい具合に作れないので、  
とひに行くと、わかるまで、何回も何回も言ってくれ  
ます。国語でも、しらない字があると、教へてくれま  
す。

私は、父によく心配を掛けたから、御恩返し、をし  
やうと、心がけて、父が喜ぶやうにしています。私  
が早く大きくなって、もっともっと、喜こんでもらほ  
うと、思っています。

### i さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

ウチノオトウサンハスグネゴトヲユハレマス。私ガチ  
ヨットイタヅラヲスルトヲコツタヤウナカラオンテヲ  
ラレマス。私トオネエサントガケンクワヲスルトコ  
コヲトオツシヤイマシタ。スルト私タチハスダヒバチ  
ニアタツテヲリマス。ウチノオトウサンハホントウニ  
イイオトウサンデス私ガオトウサンニオミカンヲアゲ  
ルトダマツテオタバニナリマス。私ガオトウチャンセ  
ンテエヘツレテツテチャウダイトイヒマストスダツレ  
テツテクダサルヤウナカラヲシテヲラレルノデス。ウ  
チノオトウサンハ私ヲカハイガツテクダサイマス

私のお父さん

(二年)

私のうちには、おねえさんがたくさんおられるか  
ら、お父さんが私を呼ぶ時「信子、恂子あ ○○。」  
といふように、おねえさんばかり呼ぶばかりです。

お父さんがこのあひだのお正月にお国の「大あめ

や」であめをかってこられたのに、それをみせるとみ  
んながすぐにたべるから、十五日まで、おいしいの中  
にかくしておられました。きのうお父さんがごはんを  
たべて、七時のにゆうすがすむと私に「○○あめをも  
っておいで。」といはれたので私は「○○は、あめの  
ある所はしらないよ道子ちゃんしってるでしょ。」と  
いふと「しってるよ。」といってもってきてください  
ました。そしてみんなにわけてくださる時こっぶにみ  
づをいれてまるでおにぎりを作られるやうでした。私  
はあまりおかしいので「あめやんだね。」といって  
笑いました。

これは私の作ったうたです

一　とうさんにゆうすをきゝながら

こっくり、こっくりいねむりばかり。

二　とうさんほんを、よみながら

こっくりこっくりいねむりばかり

私のお父さん

(三年)

私のお父さんは、とても早起です。五時に起きられる時もあるし、又は、六時頃起きて、お座しきをおそうじをなさいます。そして、おそうじがすむと、「○○、○○、恂子恂子。」といつて、へんじをするまでよばれるので、私は、仕方なしに、へんじをします。また、お父さんの、お顔洗ひは、とても長いので、先にあらつておかないと、大へんなことになります。それから、お父さんの、ごはんをたべられるのは、とても長いのです。二はいのごはんが、十五分ぐらあかゝります。一々目をつむつて、一口づつ、よくかんでたべられるので、長いはずです。ニュースなどを聞かれる時は、ひつしで、聞かれるので、さわぐきがしませぬ。お父さんが、私を叱られる時は、ものをいはずに、とてもすこい目でにらまれるので、とつてもこわいのです。

おとうさん。

(五年)

うちのお父さんは○○の英語教授です。いつも学校から帰へられたら、ちよつときうけいしてお庭の花に水をやられます。お父さんはとても花をかはいがられます。お庭の畠にはじやがいも、とまと、ねぎなどがうゑてあります。ねぎ、じやがいもとまとなどもみながつて来て、畠をつくつてうゑられました。お父さんは私はまだ小さい時ドイツやイギリスアメリカへだいぶん長い間行つておられました。ですから英語をやられるのでせう。

私の父

(六年)

私の父は、こはさうに見えても、ずのぶんやさしいのです。さうして、いつもだまつてゐます。私達を、とてもかわいがつて、くれます。○○の、英語教授を、してゐます。生徒さんが、よく、「はじめのうち

は、先生が、とてもこわさうに見えたが、なれて見れば、ちつともこわくない。」と、よく、私の家に来ていひます。

父は、いつも、畠の手入れをよくします。さうして、つかれたといつては、肩たたきをさしたり、腰をたたかせたりします。昔は、体が丈夫でしたが、今はあまり丈夫な方ではありませんから、すこしでも、たくさんの仕事をしたら、すぐ、ふうふういひひます。でも、年寄りにしては、よくなんでもします。学校からかへつて、玄関の戸を開けて、ふうふういひながら、玄関の板間に、どすん、と腰をおろして、しばらくしてから、くつをぬぎます。こんな様子を見てみると、ほんとかわいさうな気がします。

もう父は、おぢいさんで、いつとも、しれない身になつてゐるので、今の間に、父に、心配をかけぬやう、しつかり孝行しておかうと思ひます。

### じさんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

私ノオトウサンハ、パン5時ゴロカヘリマスソシテゴハンヲタベテオトウサンハ5ゼングライゴハンヲタベテシマイマシタ。私ハゴハンヲユックリタベテオトウサンハ大イソギ大イソギダベマス私ワヨクカムノデ一ツトウアトニナリマス私ガゴハンガスムトオトウサンガドウアノホンヲ一パイヨンデクレマス私ワハホントウニオモシロイデス私ノオトウサンハホントウニヤサシクテイヒオトウサンデスノデ私ハホントウニスキノオトウサンデス。

ラワリ

私のお父さん

(二年)

私のお父さんは、毎日朝四時ごろおきていらつしやるさうです。私が七時ごろおきて行くと、お父さんはごんぎやうをしていらつしやいます。私が「おはようございます。」といふと、お父さんもおはようとおっしゃいます。そうゆう時もあります。時々お父さんの所へいかない時もあります。こないだお父さんにびんぼんをかっていたきました。お父さんが「そのびんぼんはよくあがるか。」とおききになりました。私は「少しあがります。といひました。お父さんはよく山につれてってくださいます。私のお父さんは三十七さいです。お父さんがのり子ちゃんのことを文朗とおよびになりことがあります

私のお父さん

(三年)

或時お父様おにい様に「おもしろいさんじゆつ遊そ

び」といふ本をとしやうかんからかりていらつしやいました。私がお父様に『この本んを、見たらどうやうの本をかりて来てね。』と言ふとお父様が『よんだらかへすついでにかりて来てやらうと。』おつしやいました。それかいく日かたつてやがておもしろいさんじゆつ遊そびの本を皆よいでからお父様がさんぢゆつの本を学校へかへして又とようの本をかりていらつしました。私は『おかへりささい。』と言って『どうやうの本は。』と言ふと『此ふろしきの中。』よとおつしやいました。どうやうの本はおもしろくなかつたのでお兄様が『お父様にどと話の本をかりて来て。』といへやといったので私がお父に言ふとおつちんがいいなさい。』とおつしやいました。

私のお父さん

(五年)

私のお父さんは、参拾九歳です。私の家では、この

頃四時に御飯ですが学校からおかへりになるのがとてもおそいのでみんなそろつてたべる日があましありません。お父様は、私たちの御飯がすむころおかへりになります。お父様が御飯をたべていらつしやると妹と弟がほしさうに見てゐるとお父様が妹に

「ほしいか。」とおつしやると妹は、うなづきます。

妹がなにかもらふと弟がお父様に

「ねえちやうだい。」といふのでお父様が弟におやりになると、私たちにも下さいます。お父様がおかへりになると私たちは、きやうさうのやうにしてげんかんへ走っていきます。私たちは、

「おかへりなさいませ。」といふとお父様は、

「はいく。」とおつしやいます。おかへりになるといつでも

「今日はなにか来たかね。」とおしやいます。

私の父

(六年)

私の父は〇〇の先生をしてをられる。

おほこりになると、とてもひどい。小さい時はとてもかわいがって下さつた。

時には、いつしよに寝たりした事もある。いつしよに寝ると父の手をまくらにして下さる。

又、冬などは、お父さんごたつといつて寝た。

学校からお帰りになると、きまつたやうに、

「今日は何か来たか。」とおつしやる。

又、かひ捨ひなどに行つて帰つて来て

「ただ今帰りました。」といふと

「お帰へり。ごくろうさまだつた。さあ早く御飯をおたべ。」とやさしく、言つて下さるので私はとてもうれしい。御飯の時など何かいいものがあると母は、少しづつ皆にわけて長くもたさうとなさるが父がそれを見ると

「くさりやしないか。大丈夫かな。たべてしまへ、

たべてしまへ。子供にもやれよ。」とおつしやる。

時々、父がをられない事があるとあまる事がある。い

ちごや何んかがあると父は

「子供達でたべろ。」などといつて下さる。

父がをられない日の晩はどろ奉が入つて来さうなので戸をかたくしめておく。父は私が小さい時にくらべてひどくなられた。

が、私は父はありがたひと思ふ。

### k'さんの歩み

私ノオトウサ

(一年)

ウチノオトウサンハ、オサケガ、大スキデス。ウチヘカヘッタラ。ミヅオノミマス。サウシテケンクワラシマス。ネルトキハ、マクラモトニミヅオライテネマス。アサニナッタラネルノガオネバウデス。

私のお父さん

(二年)

私のお父さんは、大学の先生です。お父さんは学校からかってからすぐおすまふを、おきくになります。すまふがすむとしんぶんをおよみになります。ばんごはんをたべてから私はこたつにあたっているとお父さんが「〇〇も、き子もねれ。」とおっしゃいました。私はおかあさんといっしょにねました。あさになつたのでおきてみるとお父さんはまだねていらっしやいました。

私のお父さん

(三年)

私のお父さんは、どうぶつの先生です。毎日、朝から学校へ行つていらつしやつて、夜おそくかへつてこられますが、又は、ごはんをたいしているころかへつてこ

られる時もあります。きのふの晩、ごはんの後でお茶をのんでいるとお姉さんが、「しよよくごないん。」と言ひました。お母さんは、「みかんがあるよ。」とおつしやいました。さうしてみかんをかける時お父さんに一ぼん大きいのお上げました。それから、みんなでじゃんけんをしました。私が一ぼんまけました。それからみかんをたべてからこたつの所へ行つてみるとお父さんは、まだ、みかんをたべていらつしやいませんでした。

父

(五年)

私の父は大学の動物の先生である。

前に山からうさぎを取って来てかいぼうされるのをちよつと見たことがある。その外へびや、とかげやいろいろな動物をかいぼうしたりしらべたりされるのである。

父の生とやよその人からは、〇〇先生とか、先生と

か呼ばれるのである。

父はよく旅行をする人である。それにせとものや、酒ずきで、せとものは、学校から帰る時や、町へ行つた時にお皿や、ちやわんを買つて来るのである。それで、家の二階は、大きなお皿や、小さなお皿や、茶わんや花びんで、一ばいである。

お酒はあつた時に時々のものである。そのかはりちよつとのんだだけでもよつばらつてよその家にあそびに行くのである。

私の父

(六年)

私の父は、幅が広くて、丈が低い。前に、何かの式があつた時、出席を調る時、来てゐるのに、けつ席にされて、家へ帰つてから、おこつておられた。

父は、たばこが好きで、毎日買ひに行かれる。その中でもとくに両切が好きだ。私が、買つて来いと言は

れたのでたばこ屋へ行つて、両切がありますかと聞くと、ありませんと言いはれたので、違ふのを買つて帰ると、父は、「ありや、こんな物はいらんのに。」と言はれた。

父は、自分に反たいする者があると、すぐおこるのでおそろしい。起きるのは、よく寝られた時はおそくまで寝てゐるが、よく寝られなかつた時は、とても早く起きる。そして、二階で、書き物をしたり、本を読んだりしておられる。

又、父は、瀬戸物が好きで、お面白い形をしたのや、きれいなものや、古いので、お皿や、灰皿を大小買つて来て、二階の部屋に、ずらりと並べて、人が来ると、それを見せて、いちいちせつめいしてゐる。

そして、人が、ほめると、うれしさう笑つておられる。

## 第二章 乙学級児童六カ年の歩み

—— 通年一定題目「私のお父(母)さん」——

### 第一節 六児の歩みを追って

#### 前注

○ 乙学級のうち、六カ年五回の作文に、毎回応じてくれた人は、二十二名である。(男児九名、女児十三名)

○ 乙学級の二十二名の人たちを、A・B・C式の略号であらわす。

男児は「Aくん」などと呼び、女児は「Aさん」などと呼ぶ。

○ 本節では、男児三名・女児三名をとりあつかう。

※ ※ ※

○ この当時は、「現代かなづかい」以前の時代である。また、一年生はカタカナから習ったのであった。

A くん の 歩 み

私ノオトウサン  
 私ノオトウサンハ、イツモガツカウカラカヘ  
 ルトボクハ、オトウサントアソビマス。ケフ  
 モボクハ、ガツカウニイッテボクハガツカウ  
 カラ。」カヘルトマイニチゴハンオタバテカ  
 ラオカシヲモラツテタバマス。トダイスキナオ  
 コウコオタバマス。ソレガスムトオカシヲタ  
 ベマシタ。

私ノオトウサン (二年)

私ノオトウサンハ、イツモガツカウカラカヘ  
 ルトボクハ、オトウサントアソビマス。ケフ  
 モボクハ、ガツカウニイッテボクハガツカウ  
 カラ。」カヘルトマイニチゴハンオタバテカ  
 ラオカシヲモラツテタバマス。トダイスキナオ  
 コウコオタバマス。ソレガスムトオカシヲタ  
 ベマシタ。

① 作文内容は、判然としていない。——これを今、批評するつもりはない。この段階では、とかくこのよ  
 うな生活表現が見られがちである。

「思い」のままに、「思い」の伸びるままに、内容をうちだしているのが、無邪気でもある。したがっ

て、これはこれなりに美しい。

ただしこのような状態を、いつまでも容認しようというのではない。

② 「私ノオトウサンハ」とはじめられていて、主題に応ずる発想は明らかである。

第一センテンスでは、「ボクハ、オトウサントアソビマス。」が言いまとめになっている。それが言いたかったのである。が、発想上、「私ノオトウサンハ」とはじめたので、しばらくはそれに応じた表現をしないではすまされなかった。その必然性と、本人の言いおさめたこととのつなぎめで、センテンスが大きく屈折している。

③ この作文のむすびは、「ソレガスムトオカシヲタバマシタ。」となっている。これまでのセンテンスは「マス」どめであったが、ここでは「マシタ」どめになっている。このことは重視すべきだと思うのである。おそらくここに、作者の、この作文を完結させた意識がある。それゆえ私は、「マシタ」で、この作文の全体構造のしめくりがつけられていると見たい。

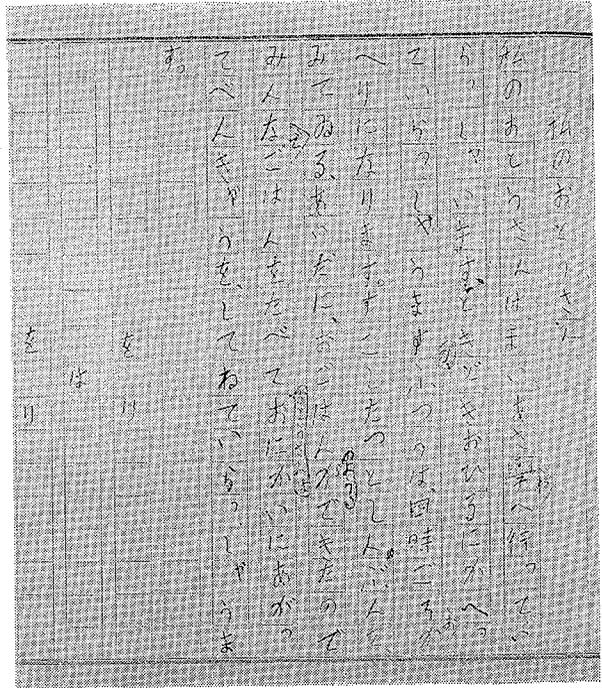
④ 「ダイスキナオコウコオタバマス。」とある。「オコウコ」の語が、ここに出ているのはほほえましい。それはそれとして、「オコウコ」をここで言うのは、表現のしだいから言うと、場所ちがいではないか。とおもうと、「ソレガスムトオカシヲタバマシタ。」とあるので、このほうからすれば、「オコウコ」の出しかたはこれでよいとも言える。そのへんの混乱は、「オカシヲモラッタタバマス。」でいったん「。」をつけたのをやめて、「タバマス」としたところからおこったのだと見ることがができる。――要するに、作者は、ごはんのあとでおかしを食べるのがつねであったらしい。

作文内容が判然としていないということは、表現上の集中力がいまだつよくはないということであろう。しかし、私はこの段階で、表現上の集中度、緊縮度をとがめる気にはなれない。むしろ、このような現実を肯定して、できれば、叙述面を精細に分析し、不集中のよってきたところを究明することにとめたい。そうして、表現者の原意・表現意図に思いをはせて、のちに、ひとつずつ、本人の集中力に関する諸問題点をとりあげ、その善導につとめることにしたいと思う。

⑤ 叙述面の不集中的であるのに反して、表記面では、第一に、センテンスのむすびをつける句点が、明白にうたれている。「ガツカウカラカヘルト」の「ガツカウカラ」のところでカギかっこがつけられており、かつ句点らしいものがほどこされている。これはどういう意図であったろうか。読点もまた、かなりよくうたれている。「何々ハ」のところでは、読点をうつ気もちが、よくおこったようである。ただし、「ボクハガツカウカラ。カヘルト」の「ボクハ」のところには、読点がうたれてない。

⑥ 写真に明らかかなように、さいごの「マシタ」は、もと、「マス」であった。作者は、はじめ、「タバマス」とむすんだのだが、推考して、「タバマシタ」とした。念入れの結果、このような書きかえがおこなわれた。

「マス」を「マシタ」にあらためたことについては、せひとも、多くのことばをついやして、その努力を推賞することにした。



私のおとうさん (二年)

私の、おとうさんは、まいあき学校へ行って  
 いらっしゃいます。ときどきおひるにかへっ  
 ていらっしゃいますが、ふつうは、四時ごろ  
 おかへりになります。すこしたつとしんぶん  
 を、みてある、あいだに、おごはんのようい  
 ができたのでみんなでごはんをたべておとう  
 さんはおにかいにあがってべんきょうを、し  
 てねていらっしゃいます。

をり  
 は  
 をり

④ 「すこしたつとしんぶんを、みてある、あいだに、おごはんのよういのできたので」とある。ここで、「できたので」とされているのが注目をひく。

と同時に、「おとうさんはおにかいにあがってべんきょうを、してねていらっしゃいます。」の「して」「ねて」が注目をひく。





僕のおとうさん

おとうさん、人は長節の朝早く、熊本へ行かれた。いつもは、いくらこの人でも、おみやげがないので、今度は、たのまつに、ぬた。おみやげが、今度はある。おもちも、熊本の産物の、朝せんあやだ。今度は、おみやげが、おみやげも、いつかへる。おもちも、おききに、ならなかつた。いつもは、二日か、三日は、どうしても、おくれの。だ。と。三時、今日の、午前、三時か、三時ごろ、かへられた。やつぱり、おみやげを、たのまなかつたので、おみやげは、たくさんあつた。僕のは、少国民の友だ。おみやげ、たのまご、あづきと、熊本の、

僕のおとうさん (五年)

おとうさんは、天長節の、朝早く、熊本へ行かれた。いつもは、いくらこの人でも、おみやげがないので、今度は、たのまつに、ぬた。おみやげが、今度は、あるとおもつた。熊本、名産の、ちやうせんあめだ。今度は、やつぱり、ぼくとおなじやうに、おかあさんも、いつかへることも、おききに、ならなかつた。いつもは、二日か、三日は、どうしても、おくれるのだ。ところが、今日の、午前二時か、三時ごろ、かへられた。やつぱり、おみやげを、たのまなかつたので、おみやげが、たくさんあつた。僕のは、少国民の友だ。あと、たのまご、あづきと、熊本の、

熊本の幼年學で、もらつて、やられた  
 大きな、まんじゅう、四つもつて、かへら  
 られた。そのまんじゅう、をこはんが、す  
 んで、もらつた。おとうさんは、あひかは  
 らず、かせをひいて、學校へ行か  
 ない。  
 幼年學校へ、行くと、大きな、まんじゅう  
 が、毎日、二つづつ、もらへるさうだ。  
 僕は、長から、おみやげを、左のまがも  
 まあ、おもひ。

終

④ この文章では、「だ」「のだ」の言いかたが目だつ。おわりも「……さうだ。」となっている。

幼年學で、もらつて、こられた。大きな、ま  
 んじゅうを、四つもつて、かへられた。その  
 まんじゅう、をこはんが、すんで、もらつ  
 た。おとうさんは、あひかはらず、かせをひ  
 いても、學校へ行かれる。

(おわり二行 作者消去)

終

終

「だ」のむすびは、上乗の作文にはあまり出なかった。この作文は、「だ」の特色をもった作文とも言  
うことができそうである。——ここで私が思いおこすのは、この作者の前年の作文の命令形「……起る。」  
である。このようなことばづかいは、男の子の、「だ」といったような、きっぱりとしたむすびの表現法  
を刺激しはしなかったか。——あるいは、養いはしなかったか。

⑤ どういうものか、これには、読点と言えるものがたくさんあってある。読点の形態もいくとおりにな  
っている。(句点ぶうのものもある。) この作文での作者の句読法の意図は、どういうものであったのか。  
前年の作文での句読法とも、後年の作文の句読法ともちがうものが、ここに出ている。

児童の生活の発展途上では、その句読法一つにしても、ときにこうして、かくべつのこともしきおこし  
たりするのか。まことに、発展は、単純一途のものではないらしい。

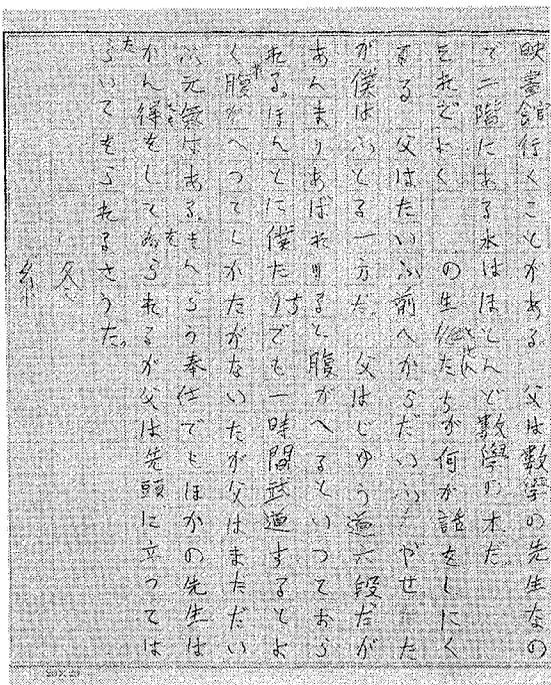
### 村の父

僕の父は、……につとめてあます。  
父はもう四十三歳で白が所々のあつてよく  
奉仕に行つてその夜はこしがいたむといつて  
あぶねる。大東亞戦争の始まる前には酒をのん  
でおりをなかつたのに二年ほど前が酒をの  
んでおりをなかつた。時々僕は父といつしよに

### 私の父

(六年)

僕の父は〇〇〇につとめてあます。  
父はもう四十三歳で白が所々のあつてよく  
きんらう奉仕に行つてその夜はこしがいたむ  
といつておられる。大東亞戦争の始まる前  
は酒をのんでおられなかつたのに二年ほど前  
から酒をのんでおられる。時々僕は父といつ



映画館行くことがある。父は数学の先生なの  
で二階にある本はほとんど数学の本だ。  
それとよくの生（せい）はた（た）が何か話をしたく  
まる。父はたいふ前へからだいいやせした  
が僕はたいふ一方だ。父はじゆう道六段だが  
あんまりあはれれると腹がへるといつてあは  
れず、ほんとに僕だけども一時間武道するとよ  
く腹がへつてしかたがないが父はまだい  
いぶ元気はある。きんらう奉仕でもほかの先  
生はかん得をしてをられるが父は先頭に立つ  
てはたらいてをられるさうだ。

終

しよに映画館行くことがある。父は数学の先  
生なので二階にある本はほとんど数学の本  
だ。

それでよく〇〇の生とさんたちが何か話をし  
にくる。父はたいふ前へからだいいやせたが  
僕はふとる一方だ。父はじゆう道六段があ  
んまりあはれると腹がへるといつておられ  
る。ほんとに僕たちでも一時間武道するとよ  
く腹がへつてしかたがないが父はまだ、だ  
いぶ元気はある。きんらう奉仕でもほかの先  
生はかん得をしてをられるが父は先頭に立つ  
てはたらいてをられるさうだ。

① 「〇〇の生起たち」としておいたのを、やがて「生とさんたち」になおしている。六年生ともなれば、もはやこのような心づかいてもできるのか。こうした心性の持ちぬしであるだけに、父を題材としても、その観察は、つねにあたたかい。

④ 父を問題にする態度のあたたかさに正比例して、いわゆる敬語法が、随所で用いられている。

「つとめてゐます。」と言っているさいしょのセンテンスだけが「ます」調である。このような「ます」

調の言いかたでしめくられるところには、「つとめられて」などの言いかたはない。(——ここはここで、よく言いまとめられている。)このような気もちでいって、非「ます」調の文章となった時、作者は、しぜんに、「おられる」などのむすびにしている。

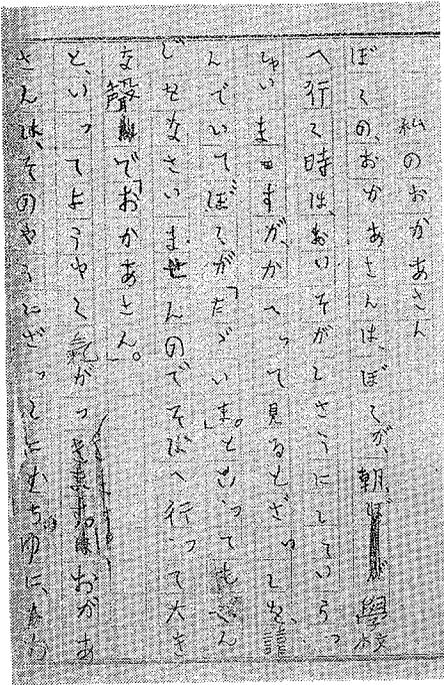
### B くん の 歩 み

#### 私ノオトトサン

ボクノオトウサンハ、トテモヤサシイ人デ  
 大デシク。私ガオカアサマニシカラレ  
 テイルトオトウサンガミテハンタイ  
 オカア内キアサンヲオコッテデス。私  
 ガ五ツイトキヨコバラニウミカタマ  
 ッテ私ガ六ツノトキオナクナリニナ  
 リマシタ。ボクハホンタウニカナシ  
 ェゴザイマシタ。

#### 私ノオトトサン (二年)

「ボクノオトウサンハ、トテモヤサシイ人デ  
 シタ。私ガオカアサマニシカラレテイルトオ  
 トウサンガミテハンタイカラオカアサンヲオ  
 コッテデス。私ガ五ツイトキヨコバラニウミ  
 カタマッテ私ガ六ツノトキオナクナリニナリ  
 マシタ。ボクハホンタウニカナシエゴザイマ  
 シタ。」



④ 「トテモヤサイ人デシタ。」と、「タ」が用いられていて、読むものはっとさせる。この「タ」が、終始、正確につかわれていて、この文章は、「タ」どめの文章と見られるものになっている。——それが、読むものに、身のひきしまる思いをさせるのだ。

「タ」どめの文章のなかに一つだけ「デス」どめが出ている。これはこれで、いかにもと思われる書きあらわしかたである。そのむすびの前のほうが、「ハンタイカラ」となっている。まことに子どもらしいことばづかいだと思われる。

私のおかあさん (二年)

ぼくの、おかあさんは、ぼくが、朝、学校へ行く時は、おいそがしきうにしていらっしゃいますが、かへって見るとぎっしを、読んでいて、ぼくが「たゞいま。」といってもへんじをなさいませんのでそばへ行って大きな声で「おかあさん。」

と、いってようやく気がつきます。おかあさんは、そのやうにぎっしにむちゆに、おなり

なりになりました。

(をほり)

になりました。

(をほり)

④ 「おなりになりました。」とむすんである。そのつぎに「(をほり)」と書いてあるので、作者は、この作文をおわる意識で、「ました」と、完了法の言いかたをしたことが考えられる。また、おとなの立場からこれを読むと、このおかあさんが、しだいにそのようになった事実を、作者は、なんらたくむことなく、もっともしぜんに表現したとも、見ることができよう。

「おなりになりました」の言いかたは、一年の時の「オナクナリニナリマシタ」というのと同じものである。この作者には、早くから、このような句法が身につけているのだ。右の文章の中にはまた、「おいそがしさうにしていらっしやいます」「なさいませんので」ともある。作者は、いわゆる敬語法に、かなりよくなれている。

私のおかあさん  
私のおかあさんは、大変、井ゆい、お方です。  
おかあさんが、びよきになられた時の事でした。朝  
でした。朝はおきて見がる、春野をいじります。

私のおかあさん (三年)

私のおかあさんは、大変よいお方です。おかあさんがびよきになられた時の事でした。朝おきてみるとだいどころの方で「ごとく」。



得ており、光っている。

⑥ 作者はどこどころ「ました」から「まし」ととっている。いわば、敬体を常体の言いかたになおしている。こういうところにも、「た」どめの意識のつよさがうかがわれよう。さて、常体の「た」をねらったりしながらも、むずびのことは、「御飯をだべた用意をして下さいました。」と、「ました」どめのままにしているのは、やはり、作者の心に早くから定着した、敬語法心理とでも言うべきものを示すものであろう。

僕のお母さん

僕のお母さんは大へん親こう行を人です  
お母さんが十三の時びよう気のおぢいさん  
を、うばぐるまに乗せて毎日四里もある  
おいしやさんの所へ行かれたのださうです  
ソビヘトでは子供をしかると、その子供が学  
などで言ふとそれのしかつた人けいさつなど  
を受けてるので、どんなことをして  
かりません。それでわるいめをなさしは  
たのださうですそれにくらべは日本ではわ

僕のお母さん (五年)

僕のお母さんは大へん親こう行を人です  
お母さんが十三の時びよう気のおぢいさん  
を、うばぐるまに乗せて毎日片道四里もある  
おいしやさんの所へ行かれたのださうです。  
ソビヘトでは子供をしかると、その子供が学  
などで言ふとそれのしかつた人けいさつなど  
でおこごとを受けてるので、どんなことをして  
もあまりしかりません。それでわるいあそび  
なをしはじめたのださうですそれにくらべは



いうものであらう。

### 私の母

私の母は大へんやさしく又きびしい人である。私の父がなくなつてから母はくらくさして私たちを育てて下さるのである。又私の母ゆかいな人である。又私たちが学校から帰つておべんとう箱をかならづあけて御はんがこつてゐないときもうれしさに「今も残さなかつたね」とさもうれしさうにいはれる。とおゆうわけかたつねると「からだは丈夫なら残さなだらうから」と言われた。このやうに母はつね私のかさだに氣をうつてつりておほられたのである。

私が病氣になつた時などは夜でもかんにびようして下さつた。又母は大へん丈夫な人でもり病氣にかかれない。このやうによい母によい母をもつた私は大へんしあわせだと思ふ。

### 私の母

(六年)

私の母は大へんやさしく又きびしい人である。私の父がなくなつてから母はくらくさして私たちを育てて下さるのである。又私の母ゆかいな人である。又私たちが学校から帰つて、おべんとう箱をかならづあけて御はんがこつてゐないとさもうれしさに「今も残さなかつたね。」とさもうれしさうにいはれる。とおゆうわけかたつねると「からだは丈夫なら残さなだらうから。」と言われた。このやうに母いつも私のかさだに氣をつけてゐておられたのである。

私が病氣になつた時などは夜でもかんにびようして下さつた。又母は大へん丈夫な人でもり病氣にかかれない。このやうによい母をもつた私は、大へんしあわせだと思ふ。

終

終

② 「私の母は大へんやさしく又きびしい人である。」と母おや観をきっぱりとうち出している。つぎに、

「私の父がなくなつてがら母はくろうをして私たちを育てて下つさなのである。」とあり、要するに作者は、一年生の時以来、いろいろに見てきた母おや像を、ここで、端的にまとめあげているのである。

作者の「考える生活」というものを問題にすれば、今ここで、私どもは、その考える生活が、このように発展してきたことを認めることができる。

以下もみな、その考える生活を、しぜんに表現したものと受けとることができよう。

こうした文章が、いまや、「ます・です調」ではなくて、「である」調のものになっているのも、ことなしにぜんだと思われ。人はやはり、年とともに進歩するものだ。能力を発展させていくものだ。

### C くん の 歩 み

私ノオトウサン  
ウチノオトウサンハ、アタマガツンツルボウ

私ノオトウサン (一年)

ウチノオトウサンハ、アタマガツンツルボウ

11/ホウズデス。  
 サウシテマイアサオソクオキマス  
 ソウシテトキドキイツモマアジャン  
 ヲヨクシニスソレカラマイアサオソ  
 クオキテニハイツテミマス。サウ  
 シテアサゴハンヲタベマセン。  
 (ヲハリ)

ズデス。

サウシテマイアサオソクオキマス。

ソウシテトキドキイツモマアジャンヲヨクシ

マス。ソレカラマイアサオソクオキテシンブ

ンヲモツテマタネマニハイツテミマス。サラ

シテアサゴハンヲタベマセン。

(ヲハリ)

- ① 父おやの生活を叙することが、まことに端的である。おとうさんの生活内容がよく見えている。
- ② 真正面からの思考法が、ごくしぜんにおこなわれている。
- ③ 言うべきことを列挙する構造が、しぜんにかたちづくられている。
- ④ 叙述に「サウシテ」「ソウシテ」「ソレカラ」「サラシテ」と、順接の接続詞が継起するのも、むりか  
らぬことである。
- ⑤ 筆者のセンテンス意識はじつに健全で、各センテンス末に「。」がつけられている。

私のおとうさん

私のうちのおとうさんは、ほくのいもうとをよくかはいがられます。

おとうさんは、この間から朝早くからおきられます。いつもほくがおきる時はもう起きていらすしやいませ。

お正月にはいつもマァージャンをせられます。そしてよるはおそくおそくやめられます。おとうさんはマァージャンがすきなのでせう。

(そはり)

③ 三分段の体裁がはっきりとしている。一年の時の、列挙の体裁は、よく、この、分段構造という大局的なものに発展している。

この間に、簡潔な思考のさまが明らかである。——しかも思考力が発達していて、一年の作とこれとの差が明らかである。「マイアサソクオキマス」、「おとうさんは、この間から朝早くからおきられます

私のおとうさん (二年)

私のうちのおとうさんは、ほくのいもうとをよくかはいがられます。

おとうさんは、この間から朝早くからおきられます。いつもほくがおきる時はもう起きていらすしやいませ。

お正月にはいつもマァージャンをせられます。そしてよるはおそくおそくやめられます。おとうさんはマァージャンがすきなのでせう。

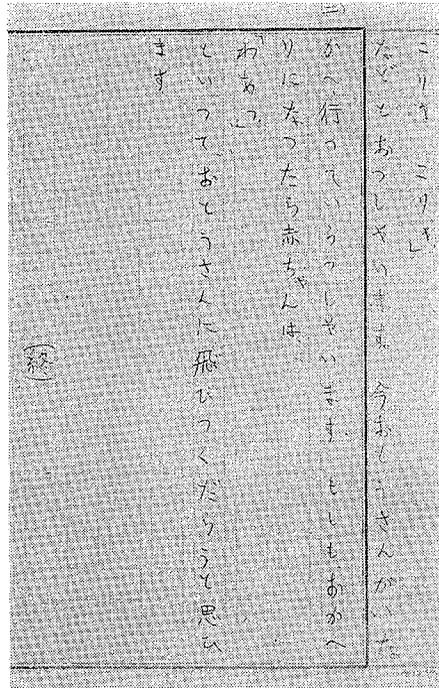
(そはり)

す。「とえがかれる。「いつもぼくがおきる時はもうをきていらすしゃいます。」「もう」というひとことばが、重みをもっている。また、マージャンであるが、一年の作では、「ソウシテトキドキイツモマアジャンヲヨクシマス。」とあった。そこでは、「トキドキ」と言いながらすぐに「イツモ」と言い、「ヨクシマス」と言って、子どもらしい把握と叙述とを見せたが、この二年の中では、「お正月にはいつもマアジャンをせられます。」と述べてあり、「お正月には」と、とくべつのところのを出した筆者の心ねが印象的である。「そしてよるはおそくおそくやめられます。」と述べて、「二年生となつては、このように、夜おそくまでマアジャンのつづけられるのをきわどく描きだすことができている。まさに思考の力というものである。むしろ言う。「おとうさんはマアジャンがすきなのでせう。」と。もはや、批評のことはで文章をむすぶことができるのだ。

④ 「そしてよるはおそくおそくやめられます。」は、特異な表現とも言うことができるものであろう。——おとなの知恵で言え。くりかえしこれを読んでいると、まことにすなおな述べかただなと思われてくる。「おそくおそくまで」となるかと思つたとたんに、私もは、「やめられます」というむすびのことはを読まされて、なるほど、子どもは、このように単直な、文字どおりすなおな述べかた・考えかたをするのかとおどろかされるのである。

さいごの「おとうさんはマアジャンがすきなのでせう。」と推量ふうに述べているところには、また、子どもの、おちついた、真正面からのえがきかたというものが認められようか。





もありません。おとうさんは、

「こりゃ こりゃ。」

などとおつしやいます。今、おとうさんがいなかへ行つていらっしやいます。もしも、おかへりになつたら赤ちゃんは、

「わあっ。」

といつて、おとうさんに飛びつくだらうと思ひます。

(終)

① たくさん書く興味が、わいてきた。上乗の列挙ふうの述べかたは、かげを没している。

③ 赤ちゃんを登場させて、述べることにつくし、『わあっ。』といつて、おとうさんに飛びつくだらうと思ひます。」と、全体のむすびをしあげているところには、作者の、文章をまとめようとする意識が明らかである。——作者の、文章の全体構造のきまりをつけようとする意識が明らかである。

この学年段階になると、もはやこのようなくふうの心をおこしうるのか。

④ 作者には、おもしろい叙述法がある。まず「僕は、おとうさんがだいすきです。」と述べると、それにつづけて、「おとうさんは、子供がだいすきです。」と述べる。つぎに、「赤ちゃん(ん)を、いつもかはい

がられるので」とおとうさんのことを述べると、つぎは「赤ちゃんは、おとうさんがだいすきのでせう。」と述べる。対照表現法とでも言ってよからうか。そのことがとくにきわだたくなっているのは、「おとうさんは、いつも赤ちゃんを連れてお遊びになります。そのはんたいに赤ちゃんは、いつもおとうさんと遊んで居ます。」というところである。「そのはんたいに」は、いかにもはっきりと、前後を対照させようとして、述べたことばであろう。おとなの私どもは、この言いかたに、ちょっとおどろかさされる。おどろいて、たちまちほほえましい気もちになる。対照の意識、対比の意識が、この段階の児童によく出ているのが注目される。

「そのはんたいに」というようなことばもつかえることを、私は、じつによいことだと思ふ。判断力などというものも、こうして、しぜんに作者がみずから練っていくのではなからうか。

「赤ちゃんは、おとうさんがだいすきのでせう。」とむすんでいる、その推量のむすびかたにまた、私どもは、心を引かれる。「です」「です」ときて、「でせう」となっている。やはり、真正面からものを見、ものを考えていることが察せられる。

「お呼びしても」とか、「お遊びになります」とかの言いかたがよくなされている。共通語流の敬語法が、作者の手にはいっている。敬語の意識が、そうとうのものようである。それにしても、「お遊びになる」など、やや表現過剰きみではないか。

- ⑥ 推考を指導するとすれば、一つには、敬語法に関して、「お遊びになる」などの言いかたのやや多いことを、反省させてみるのもよからう。

二つには、おわりのほうの「もしも」というのを、問題にするとういと思ふ。「もし」と「もしも」とをくらべさせ、どういうちがいをそこに見いだすことができるかを、考えさせてみるとよい。

私のおとうさん

僕のおとうさんは私をたいへんかわい  
いがつてくれたさいます。毎朝おと  
うさんは早くお起になつて「ちやんお  
きなさい」といつて僕たちをよこしく  
ださいます。時々僕をよんで  
「だれが新聞をとつて来てくれ」とおつしや  
しやいます。時々お客さまがいらつしやつ  
しやつておとうさんとお話しなさい  
時僕たちはふすまのあいだからあ  
つたりぞき見をすると「こりやこりや

私のおとうさん。(五年)

僕のおとうさんは私をたいへんかわいがつて  
くださいます。毎朝おとうさんは早くお起に  
なつて「○ちゃんおきなさい。」といつて僕た  
ちをおこしくださいます。時々僕をよんで  
「だれが新聞をとつて来てくれ。」とおつしや  
います。時々お客さまがいらつしやつてお  
とうさんとお話しなさい時僕たちは、ふすま  
のあいだからあつたりぞき見をすると「こ  
りやこりや向ふへ行つておいで。」とおつしや

ふへ行つてありて。とおつしやります  
時時はおたいさんたちと野球をなさ  
ることもありますよ。とおつしやつ  
てたませおなげになさるとおにいさ  
んは、  
「ストライクッ！」  
と、いかにもうまそうに又「すう。」と  
なげられます。時たまには僕たちが花を持  
つて帰るとどうじに「花をうゑて。」といふ  
といふと向ふのへやの方で「よし。」  
とおつしやつてこつちへおいでにな  
ります。らんでもも  
「早く出してごらん。」とおつしやつて、僕  
がだしたらもうゑんがはの方へ持つて行か

います、時時はおにいさんたちと野球をなさ  
ることもあります。「ようっ。」とおつしやつ  
てたませ「すうつと」「おなげになさるとおに  
いさんは、

「ストライクッ。」

と、いかにもうまそうに又「すう。」と  
なげられます。時たまには僕たちが花を持  
つて帰るとどうじに「花をうゑて。」といふ  
と向ふのへやの方で「よし。」とおつしや  
つてこつちへおいでになります。らんでもも  
つて帰ると

「早く出してごらん。」とおつしやつて、僕  
がだしたらもうゑんがはの方へ持つて行か

つて行かれます。僕がのばんをおろして  
のびくした。氣持で走つて行く  
ともう植るじゅん備をしてもらいま  
す。うさんがよい成せ  
きでもとつてくるとかはいがって  
たさいますので僕はうちのあとさ  
うさんがだいすきです。

終

終

② ぐんぐんと、わりきって書いていく。しぜんにたくさん書ける。もはや、この人には、この段階でのこ  
とではあるが、筆力と言ってもよいものができてきているのだ。

私の父  
ニ六  
私の父は私が「ただ今。」といつて帰るといふお

私の父 (六年)

私の父は、私が「ただ今。」といつて帰ると

第二章 乙学級児童六カ年の歩み

へりといつてぐうつとお茶をのんでみす松の父はせん茶がだいすきで朝晝晩かみさずのんでみす。もしせん茶を出すものがぬいとだれでもいいから早くおいでといつてお茶をたぎらして飲むのです。僕もたび／＼お茶をさします。するとおとうさんはさもうまそうにお茶を「ぐつ」と飲んでしまふのです。その時はとつても気元がよいのです。又お花もだいすきです。お花を買つて来ると僕の所姉の所へそれぞれのお花をいれてくださいませ。僕がこの前ごく樂寺山へ行つた時（前田・久保・常久君と一しよ）に記念に松の木をとつて来て、おとうさんにその事をいつて「これを植えてください」といつておいてその翌日学校から帰るともう植えてあります。そしてその木に毎日水をおやりになります。それで今ではぐん／＼延びてゐますこの間、その土を妹がほじくるともうちゃんとそれを

「やあ。おかへりといつてぐうつとお茶をのんでみす。私の父はせん茶がだいすきで朝晝晩かみさずのんでみす。もしせん茶を出すものがぬいとだれでもいいから早くおいで。」といつてお茶をたぎらして飲むのです。僕もたび／＼お茶をさします。するとおとうさんはさもうまそうにお茶を「ぐつ」と飲んでしまふのです。その時はとつても気元がよいのです。又お花もだいすきです。お花を買つて来ると僕の所姉の所へそれぞれのお花をいれてくださいませ。僕がこの前ごく樂寺山へ行つた時（前田・久保・常久君と一しよ）に記念に松の木をとつて来て、おとうさんにその事をいつて「これを植えてください」といつておいてその翌日学校から帰るともう植えてあります。そしてその木に毎日水をおやりになります。それで今ではぐん／＼延びてゐますこの間、その土を妹がほじくるともうちゃんとそれを

してゐる。ついでにやいます。父はこのやうに  
花や茶や又支那のまあじやんもやります。

なほしてゐらつしやいます。父はこのやうに  
花や茶や又支那のまあじやんもやります。

① おとうさんの生活の観察が、よくできている。

「又支那のまあじやんもやります。」と、マージャンの話しがむずびになっているのも、なるほどと思  
われる。一年の時以来、とりたててきたマージャンだ。

六年のこの作文は、父の個性をよく描き出している。

このおとうさんは、なんでも、すぐにやってしまうおとうさんのようだ。そのおとうさんにまつわ  
て、作者たちは、たのしい生活をしている。

④ 叙述の調子が、ものをささっととりだし、ことをさささととりまとめていくといったような調子である。

### A' さんの歩み

私ノオトウサン  
私ノオトウサンガキノフキレイナキノ花ヲ  
クノ花ヲカッテイラッシャイマシタ

私ノオトウサン (二年)  
私ノオトウサンガキノフキレイナキノ花ヲ  
カッテイラッシャイマシタ。ノデウヘキバチ

ソデウヘキバチニサシテイラッシャ  
 イマスモウ初マラナイナト私ハ外ヘ  
 デテキンジョノミワ子チャントケンイ  
 シンシアソソンドダストムカフカラ私  
 ノトナリノヒロ子チャンガ来タソソイ  
 マダアソソンデイルトオトウサンガダ  
 イガクカラカヘッテイラッシャタノテ  
 オカヘリナサイトイツタラタダイマ  
 トオツシヤタワタクシワオトウサン  
 トイツシヨニカヘッタソソンデカヘ  
 ツデミタラオミヤゲガアッタ

② おとうさんに関して、はじめから、具体的な事実が語られている。かなりめずらしい例とも言えようか。

私のおとうさん

私のおとうさんは朝ねぼうです。いつも八

ニサシテイラッシャイマス。モウツマラナイ

ナト私ハ外ヘデテキンジョノミワ子チャント

ケンケンシアソソンドダストムカフカラ私ノ

トナリノヒロ子チャンガ来タ。ソシテマダア

ソソンデイルトオトウサンガダイガクカラカヘ

ッテイラッシャタ。ノデオカヘリナサイ。ト

イツタラタダイマトオツシヤタ。ワタクシワ

オトウサントイツシヨニカヘッタ。ソウシテ

カヘッテミタラオミヤゲガアッタ。

私のおとうさん (二年)

私のおとうさんは、朝ねぼうです。いつも八

時分に、學校がはじまるのに七時におくき  
 になりました。日ようと、月ようはやすみなの  
 で、八時ごろにおくきになれます。おとうさ  
 んは、たばこがすきなので、たばこがないと  
 たばこをのまんときがすまん。といっ  
 て、いらっしゃいます。たばこをたくさんお  
 のみになるので、はがきいろいろです。前私  
 と、おとうとと、おとうさんとで、まちへい  
 った時、本をかっていたとききました。私の本  
 をかっていたとききました。私の本は笑ひの王  
 様といふのをかっていたとききました。おと  
 うこのはまんじあのかんたといふのを  
 かっていたとききました。私はおとうさん不  
 大すぎです。

(終)

② すなおに生活をえがく発想——思考法——が認められよう。

時分に、學校がはじまるのに七時におくき  
 になります。日ようと、月ようはやすみなの  
 で、八時ごろにおくきになります。おとうさ  
 んは、たばこがすきなので、たばこがない  
 と、「たばこをのまんときがすまん。」といっ  
 て、いらっしゃいます。たばこをたくさんお  
 のみになるので、はがきいろいろです。前私  
 と、おとうとと、おとうさんとで、まちへい  
 った時、本をかっていたとききました。私の本  
 は、「笑ひの王様。」といふのをかっていた  
 とききました。おとうこのは、「まんぐわのかん  
 たい。」といふのをかっていたとききました。  
 私はおとうさんが大すぎです。

(終)

私のおとうさんは、  
の先生をし  
ていらつしやいます。よいおとうさんで御飯  
の後など用のない時はあそんで下さいませ  
でもおとうさんにくせがありません。そのく  
せは、朝ねぼうです。あんまり朝ねぼうをし  
て学校をおくれさうになると  
「これは大変」  
と言つて、急いでとびおきになります。そ  
んなにおそくまでおきていらつしやらないの  
と弟がいつも、  
おとうさん、もう、おそいのよ。  
といつておこしいかなくてはなりません。  
きのふの日曜などはおこしいといつてもなか  
くおきてくださいませ。けれども、私  
と弟でおふとんを 後の方からそつとあける  
とおとうさんは、  
「だれだ、寒いではないか。」  
とおつしやいます。私が、

私のおとうさん (三年)

私のおとうさんは、〇〇〇〇〇〇〇の先生をし  
ていらつしやいます。よいおとうさんで御飯  
の後など用のない時はあそんで下さいませ。  
でもおとうさんにくせがありません。そのく  
せは、朝ねぼうです。あんまり朝ねぼうをし  
て学校をおくれさうになると、  
「これは大変。」

と言つて、急いでとびおきになります。そ  
んなにおそくまでおきていらつしやらないの  
で私と弟がいつも、

「おとうさん、もう、おそいのよ。」  
といつておこしいかなくてはなりません。  
きのふの日曜などはおこしいといつてもなか  
くおきてくださいませ。けれども、私  
と弟でおふとんを 後の方からそつとあける  
とおとうさんは、  
「だれだ、寒いではないか。」  
とおつしやいます。私が、

わたしよわかる。

といふと、着衣

「僕だよ、ねえちやんと一しよ。」

と言つた。ちやんと、素彦。

「なあんだ、ちやんと素彦ちゃんか。」

とおつしやつた。御飯の時、おとうさんが

「と素彦にはかなはないよ。」

とおかあさんにおつしやつたので私が

「だつておとうさんがなかくおきて来て下

さらないんだもの。」

といふと、弟が

「さうだい。」

と言つたのでおとうさんは、

「さうか、おこしにきたのか、それは、すま

とおつしやつた。

「わたしよわかる。」

といふと、弟が、

「僕だよ、○ねえちやんと一しよ。」

と言つた。おとうさんが、

「なあんだ、○ちやんと、素彦ちゃんか。」

とおつしやつた。御飯の時、おとうさんが、

「○○と、素彦にはかなはないよ。」

とおかあさんにおつしやつたので私が

「だつておとうさんがなかくおきて来て下

さらないんだもの。」

といふと、弟が

「さうだい。」

と言つたのでおとうさんは、

「さうか、おこしにきたのか、それは、すま

とおつしやつた。

(終)

④ 叙述力・描写力がすぐれていると思う。

会話のさせかたに注意したい。筆者の能力が、ここによく認められる。

(一)

私のおとうさん

私のおとうさんはこのごろ目がすこし赤いと赤いやうなのであかあさんじゃなくよるおそくよるおそくまであきてゐらつしやるからですよ。とあつしやうた。私はあとうさんは大へんえらいと思ひました。でも朝はあまり早くおきません。そうして、大そうお酒とたばこがすきです。けれど、お酒はこのごろはいきふなので、お酒のあるときだけですがまんなさいですが、たばこはまた

私のおとうさん (五年)

私のおとうさんは、このごろ目がすこし赤いやうなのでおかあさんにきくと、「よるおそくまでおきてゐらつしやるからですよ。」とおつしやうた。私は、おとうさんは、大へんえらいと思ひました。でも朝はあまり早くおきになりません。そうして、大そうお酒とたばこがすきです。けれど、お酒はこのごろはいきふなので、お酒のあるときだけがまんなさいですが、たばこは、まだおやめに

おやめになりません。私は早くおとう  
さんがおやめになれはいいのになあ  
と思ひます。そんなことを思ふといや  
になりませんが、きよ年み戸においでに  
なつておみやげにちひさな裁縫箱を  
贈りました時や、東京に三月のお  
いでになつた時、東京からピンセンで  
ふうとう、ピリスなどをおくつてもら  
つた時のやうに、いつもおこなであれ  
ばいいのになあ、つくづく思ひます。  
おとうさんはこのごろおなかがいた  
めてねてゐらっしゃいます。が、学校で  
おとうさんのしげふがあるときは、やす  
まず、学校においでになります。

なりません。私は、早くおとうさんがおやめ  
になればいいのになあと思ひます。そんなこ  
とを思ふといやになります。きよ年み戸に  
おいでになつて、おみやげに、ちひさな裁縫  
箱をもらつた時や、東京に三月月おいでにな  
つた時、東京からピンセンやふうとう、ピー  
ズなどをおくつてもらつた時のやうに、いつ  
もおこなであればいいのになあ、つくづく  
思ひます。おとうさんはこのごろ、おなかを  
いためて、ねてゐらっしゃいますが、学校で  
おとうさんのしげふがあるときには、やすま  
ず学校においでになります。

おとうさんは、しゅうしんの先生の一日にじげふのない日があります。でも、おとうさんか学校においでになるときは、おとうさんもおへんたうをもつて、おとうさんは、つりとしほひがりがおすきです。ずつと前、つたつたかかわすれましたが、おとうさんとおとうさんの村の太田といふ人として、江波に雨の降る日につりにいかれました。おとうさんと太田さんは、それほごつりがすきなのです。この間もおとうさんは、かぜをひいてゐるのに、私たちが一人、江波に貝をほりにいって、大きなかごにはまぐりと、べた貝をたくさんとつてゐらつしやいました。

終

おとうさんは、しゅうしんの先生で、一日にじげふのない日があります。でも、おとうさんが学校においでになるときは、いつもおべんたうをもつてゐらつしやいます。又、おとうさんは、つりとしほひがりがおすきです。ずつと前、いつだつたかわすれましたが、おとうさんと、おとうさんの村の太田といふ人としよに、江波に雨の降る日につりにいかれました。おとうさんと太田さんは、それほどつりがすきなのです。この間もおとうさんは、かぜをひいてゐるのに、私たちがいかなかつたので、一人江波に貝をほりにいって、大きなかごにはまぐりと、べた貝をたくさんとつてゐらつしやいました。

終

- ② また、具体からはいつている。——「私のおとうさんは、このごろ目がすこし赤いやうなので……。」
- もはや書く生活が身につけている、と言つてよいのか。
- ③ だからしぜんに、長い文章が書けている。

私の父

私の父はとても釣りかすきでよくけんしよ  
 中学校の裏に貝を堀りにまゐり、明  
 治橋の方には、  
 前は天貝や、また貝をとりにつてぬまし  
 か、今頃はハマグリやアサリです。さうしてこの  
 おいだでもおさかなが一匹しか釣つてこな  
 ったつて、夫根氣よく釣りにいきます。それば  
 父は釣や貝堀がすきなのです。  
 さうして日曜でも朝から机の前ですわつて、勉強  
 はかりしてをります。さうして、御飯の時には二  
 階からありてきます。又、学校に早くい  
 かなければ、ならない時には、早くおきてお

私の父 (六年)

私の父はとても釣りや貝堀りがすきでよくけんしよ  
 中学校の裏に貝を堀りにまゐり、明  
 治橋の方におさかなを釣りにいきます。貝を  
 堀るのは、前は、大貝や、また貝をとりにつて  
 ぬましましたが、今頃は、ハマグリやアサリ  
 です。このあいだでも、おさかなが一匹しか  
 釣つてこなかつたのにまた根氣よく釣りにい  
 きます。それほど父は釣や貝堀がすきな  
 のです。

又、日曜でも朝から机の前ですわつて、勉強  
 ばかりしてをります。さうして、御飯の時に  
 は二階からありてきます。又、学校に早くい  
 かなければ、ならない時には、早くおきてお

には、おそくおそくおきてきます。夜の御飯が  
すむと弟は父に漢文をよめはうてゐます。私  
時々、弟と一しよにならひます。漢文はとて  
つかしいものです。私はよく父はこんなにおほ  
えたものだなあと思ひます。父は又よく高師の  
生とまよんでおひります。きのふでも、二十四人こ  
りれました。夜のおべんたうをもつてこられ  
ました。おとうさんは生とがきたのかとてもうれ  
しうで、ここにこしてゐました。

(終)

いて、おそい時には、おそくおそくおきて  
きます。夜の御飯がすむと弟は父に漢文をを  
そはつてゐます。私も時々、弟と一しよにな  
らひます。漢文はとてむつかしいもので  
す。私は、よく父はこんなにおほえたものだ  
なあと思ひます。父は又、よく〇〇の生とを  
よんでやります。きのふでも、二十四人もこ  
られました。夜のおべんたうをもつてこられ  
ました。おとうさんは生とがきたのがとて  
うれしうで、ここにこしてゐました。

(終)

④ 「貝を堀りにまゐり」とあり、おとなっぽい敬語法にも、作者は習熟していることが、ほほえましく観  
察される。

「また根気よく釣りにいきます。」とある。「根気よく」がよく効いている。そういえば、五年の時の  
作文にも、「いつもこんなであれはいふのになあと、つくづく思ひます。」とあった。これの「つくづく」  
が、よく効いている。——多少おとなっぽい言いかたではあるけれども。作者は、五年生六年生の段階に  
なって、そうとうに表現力を高めているのだ。

⑥ 話題にしたことが一つある。「父は又、よく〇〇の生とをよんでやります。」は、まさに戦時中の、食

糧難のころのことである。「父」さん母さんが、こまっている生とさんたちのために、いろいろと心をくだかれる。家庭での、おとなの会話が、しぜんに、子ども心に浸透したのである。

「よんでやります」とあるが、これは、その家庭会話の一はしの、しぜんにとり用いられたものか。本人は、なにげなく、「やります」と言いあらわしているのであろう。

しいて言えば、ここは、「あげます」と推考されてもよいところかと思う。もっとも、この作文の筆者は、「やります」のつきには、「きのふでも、二十四人もこられました。」「夜のおべんたうをもつてこられました。」と書いており、〇〇生たちに対する愛敬の念の表現法は、もはやじゅうぶんに持っているのである。敬語法の生活に、ほほ、遺憾はない。

ただ、ときに、素朴な言いかたが出てくるのを、指導者は注意すべきであらう。

### B'さんの歩み

私ノオトウサン

ウチノアカチャンハ、ナマイハ、ミチアキト  
イヒマス。トシハ、一ツデス。ミチアキハ、  
私ノオトウサントアソンデマス。

私ノオトウサン (一年)

ウチノアカチャンハ、ナマイハ、ミチアキト  
イヒマス。トシハ、一ツデス。ミチアキハ、  
私ノオトウサントアソンデマス。ミチアキ



④ 「ミチアキモ、イツモヘイタイサンノマネヲシマス。」とある。この「モ」という「てにをは」は、当時の多くの子どもたちの生活を思わせて、まぎれがない。おわりのほうへいくと、「ミチアキガ……私ガ……」と、力づく「ガ」をつかうこともしている。作者には、たしかに、「ガ」や「ハ」とは別に、「モ」もあるのだ。

⑥ 「ミチアキガ」という「ガ」は、「ミチアキハ」の「ハ」を消したうえに書かれている。

### 松のおとうさん

私が習字からかへって見ると、おとうさん  
から一せんをもらって、大ともへ買ひに行  
って、こぶを買って、うちへ、かへって来て、  
うして私の弟との道あきちゃんとしょ  
にあそんでいるとおとうさんがよばれた  
ので、行って見ますと、ばつとを五つ買っ  
て、おいでとおっしゃったので、たばこやにい  
って、五つばつとを買って、かへって、おとう  
さんに渡して、また道あきちゃんと、かくれ  
鬼んごをしました。さうして、ちゃんけんを

私のおとうさん 二年

私が習字からかへって見ると、おとうさんか  
ら一せんをもらって、大ともへ買ひに行っ  
て、こぶを買って、うちへ、かへって来て、  
さうして、私の弟との道あきちゃんとしょ  
にあそんでいると、おとうさんがよばれたの  
で、行って見ますと、ばつとを五つ買ってお  
いでとおっしゃったので、たばこやにいっ  
て、五つばつとを買って、かへって、おとう  
さんに渡して、また道あきちゃんと、かくれ  
鬼んごをしました。さうして、ちゃんけんを

して見ると私が負けたので、鬼になって目をつむぎました。

して見ると私が負けたので、鬼になって、目をつむぎました。

① 「私のおとうさん」とあって、こんどは、一年生のばあいよりも、より多く、「おとうさん」が書かれている。が、弟さんが関心の対象でもあることは、本文に見られるとおりである。（この二年の作文からひるがえって、一年のを見ると、この二年ので、弟さんをえがく方向に走っていった心理が、よくつかめるような気がする。

③ 全体は一文段である。じつは第一文というのが、ずいぶん長くてこれが文段を代表するくらいだ。——このような長いセンテンスが成立することと、分段意識の希薄とは、並行していようか。

④ 長い第一文ではあるけれども、読みかえすことに思われるのは、ことを順序に書きあげていっているおもしろさである。ここに、指導上、たのもしく思われる能力がある。

私のおとうさん  
私のおとうさんはやさしいおとうさんです。いつも三時にはお菓子を下さいますし、左物を買って下さいます。

私のおとうさん (三年)  
私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。いつも、三時には、お菓子を下さるし、いろいろなものを買って下さいます。うちのお

ぞでまかいし、かゝる歸へるれ、時はいつもおま  
 子を持つて歸つて下さいます。さうして  
 おとうさん本を買つて下さいます。さうして  
 かつてあげると言はれます。  
 おとうさんはモーターにも乗せて下さいます。  
 日曜日にはよそに連れて行つて下さいます。  
 おとうさんは、つりがすきです。  
 いつも行つて下さいます。今日も行つて居られ  
 ます。みんなはおとうさんを、つりきち  
 がいと云つて居ます。さうして、おとうさん  
 はねほすけです。いつも日曜日は、九時か十  
 時頃までねいらつしやいます。  
 私のおとうさんは、大すきです。  
 (終)

とうさんは、すきです。かいしゃから帰へら  
 れる時は、いつも、お菓子を持つて帰つて下  
 さいます。さうして、  
 「おとうさん、本を買つて下さい。」と言ふ  
 と、「あとでかつてあげる。」と言はれます。  
 おとうさんは、モーターにも乗せて下さいま  
 す。日曜日には、よそに連れて行つて下さい  
 ます。おとうさんは、つりがすきです。  
 いつも行つてこられます。今日も行つて居ら  
 れます。みんなは、おとうさんを、つりきち  
 がいと云つて居ます。さうして、おとうさん  
 はねほすけです。いつも日曜日は、九時か十  
 時頃までねいらつしやいます。  
 私のおとうさんは、大すきです。  
 (終)

- ① これになると、内容はまったく「私のおとうさん」だけのことになっている。読んで、私も、ああ、そうなのかと言いたい気がする。

③ 三年生のものだ。主題に即して、起文は、「私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。」とされ、結文は、「私のおとうさんは、大すきです。」とされている。

私のおとうさん  
 私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。いつも、晩、ごはんがすむと、弟がおとうさんに、かゝつて行って、「お馬をせえ。」といつておとうさんをころかして、お馬にして、弟が背中の上に乗ると、おとうさんが「ひひひん。」といつてはねおとされる。弟もおもしろいので、こんどはちがふものをしてもらつたそれはてんぐるまです。おとうさんにてんぐるまをしてもらつて、おとうさんが、浦のくらい所に行かける。弟はおそろしといつておとうさんの背

私のおとうさん (五年)

私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。いつも、晩、ごはんがすむと、弟がおとうさんに、かゝつて行って、「お馬をせえ。」といつておとうさんをころかしてお馬にして、弟が背中の上に乗ると、おとうさんが、「ひひひん。」といつてはねおとされる。弟もおもしろいので、こんどはちがふものをしてもらつたそれはてんぐるまです。おとうさんにてんぐるまをしてもらつて、おとうさんが、浦のくらい所に行かける。弟はおそろし

中かきおりにおとうさん、は、遠く、持の  
中にめくおてごとく、ごとく、ごとく、と、  
は、おれると、弟は、「うは」といつて逃が  
て、弟は、ほら、さきも、持つて、行く、と、風品場  
の中の方で、ごとく、ごとく、と、いつて、  
おとうさん、さき、うらめし、と、いつて、出  
て、来ら、れ、る。又、おとうさん、が、けん、けん、  
の方、に、ま、は、つ、て、ふ、く、ろ、を、な、げ、ら、れ、  
る。弟は、おそろし、が、つ、て、お、か、あ、さ、ん、の、所、  
に、行、く。私、の、お、と、う、さ、ん、は、こ、も、お、し、ろ、い、お  
し、ろ、い、お、と、う、さ、ん、が、こ、も、お、し、ろ、い、お、  
ま、し、た、。

いといつて、おとうさんの背中からおりる、  
おとうさんは、風品場の中にかくれて、ごと  
くごとくといはされると、弟は、「うは  
ー。」といつて逃げる。弟がほうぎを持つて  
行くと、風品場の中の方で、ごとく「ごと  
く。」するとおとうさんが、「うらめしー。」  
といつて出て来られる。又おとうさんが、げ  
んかんの方にまはつて、ふくろをなげられ  
る。弟はおそろしがつて、おかあさんの所に  
行く。私のおとうさんはとてもおもしろいお  
とうさんだと思ひました。

① こんどは、「おとうさん」をたて軸にとりながらも、また、よこ軸に弟さんを登場させる。(——かね  
ての弟さんだ。)このような操作のできるところが、やはり五年生ということなのか。ここからふりかえ  
って、一年生の、弟さんをえがくことにほとんど終始したのを見る時、また、「私のおとうさん」と題し

松の父

私の父はやさしい時はやさしくひどい時はひ  
どくじようだんやお酒によはれた時は、おも  
しろいので、弟はすぐ「馬をしてー。」と言ひ  
ます。父はすぐ「馬を乗ると」「ヒ  
ヒーン。」といつてころげられる時があるの  
で、ひどくおもしろがつて言ます。そんなに  
おもしろい時はおもしろく、ひどい時は、よ  
く御飯の時「ラヂオをして来なさい。」とい  
つてようじをきかないと、「ようじをきかな  
いものは外へ出とけ。」と言はれる。やさし  
い時には、お菓を下さつたりしてたいへんやさ  
しい。

今頃は、もうみんな大きくなつたので、父は戸を

ながらも、しぜんにその方向に傾斜していった気もちが、わかるようなこちがする。

③ この作文でもまた、起文と結文とがみごとにすわっている。ことに結文では、「つくづく」ということばまでつかわれていて、表現能力の発達が、じゅうぶんに察知される。

私の父 (六年)

私の父はやさしい時はやさしくひどい時はひどくじようだんやお酒によはれた時は、おもしろいので、弟はすぐ「馬をしてー。」と言ひます。父はすぐ「馬を乗ると」「ヒヒーン。」といつてころげられる時があるの

作つたりりんを作つたりいんなこと女工夫  
 してどうして大作らうとされるので何ですか  
 く出取上るのみやこがたなやいろいな物をし  
 いでは作られたこの間も新聞いふじん父を作  
 る老な父は大へんやさしくおもしろく何でも  
 作られるのでみんな大よるこつて働いてるす  
 何もかにも皆父のおかきである私たちはあり  
 がたい何でもかにもおもしろい大さく

(終)

は、戸を作つたりりんを作つたりいんなこ  
 とを工夫して、どうしても作らうとされるの  
 で、何でもすぐ出来上る。のみやこがたなや  
 いろいな物をといでは作られるこの間も新聞  
 いふびん受を作られた。父は、大へんやさし  
 く、おもしろく何でも作られるのでみんな大  
 よろこびで働いてゐる何もかにも皆父のおか  
 ぎである。私たちは、ありがたく何でもかにも  
 でおいたたく。

(終)

① この「私の父」という題目のもとでは、今までに見られた作文の内容全体をとりまとめた、とても言い  
 たいような内容が展開されている。いわば、ここに、生活内容の総括的な表現が見られる。

もはや判断力をはたらかすことができている。したがって、反省的な筆づかひも見せていて、その点、  
 内容は客観的叙述とも言えるものになっている。叙述の努力はこういう方向にも発展していくものか。

この作文について、書きたい内容の整理のしかたに関する指導をするのは、時宜を得ていよう。(一般  
 に、すなおに書いていても、内容は不整理のことがすくなくない。作者自身が書きたいことをよくつかん  
 で、これを整頓しながら表現していくのは、なかなかむずかしいことであるにちがいない。右の作文の  
 筆者のばあい、前の作文では、おもしろいおとうさんをよくとらえることができた。行動するおとうさん

私ノオカアサン  
 私ノオカアサントマイニチイッシャウノヘヤ  
 ワノヘヤデネマス。サウシテオハナ  
 マシテソレカラオハナシガスンダラ  
 オンガッカイヲシマス。ソレカラ私ノ  
 オノイランコトヲワタウト私ハ  
 フクレタシャボンダマニナテフク  
 テシマヒマスオカアサンモモネナサ  
 イソシナキニイラナイノナラ出クネサ

を、よくとらえることもできた。おとうさんの、そういう生活行動が、いわばよい刺激になって、作者は、書く内容をもりあげている。あのようなもりあげかたを、六年の段階でも、さらに力づよくやらせるように、作者にはたらきかけることは、どんなものであるうか。

C'さんの歩み

私ノオカアサン

私ノオカアサン (二年)

私ノオカアサントマイニチイッシャウノヘヤ  
 デネマス。サウシテ、オハナシヲシテ、ソレ  
 カラオハナシガスンダラオンガッカイヲシマ  
 ス。ソレカラ私ノキノイランコトヲワタウト  
 私ハ、プトフクレタシャボンダマニナテフク  
 レテシマヒマス。オカアサンモ、モネナサ  
 イソシナキニイラナイノナラ出クネサ

ナサイウウシテアンマリオカアサマ  
ガアサシイカラホンキデヘンテコト  
サンマスソノウチイカアサマハネム  
ッテシマヒマス、私ハデンキヲケシテ  
ネムラウトシマスガシヤクニナッタ  
ノデネムラレマセン。

イサウシテ、アンマリオカアサマが、ヤサシ  
イカラ、ホンキデ、ヘンナコトサシマスソノ  
ウチオカアサマハ、ネムッテシマヒマス。私  
ハ、デンキヲケシテネムラウトシマスガ、シ  
ヤクニナッタノデネムラレマセン。

② 思いつくことがつきつきにあつて、文章が長くなつてゐる。これでは、まず、長く書けたことをほめるべきではないか。

④ 「シヤクニナッタノデ」など、おとなから言えば未成熟な語句が、ところどころにみられる。研究的な立場から言うならば、ずいぶん注目すべきことであつて、そういうものを前後にいくつも見せている。この文章は、表現力の豊かな可能性を蔵したものと解することができる。

私のおかあさん  
私は一り子ですから、おかあさんがかはいが

私のおかあさん (二年)

私は一り子ですから、おかあさんがかはいが

がうてくれま  
 夜ねる時でもお話をしてくれ  
 ます。おかあさんは女学校の先生をしてゐら  
 っしゃるので、土ようびの晩いつでもおかへ  
 りになります。そして、月ようびの朝、汽  
 車に乗って向かふへ行かれます。おかあさん  
 のゐる所は、「みつ」といふいなかです。  
 私は、土ようびの日は、たのしくまっています。  
 十八日の日は、学校の方でいそがしいか  
 ら、かへられませんでしたが、私は、おかあさ  
 んの所へ手紙をかこうと思ひます。

② 「私は一り子ですから」と書きはじめている。二年生にもなると、もうこのような言いかたができるのか。

一年生の作文で、なにげなく受けとらされていた生活内容が、ここではもはや、やや強調して言えば、深刻な生活事実であることのさとられるように、作者の筆は進められている。

私のおおあさん

私のおおあさんはとてもやさしいおおかあさんです。日曜日はいつも一しやうに、町へおひ物に行きます。私がほしいものは何でも買つて下さいませ。おあさんがみつから歸へられるのが私ほうれしくてたまりません。歸へられるとおいしい物もたべられます。たは一しやうにねてお話してもらひます。おもしろいのや、かはいさうなのや、おそろいのや、色々あります。おあさんはとてもお話が、上手です。

此の前おあさんが、病氣になられた時、私が心配し、私が、病氣した時、おあさんが、心配されたので、おあさんが、

「どうてんになつたね」とおつしやると、私

は、「いや、どうてんではなく、おあさんの方が、ひどかつたよ。」でも、〇〇ちゃん、二年生の時、心配させたから、〇〇ちゃんの方が、たくさん心配かけたよ。」と言つて笑はれた。とてもゆかいなやさしい、よい

私のおかあさん (三年)

私のおかあさんは、とてもやさしいおかあさんです。日曜日は、いつも一しやうに、町へおひ物に行きます。私がほしいものは、何でも買つて下さいませ。おあさんがみつから歸へられるのが、私は、うれしくて、たまりません。歸へられるとおいしい物もたべられます。夜は、一しやうにねて、お話してもらひます。おもしろいのや、かはいさうなのや、おそろいのや、色々あります。おあさんは、とてもお話が、上手です。

此の前おかあさんが、病氣になられた時、私が心配し、私が、病氣した時、おあさんが、心配されたので、おあさんが、

「どうてんになつたね。」とおつしやると、私は、「いや、どうてんではなく、おあさんの方が、ひどかつたよ。」でも、〇〇ちゃんは、二年生の時、心配させたから、〇〇ちゃんの方が、たくさん心配かけたよ。」と言つて笑はれた。とてもゆかいなやさしい、よい

い、おかあさんです。

おかあさんです。

① おかあさんとの、いわばとくべつの生活の様相が、ここにくっきりとえがかれている。おかあさんをえがこうとして、大いにのりかかっていくような気もちが見えて、私どもは、これを読むだけに、たのしく感じる。この作者にかぎらないことであるが、この、のりかかっていくような、あどけない気もちは、まずは三年生のころに顕著となってくるのではないか。

④ 「どうてんになったね。」とおかあさんのことばが、作者に、いきいきとした返事をさせている。時におよんでの巧妙な刺激というものが、どの筆者のためにもたいせつであることが痛感される。

私のおかあさん  
 私のおかあさんはとてもおもしろいおかあさんです。子供は私が一人なのでとてもかはいがつて下さいますが、おこられる時はとてもおそろしいです。学校の生徒をおこるやうに、  
 「そんなことをしたら、ひどいですよ。」  
 といはれたりなさいます。  
 おかあさんはとてもおもしろいので、

私のおかあさん (五年)

私のおかあさんは、とてもおもしろいおかあさんです。子供は私が一人なのでとてもかはいがつて下さいますが、おこられる時はとてもおそろしいです。学校の生徒をおこるやうに、  
 「そんなことをしたら、ひどいですよ。」  
 といはれたりなさいます。  
 おかあさんはとてもおもしろいので、

風呂へおかあさんとはりつた時はお湯があら  
れ出て私はおかまとおかあさんにばさまわて  
うりてゐるのです。それでよくびまでお湯は來  
てゐます。おかあさんがたゞれると私はどすん  
と下へおちてお湯はかたまでいりかありません。  
おかあさんに私がいつても

おかあちゃんはおんまりふとつてゐるからお  
風呂へはりつた時はきつてたまらなかりから  
まう少しもせよとひんとおかあさんは笑ひな  
がう「アッ、アッ、アッ」が言かんでおんまり  
でお湯があられ出たりするのだよ。  
とおつしやつて私を、からかはれます。

おかあさんはよくオルガンをひかれます。  
いはつてそりくりかへつてひかれます。  
私はそれを見るときはおかしくたまりませぬ。  
みつからかへられた時は、いつでも、私  
にお宮やげがあります。本や、おかあさんが  
生徒におしへた、えいようのある、だい用食

お風呂へおかあさんとはいつた時はお湯があ  
ふれ出て私はおかまと、おかあさんにはさま  
れてういてゐるのです。それでもよくびまでお  
湯は來てゐます。おかあさんが、たゞれると、  
私は、どすんと下へおちて、お湯はかたまで  
しかありません。おかあさんに私が、いつても  
「おかあちゃんはあんまりふとつてゐるか  
ら、お風呂へはいつた時は、きつてたまら  
ないからもう少しやせて。」といふと、おか  
あさんは、笑ひながら、「うそいひなさい、  
〇〇が百かんでおなので、お湯があふれ出  
たりするのだよ。」  
とおつしやつて私を、からかはれます。  
おかあさんは、よくオルガンをひかれます。  
いはつてそりくりかへつてひかれます。  
私は、それを見るときはおかしくたまりませ  
ぬ。みつからかへられた時は、いつでも、私  
にお宮やげがあります。本や、おかあさんが  
生徒におしへた、えいようのある、だい用食

かへらおきます。又白米のおすしをきつてかへつてこらぬます。  
 ぬのおかあさんはほんとうにやさしいおきし、  
 ろいおかあさんです。

などをもつてかへられます。又白米のおすし  
 ももつてかへつてこられます。  
 私のおかあさんは、ほんとうに、やさしい、  
 おもしろいおかあさんです。

① 「おもしろいおかあさん」が、たっぷりとおもしろくえがかれている。この作者の、三年の作文で見られた、のりかかってえがいていこうとするいきおいは、ここでも見られる。

私の母  
 私の母は今女学校の先生をしてなりました。汽車に二時間ほど乗るとあき三津といふ所へあつてそこにおります。そして土曜日に歸つてまいります。その度には電車乗り場までおむかへた行きます。今はおみやげにみかんや、ぶどうや、びは、などを、もつて、かへつて下さるので、私は母の歸つ来る土曜日は、いちばんのうれしい日です。

私の母  
 (六年)  
 私の母は、今、女学校の、先生をしてをります。汽車に、二時間ほど乗ると、あき三津といふ所があつて、そこにゐます。そして、土曜日に、歸つてまいります。その度に、私は、電車の乗り場まで、おむかへに行きます。母は、おみやげに、みかんや、はっさくや、ぶどう、びは、などを、もつて、かへつて下さるので、私は、母の歸つ来る、土曜日が、いちばんのうれしい日です。

その晩は、一ツトよしたおて音楽會をいたり一週間の間にたまに色々のお話を出来事を話します。又私の母はおこつたらとておひひのですが、いぢもはとておやといおもしそい入下す。夜はおそくまで私かねむつてゐるまゝらもとて私りや小ねた若娘やとつ下なひをカゝろつて下さいませ。

日曜日は町へよくつれて行つて下さつてきれいな箱やら、千代紙などをかゝて下さいませ。町をあると時私がこまる事は安が小さな聲でこたふした。てあるとつてみんながみやいなにかしうと思つて気がでないのて母にい小とわざとうたふのでこまります。だから、これからだまつてゐる事にしました。

日曜の夕方、三津へかへつて行きます。私は祖母のそばで、又一週間おるすばんをします。私は私の母ほどいい母は、いないと思はれます。

その晩は、一ツしようにねて、音楽會をしたり、一週間の間に、たまに、色々の、お話や、出来事を、話します。又、私の母は、おこつたら、とても、ひどいのですが、いつもは、とてもやさしく、おもしろい人です。夜は、おそくまで、私が、ねむつてゐるまゝらもとで、私の、やおれた着物や、くつ下などを、つくろつて下さいませ。

日曜日は、町へ、よくつれて行つて、下さつて、きれいな箱やら、千代紙などをかゝつて下さいませ。町を、あるく時、私がこまる事は、母が、小さな、声で、うたをうたつてあるくので、みんなが、みやしないかしらと思つて、気がでないのて、母にいふと、わざとうたふので、こまります。だから、これから、だまつてゐる事にしました。

日曜の夕方、三津へ、かへつて行きます。私は、祖母のそばで、又、一週間おるすばんをします。私は、私の母ほどいい、母は、いないと思はれます。

① さすがに六年生の作品である。今までにいろいろとふれてきたことが、すべてここにとりまとめられている。言ってみれば、いちだんと発展した段階で、作者は、母おやとの生活の内容全体を集約しているのである。母おや像は、ここにうきほりにされたと言うことができよう。

④ 母おやの任地「ミツ」に闕しても、作者は、今までたびたび述べてきた。そのような同叙述とでも言うべきものを、前後に比較して、表現法の推移発展をあとづけてみればおもしろかるう。

## 第二節 乙学級他児童作文

### D くん の 歩 み

私ノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサンハ、イツモオコッテキマス。ソレカ  
ラトキドキビヤウキヲシタリマタ口アカナクナッタ  
リシタリ。オカアサンハ、クスリヲカッタリシテイソ

ガシイ。ケレドモイソガシクテモ、ヨクツツシンデ、  
ツヨクナッタリシテ。ソレカラ大イチバへ、イッテカ  
イモノヲシテクタモノヲカッテクタサッタ。カフテク  
ルトボクニクレル。ボクハ、オイシサウニタバタ。サ  
ウシテトキドキオカネラクダサル。

私のおとうさん

(二年)

うちのおとうさんは、毎晩ほくがねる時、おまんぢゅうをたくさんたべるので、ぼくが朝おきて、「どうして晩まぢゅうをたべるのか。」といひますと、おとうさんは、

「あっしまった、とう／＼いはれて、しまった。」

といってあたまをさすりました。ぼくもほしくて／＼たまりませんでした。」

さうしてぼくはまいにち／＼おかあさんにおまんぢゅうをいただきます。

そのうちおとうさんがおなかをこわしたので、おかあさんにしかられました。さうしておいしやさんのうちへ行ってくすりをいただきますに行きました。

私のおとうさん

(三年)

僕のおとうさんは、朝、起きたら先づ第一に、たんけ

つを、はいて、もう一度ねまへお入りになります。日

曜日は、後午二時頃、トキワのえいぐわ館へ連れて行って下さる。さうして、戦争のニュースを見て下さる、おとうさんは、大学の、としよ館へ、つとめていらつしやる。学校から帰られると、げんかんの戸を六かいとん／＼とた／＼かれる、するとおかあさんが走つていかれて、戸をかけられる。さうして学校へ行く時は、どうしても、おなかをおさへて歩かれる。山中の生とは、ぎよろ／＼して見て居る。僕が「どうしておなかをおさへて居るの。」と聞くと「何でもい／＼、だまっておれ。」と言はれる。

おとうさん

(五年)

この間、おとうさんが己いへ行つて植木屋さんに、植木をたのまれた。その日しばらくたつて、うちへ植木屋さんがこられた、外へ出でみると車に乗せたその

木、もくれん、つばき。やなぎのつぎ木。じんちやうげ、などいつばい車に乗せてある。しばらくするとおとうさんが出て来られた。さうして、「もくれんは、この大いさん木のへりに植ゑてください。」などおとうさんも、植木屋さんもとていそがしい、くわを出し植木屋さんは、くわを打ち始めた。もうほつてしまつたので、植木を外からかゝへて来て、ほつた場所にみな置く。うゑてしまつてこんどは水をかけられた。植木屋さんが、帰られたあと。おとうさんが「たくさん買った。これでだいぶん庭がきれいになった。」とおつしやつた。おとうさんはこのやうに、植木が、たいたいそうすきだ。

(終)

私の父

(六年)

私の父は、今では、図書館の方を休かをさしていただ

かれておられ。今度は、ほかの方へかわられるのです。父は、そのじれいの来るのを待つておられます。向かふでは、どうして、五月中には来ると、いはれてゐる。それで父はじれいの、来ないうちに家中をかたづけしておかなければと、いふので、いつで、も家の仕事にとて、も急がしさうである。おとついの朝手紙が来た。父はいそいで外へ出、その手紙を受けとり、まし、ぼくはどうしたのか、と思つたら、父が、向かふから、じれいが来たのだらうと思つたのださうだ、さうしたらおんがいがそれが、ちがつてゐたので、たんそくされておられました。父は又、家の中へはいつて、せつせとはたらいておられる。なにをしておられるかと思つて行つてみると、今度は、木をのこでひいて、はれ木を作つておられた。僕が、「そんなことならぼくが、るすにする。」といつたら「こんなことは、お前たちの手ではとても出来るものではないとおつしやつて、なかなか僕たちにまかして下さらない。かういうふう

にいつでもじれいの来ない中は、とてこんなに、さも  
いそがしきうに働いていられる。

(終)

## E くん の 歩 み

ボクノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサンハドコデモサンボラシニイクトキハ  
タバコヲスツテイキマスアタマハヒゲダラケデスウチ  
デハベンキヤウバカリシテダイコンヤカブノセハハン  
マセンソシテボクバカリニヤラセマスボクハクサヲヨ  
ケタリカブノハガヲレタノヤイロンナノヲヒロイマン  
シタ。ソシテガッコウエイクトキネボウヲシテボクバカ  
リニセヤヲヤカセマスソレデコマリマスボクハオカア  
ンノヤウデス。ケフハオヤスマジデノンキニタバコヲス  
ツテイマス

私のおとうさん

(二年)

うちのおとうさんは、らんがとてもすきでらんにごや  
しをやったりいろいろ手いれをなさいます。時にはお  
きやく様がいらっしやる時にはこのまにおかざりに  
なります。おとうさんがちよおせんにいらっしやる時  
に、おねえさんがおとうさんをおむかへにいつてかへ  
つて、こたつにあたつておとうさんが汽車にのつてか  
ら、「やれ〜。」といったさうです、うちは、おと  
うさんがいないので、とてもさびしいですおとうさん  
がかへつてくるのはいつかいつかとみんなたのしみで  
す。おみやげはなんだろう。(おわり) ぼくのおみ  
やげなんだろう

私のおとうさん。

(三年)

僕のおとうさんは大へん、らんがおすきです。いつで  
もひまの時は、らんにごやしをやったりなさいいま

す。畠にもお行きになります。よるごはんの時に、おかしやみかんなどが出た時はんぶんたべてはんぶん僕に下さいます。小さい僕がえきりにかゝった時。本屋さんから本を買って来て僕によんで下さったのもおほへて居ます。又日曜日でも学校にお行きになる前に、すしおくとこれは大変だと言つて大急ぎで家を出られます。畠しごとの時、は、きものをまくつておびのところへはめて、くはを持ってたがやして居られます朝は大へんねほすけです。学校がある時、は少し早くおゝきになります。おきやく様があるとたばこのけむりをほかほかとふかしながら、「ははあ、なあるほどねうんく。」とおとうさんのごへんぢを聞いて居るとおもしろいやうです。」（おはり）

私のおとうさん

（五年）

私おとうさんはたいへんいいおとうさんです。おとう

さんはうちに畠があるのでひまな時には畠でいろいろな物を作られます。又夜になると、私としようぎをして下さいます。前頃は私がつよかつたのですが、ちか頃は私がつよくなるやうになりました。勝つた時には、「父さんつよくなつたあつははっ。」と言つてよろこばれます。朝などは大いへん早おきです。いつも朝おきると、れい水まさつと体そをなさいます。そんなことをなさるので体は大へんちようぶです。夕はんの時などはお茶のみながら子供の時の魚とりや兎かりの時などのお話しをして下さいます。いなかにおられたのでかいこをかふ事もくはのことも畠のことも、よくしつておられます。さんぽなどに行つてもはなほなどがぎれてもおちてゐるわらをあんで、つなを作つてはなほを立てて下さいます。それから己斐へ行つてよくしん茶をつんでこられて夕はんの時などうれしさうにおのみになります。私のおとうさんは何でも人間のことならよくしつておいでです私のおとうさんは、大

すぎです。

## 私の父

(六年)

僕のおとうさんは、今年五十七におなりになります。だいぶ年をおとりになつたので少々頭に白ががふえたやうです。でも元気な気持とやさしい心はちつとも昔のお父うさんと變つてはゐません。この大戦争が始まつてからおとうさんは大へん元気におなりになつたのです、このあひだも御飯の時にみんなでお父うさんに「お父うさんは元気であるですねえ。」と皆んなでほめるやうにいふといつても自分が元気になつたわけをくはしく話して下さいます。近ごろははいきゆが大へん少ないので裏にあき地があつたのをたがやして少しの物でもよいから作つてゐますかぼちやも植えました。なすもきゆうりもとまとも植えましたこれはみんなおとうさんがあせを流して作つて下さつたのです

うちの畠はせまいと言つてもそうとう広い畠なのでたがやすのにたいへんです。

夕飯の時畠で取れた物をにると「お父うさんの作つたのはうまいだらう。」と笑いながら言はれます。

## F くん の 歩 み

### 私ノオトウサン

(一年)

ウチノオトウサマハ、トキドキエホンヲカツテクレタリシマス。ボクハマイニチベンキャウヲシテ、ウチノカズチャント、イッシヤウニアソビニ出マス。パンニナルト、スグオトウサマニボクガエホンヲヨンデヨンデトイフトスグヨンデクダサイマス。

### 私のおとうさん

(二年)

私のおとうさんは、このごろすまふのことばかりや

っていらつしゃいます。

おとうさんは、あざ、ばんすまふの、まけた、かったのを、つけて、いらつしゃいます。

おとうさんはごはんをたべる時、

「ちょつと、まって、もう二つ、まるをしたら、すむから。」とおつしゃいます。

私のおとうさん

(二年)

私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。おとうさんは、大学へつとめていらつしゃいます。おとうさんがかへってこられると、すぐ新聞をよまれます。又みんながおきて、かほをあらつてしよくじについた時おとうさんはまだ新聞を読んで居られます。晩は、げんかうや、おしほをしかへたりなさいますから夜はなかなかねられません。さうして僕がたくさん勉強をした時は

「今日はいつものよりたくさんしたから町へつれてつてあげやう。」

とおつしゃいます。僕はおとうさんが大すぎです。

(終)

お父さん

(五年)

ぼくのお父さんはやさしいお父さんだ。おとうさんは、よくさん、そう年だんのぶんだん長だ。いつでも晩の七時ごろかいぎがあるのでいかれる。又植物のげんこうをかかれるので晩の一時ごろまびおきて、かかれる。五月二日の日曜にとこにたくさんの本がつみかさねてあるのをせいとんなさつた。その本はほとんど、ぜんぶ植物の本や動物の本だ。二さつ宮本武さしのあつた本があつた。時々、日曜におとうさんと植物さいしゆうにつれて行つて下さる。みたきの山には入るとむうぎいや白いらあ、赤とんぼがいた。ぼくは、とん

ほが出るのは早すぎると思つた。

終

## 私の父

(六年)

私の父はこのあひだまで大学につとめておられたが、いよ／＼大血戦になり戦争もはげしくなつたので、父は、大学をやめてこの間新しく建つた○○○○科学研きゆう所のギ師と、してつとめることになつた。父に研きゆう所のやうすをきくと、毎日、毎日よその人がこられるさうだ。父はおもに、植物やいろ／＼な野草のたべ方などを教へられるのである。この間も、女学校の生徒さんをなんべんもこうしゆうにいかれた。時々日曜などに、妹や僕を野原につれていつて下さる時がある。そして、いろいろなたべられる野草を取つてきて、それを母が料理して下さつて食べるのである。料理する時は、大へんにぎやかである。おだんごを作つたり、いろいろなことをする。よもぎ、かはらよもぎ、

おぎやうその三つをべつべつおだんごにしてたべた。中でもおぎやうがいちばんねほくておもちみたいでおいしかつた。又すものを作つたりなんかしてたべた。ほくも父にまけないほど植物を知つて見たいものであるが、そうかんたんにはおほへられない。ほくはまだ父の $\frac{1}{100}$ もしつていない。今からでもすこしづつでも父に植物を教へてもらつて、おほへやうと、思ふ。

(終)

## Gくんの歩み

### 私ノオトウサン

(二年)

私ノオトウサンハイツモ、イツモサカンチャウニ、イツテ、シゴトラシテ、ヒルニナルトカヘツテキマス。ソシテユウガタニナルト「ボクカオフロニハイテアガルトキ、ニハドウシテモテヌグイランボリマス。」ソ

ンテ、ネマキヲキテテ、ゲンカンノカギヲシメマス。  
ソントオトウサンガジテンシヤヲサウコニヘレテ、ゲ  
ンカンノ所デオトウサンガカヘッタヨトイヒマス、ト、  
アカチャンカヨロコンデトウタントウタントイツテ、  
ヨロコンデキキマス。ソレカラスコシスルトオトウサ  
ンガシゲミチャントイツテオヨビニナリマストシゲミ  
チャントオヨビニナリマス。

私のおとうさん

(二年)

うちのおとうさんは、ねぼうなので、うちのみんなか  
ら「ねほすけ。」といわれてゐます。おとうさんは、  
ねほすけなので、みんなが、ごはんを、たべるころに、  
かほをあらって、ぼくたちがごはんを、たべたあと、  
ごはんをたべて、おねえさんと、いっしょに、土橋の  
でん車道の所まで行って、それから、みせへいってほ  
たらいて、かへりには、あぢつけパンを、かって来て

下ださいます。

うちのしげみちゃんは、おとうさんが、かへると、す  
ぐに、とのかげにかくれて、「わっ、」といっておどか  
すと、おとうさんは、「びっくりした。」といつてびっ  
くりしたふりを、すると、しげみちゃんは、「びっく  
りしたでしょ。」といひます。そうして、かって来た  
パンをたべて、うがひをして、ねました。」

終

私のおとうさん

(三年)

私のおとうさんは、やさしいおとうさんです。朝、お  
とうさんの起きられるのは、僕より、少しおそいく起  
られます。さうして、僕たちが、ふくをきるまで、に、  
おとうさんも、二階で、着物を着かへて居られるの  
です。僕が下から、「みなさん、ほとけ様をおがむの  
ですよ。」といふと、おとうさん急いで、二階から、

下りてこられます。みんなほとけ様を、おがむと、今

度は、とうほうようはいをし、もくとうをして、御飯

をたべます。それから、学校へ来る時間まで遊んで居

ます。けふ、学校へ来る時にも、おとうさんと、おね

えさん弟、と、一つしよに来ました。おとうさん、た

ちは、船入で、乗かいされて、たかの橋ゆきへのら

れ、土橋で下りられて、佐官町のみせまで、歩いて行

かれます。この前、弟の克巳ちゃんを、つれて、ふぞ

く国民学校へ、入学しけんを、しにつれてこられました

た。おとうさんも、この頃は、いそがしくて、くた

まらないさうです、佐官町のみせで、鉄を、うつたり、

鉄を、よそへ持つて行つたりされます。

夜おとうさんの、かへられる少し前に御飯をたへ、お

ふるいもはいります。おとうさんは、ニューウスが大

そうすきですから、いつも、ラヂオのニューウスの時

間には、すぐラヂオのスイッチを入れにいかれます。

おとうさんは、小さいものには、いつもひいきを、さ

れます。僕は、おとうさんが大すきです。

(終)

僕のお父さん

(五年)

僕のお父さんは、舟入にかはつて来て、畠を作つたの

で、このごろは、朝五時半ごろから起きて、畠のさく

もつにこやし、水をかけて、「早く出来るのがたのし

みだよ。」とおつしやいます。朝僕か起きて、庭に植

えてある「いちぢく」にみがついてゐたので、おとう

さんに「いちぢくの木にみがつてゐるよ。」といふ

と、うれしさうに「ほうー、それはよいね。もういち

ぢくにもみがつくのかな。」とおつしやいます。この

間でも、ぶだうに葉が出たのを見られると、「潮につか

つても葉を出したね。ぶだうは、げんぎものだから。」

とおつしやいます。そんな時には僕もつられてうれ

しくなつて来ます。そのつぎの日は、ぶだうにこやし

や、水をかけてたり、トマト、大豆、柿、ビワ、などにこやしをやつたりして、うれしさうにしてゐられます。時々、つかれておそくお起になることさへあります。うちのお父さんは、用事で大阪に行つても、かへる時には、おみやげをかつて来て下さいます。そこが僕はすぎです。舟入に来てから一度大阪に行かれました。その時のみやげは、らつかさん。ならづけでありました。

お父さんは、今ごろ庭のことに心をおかけになりません。前であれば、「石はこれがおもしろいかたちをしてゐる。」とか、この松はおしいとかいろいろいっておられました。今では、庭のことは、うんとおすんともいはれません。

ただ畠のこともだけを気にしておられます。人のきらがるこやしをやつたり、するのをたのしんでおられます。

うちのお父さんは、何でもよくしてくれ、又、やさし

く、よくはたらき人をよろこばすのがつきな お父さんです。

(終)

### 私の父

(六年)

私の父は、左官町で機械工具商をしてゐます。ですが店では、第二の大将です。でも、家にかへつて来ると、すぐ畠の方へ行きます。そうして、そこから、こえをかつぐ物を取り出し、便所のふたをあけて、こえをうすめたり、そのままを野采にやつてゐます。そのおかげで、今ごろでは、ぶんどうでも、さいまめでも、いちごでも大へんよく出来てゐます。父はそれを見ては、「よく出来た。よく出来た。」といつてよろこんでゐます。ぶんどうがだいぶ出来た日に、夕方かへると、「ちよつと、ぶんどうをもいでくるから。」といつて、はさみと、かごを手にして、出かけようとす

ると、母が、「まだ、少し出来たばかりだからもいでもつまりませんよ。」といつてとめました。島に行つてぶんだうを取つて来たこともあります。

また、私の父はたいへんやさしい父です。

ある日のこと、私が、こうきで、六十点を取つた時父に見せると、「まちがつたところをほかのかみにやりなさい。」といつて、いつまでも私のそばについて、教へてくださったこともあります。ある時、私がこくごの帳面を見せると、「〇〇は少し字がきたないから、よく、本を見て、字のけんきゆをしなければいけない。」といつて、意いすることも、度々あります。また、学用品ならいるものは何でもかっつけてくれますがそまつにすると、もう一つもかっつけてくれません。

私の父は、ほんとうにやさしい又、はたらくのがすぎなよい父です。

## D'さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

私ノオトウサンハ、センセイデス。

私ノオトウンハジャウドヲノセンセイデス。

私ノオトウサンハマイニチマイニチヨソヘイキマス。

日エウビテモヨソヘデマス。

私ノオトウサンハセンセイデス。

ジャウドノ八タンデス。

オトウサンハヨナ中ゴロカヘリマス。

私のおとうさん

(二年)

私のおうさんは朝ねまの middle しんぶんをよんでいらっしやいます。おとうさんのおちやわんはとてもく大きいです。このごろは朝早くからおとうさんはかんげ

(終)

えこにいらつしやいます。おとうさんはよく私に「たばこを買って来てちょうだい。」とよくおつしやいます朝かんげえをからかへつて毎日みそしるがーばんすぎです。だから毎日みそしるです。おとうさんは、おふろも大すぎですからおふろのある日には一ばん始ニはいらつしやいますおとうさんはみそしるとおふろの二ツが一ばんすぎです。おとうさんは私のすぎな物をよくかって下さいます。」私はおとうさんが大すぎです。

私のおとうさん

(三年)

私のおとうさんは、毎朝寝床の中でうでを、「えい、く、」とならしながらこれを毎朝つゞけ新聞を読みながら十分くらゐはいつて読んで居られる。ねどこをたゝむのがとてもすごい勢力でねどこをたゝむとほこりがたくさん出ます。

おとうさんはちうどうなので御飯が十分たべられないのでいつもごきげんが悪くいつも「あゝ一度はら一ばいたべでみたい、と言ひことがあります。今頃たべものがないので町など行つたときにはすぐおすしだの少しのお菓子はいじしとつておかへりになります。おとうさんは時々ニュースにつれてつてもらえるし、私がすえつこなのでかはいがつてはもらえます。おとうさんは見かけはやさしいけれどよくおこられます。おとうさんはいつも御飯がはらいつばいたべたいと一りごとのやうにおつしやる。お米をもらつた時にはおとうさんのかほはうれしさうです。私たちもお米をもらふとうれしいです。

おとうさん

(五年)

私のおとうさんは、とてもずるいときがある。式時の日曜であつた。私は、あまりつかれてゐたので何もか

も忘れてすやく／＼気になつて寝てゐた。「○○○起きないか。起きないか。」としきりに呼んでをられる。私は、そんなこはしらないで寝てゐた。「もう昼まで起きないよ。」と前よりもつと大きな声でいはれた。やがて目がさめ、起きた。よく日私の方から、攻め寄せ、「早く起きないのですか。きのふのやうに。」といつた。「うゝだまつて。」とねとほけた顔でいはれた。私は腹が立つて立つてどうしたらよいかと思つた。おとうさんの起る時が早いと私を起こしにくるなんて。あしたからは寢床をかへてやらうと思つた。こんなにな、ずるい時もあるけれどなか／＼気の氣いた時もある。東京の方へ御用じでゐかれた時私の好きな、物のかつてもつて帰られた。とにかくおとうさんの困つたことは、米がたりない話です。これには、おかあさんも「どうにもできない。」といつてべそをおかきになる位、おとうさんもだん／＼やせてこられた。「あゝたべ物ないと十分たべられればよい。どこからもそん

なへんな声が聞こえてくる。だがおとうさんは私たちに十分たべささうと思つてをられる。もう一ついやなできもの、首、手足からだ、いろ／＼なところに行き。ありのかよひ道のやうな穴にうみがたまり血とできたないものでいつばい。おとうさんも、しょうがないとあきらめになり痛いのをじつとがまんしてをられる、

#### 私の父

(六年)

父は、○○の柔道の方をしてをります。高いいびきをたてながら、私の横に寝てゐるので私は、いやでたまりません。目がさめると、すぐ私を起こしてからでないとききないので困ります。それからすぐ庭に、作つた、たんせいのきうり・とまと・豆・などに水をやつたり、手入れをするのが三十分はかかるでせう。それがすむと、やつと顔を洗ひ、御飯と

なるので、私たちは、おとうさんのこられるのを待つてゐます。

食物は、何でもたべ、味噌汁が好きです。お酒は、のまれないかほりに、たばこをおのみになるので毎朝、たばこの行列にはゝります。近頃は、子供が並ぶのは、いけないので困つてをられます。

午前中に、出かけられる時も、午後からの時も授業は町々です。夕方は五時過ぎに帰へられます。帰るとすぐ口ぐせのやうに「御飯はまだか。」といはれます。きつと、柔道のけいこでおつかれになるのでせう。

晩は、夜をそくまで二階でお仕事をされます。時には、十二時近くなる時があります。

### E'さんの歩み

私ノオトウサン。

(一年)

ウチノオトウサンハ、トテモヤサシイデス。イツデモ

アサニナルト、ジダウシヤニ、ノセテ、エキノ所マデツレテイテクダサイマス。私ハトテモウレシイデス。ソレヨリマダウレシイコトガアリマス。ソレハ、ハヤイキシヤニノラレテスイテキマス。ソレカラデンシヤヨスイテキマス。シトテモウレシイデス。アルクトコモスコシシカアリマセンシトテモウレシイデス。ソレカラガツカウノモドリモトテモウレシイデスソレカラカヘルトオトウサンガジドウシヤニノツテテイライラッシュヤイマス。」

私のおとうさん

(二年)

私のおとうさんは、毎日、六時におきられます。そして、朝おきて、かほを洗うすぐ、ごはんとおっしゃいます。さうおっしゃると、ねえやがごはんを持って来ます。それから、しんさつのへやにおいでになります。時々には、自動車におのりになりますが、あとは、

みんな、自てん車でお行きになります。お昼まへ、お  
かへりになります。すぐおこたつに入って、しんぶ  
んを、お読みになりますので、おかあさんが、「しん  
ぶんきちがひですね。」とおっしゃいました。おと  
うさんは、「しんぶんを読むのが、たのしみだ。」とお  
っしゃいました。

私のおとうさん

(三年)

私のおとうさんは、とても、やさしいおとうんです。  
私が、学校へ行く時、私といつしよに行きます。おと  
うさんは、じてん車にお乗になつて、私は、走つて行  
きます。  
又、学校に行く時に、私が、少し、おそくなる時、お  
とうさんは、待つて下さいます。  
私が走つて居ると、くつたびが、づる時があるので、  
其の時は、じてん車から、下りて、待つて下さいます。

今頃は、うんでんしゆさんが、居ないので、おとうさ  
んは、じてん車で、いつも、おうしんに、お行きにな  
ります。

おとうさんは、なにあぶしと、ニュースを、お聞きに  
なるのが、おすきなので、ニュースや、なにあぶしの  
時間に、まだ、しんさつがあると、しんさつばで、お  
聞きになります。

私のおとうさん

(五年)

この間の日曜日に、おとうさん、おかあさんと、三人  
で、おほか参りに行つた。  
山のふもと近くまでくると、おとうさんが、「少しの  
間、こなかつたと思つたら、大分あたりのけしきがか  
わつてゐる。」とおっしゃつた。それもそのはず、こ  
の間、かん音様の前にあつた、どんぐりの木も、松の  
木も、切られ、その上、道の両側の、木も、大分切ら

れてしまつた。

おはかにつくと、おかあさんが、

「やつと、つきましたね。」と、言ひながら、そばにあつた、こけ石に、こしをかけられた。私は、戸をあけて、おさうりを出した。おとうさんは、大分、松葉や、木の葉が落ちてゐるね。」とおつしやつた。

おほかのおさうじをして、お参りをして帰つた。帰りは、けはしい道を帰つたので、私が、石につまづいて、こけた。すると、そのひょうしに、するくと、すべり出して、おきられなくなつたので、おとうさんが、だきおこして下さつた。私は、おとうさんは、しんせつな人だと、思つた。足をよく見ると、くつ下をはいていたので、けがわしなかつたが、くつ下だけは、やぶれてゐた。

夕飯の時、おとうさんが、「今日は、ほんとにつかれました。とおつしやつた。

夜は、つかれてゐたので、早く寝た。

私の父

(六年)

私が、三年生の時、父が、橋から落ちて、腰のほねを、うちました。それからと言ふものは、大身に、行かれても、いたいくと、言つて、おられましたか、今では、大分よくなりました。私が、お風呂へ、入つて、背中を流して上げたり、又、肩を、もんで、上げたりしますと、とても、喜ばれます。

母が、私を、しかつた時、父は、それを、なだめて、下さいます。

一年生の時から、今日まで、私が、こんなに、大きく、なられたのも、父の、おかげだと、感謝して、ゐます。小さい時、雨が、ざあく、降つて、(かさ)が、飛びさうに、風が、吹いた時など、一しよに、(だつとさん)へ、乗せて、幼稚園まで、おくり、とどけて、下さつたり、しましたが、今では、だつとさんは、売つて、しまつて、父は、自転車に、乗つて、大身して、

みますが、学校から帰りに、一しよに、出あふと、わ  
ざく、自転車の、走度をゆるめて、下さつて、私と、  
一しよに、帰つたりします。

でも、いくら、やさしい、父で、あつても、悪い事を、  
すると、しかられますが、私は、これも、やはり、私  
を、一人まへの、者に、しようと思つて、しかられ  
るのだと思つて、これからは、こんな悪い事はすまい  
と、思ひます。

私の父は、ほんたうに、やさしい、又、思ひやりの、  
深い父だと思ひます。

(終)

## F'さんの歩み

私ノオトウサン

(一年)

私ノオトウサンハ、イソガシサウニハタライテイラッ  
シャイマス。ソノアイダニオカアサンニベンキヤウヲ

シテモラヒマス。オトウサンハ、オミセガユフテナル  
トチョットオヤスミニナリマス。私ハベンキヤウガス  
ムトスグアソビニイキマス。オトウサンハ、マタ、オ  
ミセガイソガシクナルトスグオミセニデテ、セツセト  
ハタラキニナリマス。オカアサマモオミセニデテ、オ  
ハタラキニナリマス。トテモ、ヨク、ウレマス。オト  
ウサントオカアサンハ、イソガシサウニ、オクヘハイ  
ツタリオミセニデタリシテイソガシサウダ。サウシテ、  
オダイサマヤオバマサマモイソガシサウダ。

私のおとうさん

(二年)

私のうちのおとうさんは、やさしい時には、とてもや  
さしいですが、おしかりになると、とてもこはいです。  
おとうとと、けんかおしておとうとが泣き出すと、お  
とうさんは

「そんなにおとうとをかはいがらないで、いちめてば

かりあると、くらに入れてようか。」

「私のおとうさん  
（三年）  
というて、おしかりになることもありませう。おごはんをたべる時には、しせいかわるかったり、おはしのもちやうや、おちゃわんのもちかたがわるいと、すぐに、「そんなにまたないで、こんなに、もちなさい。」というてなほして、下さいませう。」

「たはこは、一つもおのおのみになりませんが、お酒は少しおのみになるだけです。」

「は  
べんきやうを、学校から、もどって、すぐしない時には

「まだ、べんきやうをして来たか。早くしてあそびなさい。」

とおっしやいます。

「私のおとうさんは、よくしかられますが、ほんとによいおとうさんです。」

「おとうさんに何べんもしかられたことがあります。おとうさんはすきです。」

「私のうちのおとうさんは、やさしさうなかほをして居られますが、大へんひどいお方です。」

「やさしい時はめったにありません。やさしい時といつても、さうやさしくはありません。」

「此の間は、お店が休みだったので、ふくやへ行きまして。おとうさんにしかられた時には、私は、心のうちで、「なんだあのおやぢが。」とかう思ふ事があります。私がおごはんをたべながら、おぎやうぎを悪くしてたべ居ても、おとうさんが来られると、しせいをよくしてだまってたべませう。おとうさんは、ちよつともしせいがわるかつたり、おちやわんの持ちかたがわるいと、すぐしかられます。」

「お正月のやうなめでたい日は、少しは、やさしくして下さいませう。おとうさんの年は、三十八ださうです。おとうさんは、まもるちやんが大いすきです。うちの

おとうさんは、やかましやです。

お父さん

(五年)

うちのお父さんはいつもこく／＼してをられますが、ほんとうは、あまりやさしくないお父さんです。お父さんは、いつもお店番です。弟とは、お父さんによくしかられるので、お父さんが御飯をたべにこられると、すぐ外へ出てしまひます。お父さんは、私たちがすききらひがあるのをよくおしかりになります。お父さんはどんなきらひなものでもどんなにおいしくないおかげでも、私たちがあると、へんな顔もせずおいしさうにたべられます。お父さんは、店から夜かへられますと、日記をいつもつけて、お習字や、勉強のやうなものなさひます。工さくや図画がすきです。私がおぢいさんに買つていただいたいじな手帳に、いろ／＼な図画がかいてありました。みんなまんの本のがま

ねしてかいて、ありました。又私のあたらしいがやうしがはんぶんもなくなつたと思つてゐると、ところの下のおしこみからたくさんかちかちやまや、もも太郎などお父さんがかいた多をきりぬいたのが出て来ました。お父さんはこんなに工作や図画がすきです。お父さんのやうなおこりつばい人でも、泣かれたさうです。それは、お父さんの弟のたつた一人しかのこつてをられなかつた弟が二月に死なれて、そののおさうしきの時兵隊さんにおひさつをされる時や、かうせいかにでやかれたりする時ださうです。いくらうちのおとうさんがおそろしくてもすきです。

私の父

(六年)

私の父は、とてもいい父である。きちやうめんすぎて、私たちが困る。父は、よくしかるが、そのあとではきつと何かくださる。礼儀と勉強の事は、特にやかまし

い。父は、私たちの顔さへ見ると、

「しつかり勉強して多らい人になれよ。」

と口ぐせのやうにいふ。父は、勉強が何よりすぎである。夜になると、すぐ私の勉強室へはいて、勉強してゐられる。何でも私が聞くことをしつてゐられる。父の書棚には、歌・はいく・のやうなものしかない。仏教をよくしんじてをられる。家中で、父ほど仏様の事をしつてゐる人はいない。仏教をしんじてゐるだけに、正直で、まつすぐな人である。父が私たちによく「正直なりつばな心がけの人にならなければいけないよ。ばか正直でもこまる。」

といはれる。父は、げんかくな人ではあるが、とても、おもしろい。私たちに、お話をして下さつたり、私たちとかけまはつたりされる。

父は、お酒を少ししかのまない。さかすぎ一ぱいのむと、よほどたくなんのんだのだと思ふやうになる。私の父は、ほんたいいい人である。

## G'さんの歩み

私ノオトウサン

(二年)

私ノオトウサンハガツカウカラカヘテカライツモオカシラクダサイマス。サウシテベンキャウラシテカラナワトビラシタリシテアソンデイマス。ソレカラマリツキラシタリアソビマス。ソレカラママゴトヲシタシテアソンデキマス。

私のおとうさん

(二年)

おとうさんは、朝、早くから、おきて、山へいかれます。かへつての時、ちようど、ごはんを、いただいでるます。あぎ、学校へ、行時は、こたつで、習字をかいて、いらっしやいます。私は、おとうさんが、だいです。いつも、私が学校へ行時に、早くかへつて

おいでよ。とおっしゃいます。うちのおとうさんは、  
だいすきです。また学校からかへった時には、早かっ  
たねと、おっしゃいます。さうして、べんきやうをし  
て、ゐると、おとうさんが、ぜんざいが、にへたから、  
たべなさい、とおっしゃいましたので私は、すぐたべ  
に行きますさうして、おとうさんがだいすきです。晩、  
ねる時には、毎日おはなしをして下さいます。私は、  
おはなしを聞く聞かれました。

私のおとうさん

(三年)

私のうちのおとうさんは、やさしい時もありますが、  
ひどい時もあります。私が日曜日の日、やかんを、お  
ろして、火をいぢって居ると、やかんがころがって、  
中に、はいつて居た、お茶が、ぜんぶ、かやれました。  
そこで、おとうさんに、しかられました。又、私が、  
入学した時は、とても、ほめられました。私は、おと

うさんが、しかつての時は、きらひです。ほめて下さ  
る時は、大好きです。おとうさんは、毎日、日治山神  
社へ、お参りにいかれまます。雨の降る日でも、かさ  
をさしてお参りに行かれます。

おとうさんと、流川の方へ行った時、何にか買って下  
さる時は好きですがなにもかって下さらない時は、そ  
うすきではありません。

(終)

私のおとうさん

(五年)

私のおとうさんは、やさしく、私が、学校へ行かうと  
すると、「わすれものの、なひやうにしなさい。」と、  
やさしく言はれる、私の、いったあとと、晩、植木に、  
おみづをかけられ、とても植木を、かはいがりになら  
れるので葉も、青々と美しく、かはいらしい葉がたく  
さん出るこの頃は、じむ長として、出ておられる。そ

れでお水は、朝おかあさんがおかけになる。その後、夕食もおはり、にかひで、すむむとき、おもしろいお話おもしろいお話かはいさんな話をして下さる。

ある時は、さんぼにつれてゐてもらふ時に、お話をして下さる。

この頃出られるので、さんぼも、ろくろく出来なひ。私は、おとうさんのおかへりを、門口に立っておかへりをまっけてゐる。

家の近くにくると自でん車で、すびいを出される。夕方は、おとうさんと、まりで、うちやいこをして、その日を、楽しく、くらす。

すんでゐると、おとうさんは、「去年は、ずつと、へちまを、りようはしにうえて、にかひを、美しくしたが、今年ももっと、美しくしようと、風の間から、声と花と一っしょになつたやうに、おつしゃった。今年は、きゆうり、とまと、へちまをうえることになつた。

(終)

私の父

(六年)

私の父は、目がねをかけてゐる。そして、少し顔がくろい。去年の四月頃から、少しでも国のおやくにたちたいといつて、工場へ朝早く家を出て、夜おそくかへられる。父は、植木が、だいすきである。そのつぎは、こしかけである。植木は、おもてにならべてある。こしかけは、たくさんあつて、おきばがなひ。いつも、山へいくと、歌が、すきなのであらう。大きな声で軍歌を、うたはれる。

父は、母や姉や、私の病気の時は、薬やいろいろして下さる。眠る時は、いろいろお話をして下さる。朝おきると少しかたをつけられる。あたまに、油をつけ、ねくたいをいじくったりされる。夕方早くおかへりになると、よくわらわされる。

私のうちに、ひよこがいて、おとうさんは、ふところにいれたり、かたの方へのほらしたりしてよくなれた。八百屋へいくと、ついてくるし、とてもよく、父になれ、朝でもついていかうとする。

父は、やさしい人である。

## H'さんの歩み

私ノオトウサン。

(一年)

ヨルニナルトオトウサンハ、ミセニ、デテ、ペンキヤウヲナサイマス。オトウサンガ、ペンキヤウガスムト、スグウラヘキテ、私ノソバへ来テ、ネナサイマス。私ハ、オトウサンガダイスキデス。アサニナルト早くオキテ、シゴトヲ、ナサイマス。ヒルゴハンガ、スムトマタ、ミセへ、デテ、シゴトヲナサイマス。オトウサンハ、ヨクハタライテクダサイマスカラ私ハ、オトウサンガダイスキデス。

オトウサンガヨク私ヲカワイガツテクダサイマス。私ハオトウサンガダイスキデス。

私のおうさん

(二年)

私はおとうさんがだいすきです。私はこのあひだ、おち様を、めんかいに、おとうさんと行きました。かへりにおくわしを買ってゐたゞきました。ほんどうりを通って、いうびんきょくへ行きました。おとうさんは、よその兵たいさんにこづつみをたのまれたのだそうです。いうびんきょくの中へはいると、そこに一人の女の人が、おとうさんに、「六時までです。」とおっしゃいました。かへらうとすると、そこへこづつみをとりにこられました。さっきの女の人がおとうさんと呼んで、こづつみを書いて下さいました。おとうさんとすぐかへりました。かへっておとうさんとおふるにはいってねました。

私のおとうさん

(三年)

私のおとうさんは、たばこもお酒もお吸みになりません。朝は七時半頃にはうちを出て、はいきゅしよに行かれます。夕方は五時頃お帰へりになります。

うちのおとうさんは、おふろがだいすきです。此の間、御飯の時私と妹と二人で、御飯をけんくわしてたべた時、おとうさんは、

「よそには、御飯がたらなくて、まだ、まはつとらない所があるのだから、その方へ先にまはしてからだ。」とおつしやいました。

おかあさんは、

「あしたたくさんたべよいだから。」

と私たちにおつしやいました。おとうさんは私たちが寢床へはいつて眠つて居ると、私たちの所へ来て、おふとんをかけて下さる時もあります。

よそへ行かれる時には、妹がおとうさんに、「おみや

げを買つて来てね。」といふと、おとうさんは「はい、はい。」と笑ひがはをして出て行かれます。

此のまえ、おとうさんがよそへ、ようぢがあつて出られる時私は、勉強して居ました。出られて少し、して勉強がすんだので私とおかあさんと二人で火鉢にあたつて居ますと、おとうさんのげたの音がしたので、おとうさんの着物を着きてよう服だんすの中にかくれてまつて居ました。そこへおとうさんが帰つてこられました。おかあさんは、

「○○をおこつたら、出て行きました。」

とおとうさんにおつしやいました。其の時私は、おとうさんのうしろから、

「わーあ。」

といつてとんで出ました。おとうさんは、

「そんなことはしつてるよ。」といつてお笑ひになりました。

私はおとうさんが大すきです。

私のおとうさん

(五年)

私のおとうさんはやさしいおとうさんです。おさけ、たばこなどはきらはれますが、くだものなどは大へんおすきです。私、妹が病氣の時は本を買つて下さつたりします。おとうさんは小さい時はうさぎや鳥などが大へんすきで、うさぎを育てたり、島でかなりやなどを取つてかはいがつていらつしやつたさうです。その頃は十錢だせば小さな鯉が百匹はかへてゐたさうです。今頃は小さな鯉一匹が十五、六錢はします。私たちがしるいへ行つてとまりますと、「さみしい。」とおつしやいます。私、妹をお呼びになる時は、「○○貴久。」とおつしやいます。はいきゆう所にお出かけの時は、私たちよりも少し早くお出かけになります。おとうさんは渡なべさんのやうに時々ぜんそくにおなりになります。私たちは、おとうさん、おかあさんをもつてゐますが、山崎の、孝ちゃん、仁ちゃんは、お

かあさんがいらつしやいません。宇品の孝ちゃん、みちこちゃんは、おとうさんがありません。おとうさんは、「お前たちが一ばんしはあせだ。」といつもおつしやいます。おばあさんの家にお行きになつた時は、たけのこか、いちご、いちぢく、びわなどをおみやげに持つて帰つて下さいます。私が小さい時はおとうさんと、よくおばあさんの家に行つてゐました。おばあさんの家に長い間とまつてゐた時は、おとうさんはさみしいだらうといつてたくさん本を持つて来ていらつしやいました。おとうさんは、いつもにこ〜でとてもおやさしいおとうさんです。

私の父

(六年)

私の父はたいへんやさしくて、よくかはいがつてくださいます。私が病氣などした時は、おもしろい本や、おいしい果物などを、よく買つて来て下さつたりしま

す。おばあさんの家にめずらしいおやさいや、おいしい果物などがなつた時などおばあさんの家からおみやげに持つて帰られます。また父は、しんるいの子供たちがすきで、よくからかつたり、男の子であつたら、すまふをおとりになつて、わざとお負けになると、子供は、おもしろがつて、父を「をぢちゃん、をぢちゃん。」といつて名つきます。よそでめずらしいお菓子などいただいたりも、私と妹にみなくさいます。朝早くから、夕方まで配給所に、いかれ、夜は、私たちみんなで御飯をいただきます。めつたよそにおいでにならず、家にいらつしやいます。親孝行なのでお年をお取りになつたおぢいさんやおばあさんの所へ、よくおみまひになりめづらしい物を持つて行かれます。私はよい父をもつてたいへん幸福だと思ひます。

### I さんの歩み

私ノオトウサン (二年)

私ハ、オトウサントアソビマシタ。ガ、オトウサンハ  
ジャンケンデカチマシタ。私ハ、マケマシタ。ソレカラ、  
ラ、スコシタツトバンゴハンガキマシタ。ソレカラ、  
シタツテカラ、マタアソビマシタ。ソシテモラ、8  
ヂガキマシタ。ソレカラ、オトウサントネマシタ。私  
ハ、グッスリネテシマイマシタ。ソレカラ、オトウサ  
ンモネラシヤイマシタ。

### 私のおとうさん

(二年)

うちのおとうさんは、おこりんぼでいつもおこつていらつしやいます。私が、おふるにはいるのをわすれて、ねてゐますとすぐにおこつておこされます。私はいつもおおかあさんとねてゐます。おといさんはねこが、きらいなので私のねこをおこつてので、私が「かわいさうに。」といふと、またおこつて私をおしかりにな

ります。私がねこをいらうとおとうさんはすぐに「また、ねこをいらうた。」とっておしかりになりました。けふの朝ごはんに手をうごかしたり、足をいろいろたりするとすぐ「そら、足をうごかした。」とおしかりになりました。私はおとうさんがだいikirいです。私の「せなかをかいて下さい。」といふと「じぶんでかきさい。おまへはいつも足をいらうくせがある。」とっておしかりになりました。けふはほんとおこられた日です。「をわり。」私のおとうさんほんとおこりんぼです。

私のおとうさん

(三年)

私のおとうさんは、いつも朝、起きてのが、きまっ居ます。おきるとすぐにねどこの中でたいさうをしてから、おかほをお先らいになります。私はおとうさんよりも早く起きます。するとおとうさんは、「〇〇ちゃ

んは早いね。」とっておほめになります。おとうさんと私と、遊んで居ると、おかあさんが「ごはんです。」とお呼びになります。おとうさんは、その時にどしても、らぢよを、おかけになります。らぢよは七時に、ニュースを、言ひます。おとうさんは、ごさんをたべながら、お聞きになります。おとうさんのくせはごはんがすむと、すぐコウヒーをお飲みになります。私はおとうさんのごはんがおそいのに感心しました。おとうさんは、なにをしてもおにいさんのおほきくなつてからの事をお話しになります。其のお話しはおにいさんが兵隊さんになつてからの事です。

おとうさん

(五年)

五月二日おとうさんはうらの家のへいがおちて居るの朝早くから道へ出てみていらっしやった。

おとうさんは上の方のひびのいつて居るのをしらずかべをおひらひになつた。「めりくくドタン。」とへいはおとうさんの頭の上に落ちて、おとうさんはあたまに大きくきづをなさつた。

そのときは、何といふいたさであつたかわからなかつた、さうだ。私のおとうさんはとてもしんぼうよく皿がだらだら出てもがまんをしてへいをなをしておられたのださうだ。

そのときおかあさんはあまり大きな音がしたので出て行かれ、すぐにちをふいてすぐきいろなくすりをつけ、その上にあかちんをすけ、又その上に黄色な、くすりをおつけになり、ガーゼを何重もおいて、ばんさうこうでやられてもまだ皿が出てどうして、いいかわからなかつた。さうだ

私はそのことをきくと声が出なくなつて身がしーんとしてきた。それでもおとうさんはかまはず仕事をなさつて居た。昼ごはんのとき、又ガーゼをかへて何度

も、くくなさつてやうやく皿がとまり、おとうさんのかほがどうやらちがつて居るやうに思はれた。私はおとうさんは元気で行かれることも、きづも早くなほるやうにかみ様におがんだ。

おいしゃへ行くにも日曜日で体みなのでしかたがない。

おかあさんは、とてもしんばいさうであつた。おとうさんそれからすぐやすまれた。おとうさんのねられたあと、頭をみるとこぶが出て、とてもいたさうだ私は心からおとうさんはしんぼうよくとてもえらいと思つた。私があんなめにあつたやうに、思ふと私はどういふといいかわからなかつた。「おとうさんはほんとおいたいでせう。」とおかあさんがいはれるとおとうさんの方をむききがしなかつた。

前おとうさんはこんなことなさつたときは少さいからわからなかつた、のであつた。

今は大きくなつたからとてもなさけない。早くなほる

やうにとかみさまにおいのりをして居たことだ。

## 私の父

(六年)

私の父は今大阪に用じがあつて、いつて居ますので、家のことが心配で々々でたまらないのでせう、毎日のやうに、お手紙をおこされ、その中には、火事にならないやうにとが、よくたべものに気をつけて、病氣にならないやうにと、手紙の中に、書いてあります。父はよほど、おかあさんと私のことが心配でならないのでせう。母もそれを、よく頭に入れて、私のことを心配されます。私には、よく、勉強をして、おかあさんのいはれることおよく、守り、お手伝をして、家の中をせいとんを忘れないで、と、いつもの、言葉です。さうして父のもう一つは、私がさばいて居るといつのまにかきれいにせいとんされます。さうして、朝早く、起きては、道路に水をまいて、ほこりのたたな

いやうにされ、朝朝、おとけさま、神様をおがまれます。毎月一日、八日には、ふたばやまにある、きんこん様へ、お参りになり、かへりに、白神社へおまゐりになります。

父は、たいへん、祖先をおだいじになり、ます。それで、おみくじをひかけても大吉か吉しかあたりません。父は、私たちを心配さるとともに、祖先をだいじになさる人です。

(終)

## Jさんの歩み

私ノオトウサン

(一年)

私ノオトウサンハ、アサオキラレタライツデモヒゲラソラレマス。

ソシテマンナカカラハゲガミヘマス。私ノオトウサン

ハ、ヨクオコリマス。ウチノボヲヤワゴハンヲタベル  
トキニハイツモナキマス。

ウチノオトウサンハ、アサオキテカラネマヲオシレ  
ニ入テソレカラカオホアライニセンメンヂヤウニイカ  
レマス。

ソレカラフクヲキラレテジテンシヤニノッテイカレマ  
ス。  
ソシテキツモボウヤガオクリマス。

私のおとうさん

(二年)

私のおとうさんは、朝おきて、おぢいさまがしんぶん  
をよまれて、すむと私に、いつも○○、しんぶんを  
持ってきたさいとおっしゃいます。私が「はい。」とい  
ってしんぶんを持って行きますと、まだおねまへはい  
っておられます。さうして、しんぶんを読む時には、  
おねまで、およみになります。私が、「おとうさんど

うしておきて、読まないのですかおうちゃくですわね。」  
といひますと、おとうさんは、「それはさむいからお  
きて読まないのだよ。」とおっしゃいました。私とお  
とうとは、おとうさんは、いつも、おうちゃくぼうづ  
ですわといひますと、お笑ひになります。

(終)

私のおとうさん

(三年)

私のうちのおとうさんは、やさしい時もあります、  
少しいたづらでもをすると、すぐおこられますのでい  
たづらは出来ません。御飯をたべる時でも、ちよつと  
でもしやべると、「又、しやべる。」とおとうさんにし  
かられます。

この間はおとうさんが、りよこうなさいましたので、  
そのおるすはしかる人が居られませんで、私や弟は  
喜んで居ました。おとうさんの大好きな時は、おみや

げを買つて来て下さつたりするのが私や弟のゆくわいな時です。夜は、おぢいさんと、お二人でお酒をおのみになります。三月八日の日曜日にはおとうさんがおひな様をかざつて下さいました。

おとうさんはしよちゆうりよこうなさいます。前は、りよこうにお行きになる時はおべんたうは持つて行かれはしませんでしたが、この頃はお米が、ふちゆうなので、おべんたうを持つて行かれます。

おとうさんのくせのわるい事が一つあります。それは朝いつも寢床の中で新聞をお読みになるのがおとうさんのわるいくせです。

私のおとうさん

(五年)

私のおとうさんは、用事のため、毎月一ぺん、朝鮮へお行きになります。今も朝鮮へ行つておいでになります。きのふ、おとうさんから電話がかかりました。

そのお電話では四日のお昼に帰るといふ電話でしたので、みんなうちの者は喜びました。私のおとうさんはとてもおからだがお丈夫でとても元気です。朝は、あまり早くお起きになりませんが、昼間は、よくお働きになります。おしよおゆを、びんにつめたり、時には遠い所へ、リヤカーを引いて物を仕入れにお行きになります。私のおとうさんは、お酒もたばこもよくおのみになります。夜はおそくまで、お起きてお働きになります。夜はおそくまで、お起きてお働きになります。私のおとうさんはほんたうによくお働きになります。

私の父

(六年)

私の父は今年五十二歳になりました。からだは大へんお丈夫です。時々、お店の用事で出張なさいます。長く出張なさる時であつたら一箇月もおるすの

時があります。父がゐない時には家がさびしい気がします。父は私がよい事をしたらほめてくれますが、何か悪い事でもしたらすぐおしかりになります。父は大へん釣がすきで今も行つてゐます。この間でも雨がしきりに降つてゐるのにお出でになりました。その時、私達が今日はおやめなさい。と言ふのにお出でになつたので、一匹の魚も釣らずにお帰りになりました。今日、釣からお帰りになるのですが、何を釣つてお帰りになるかそれを楽しみにして待つてゐます。父はたべ物の中でお魚がお好きです。私の父は大へんやさしく、又よくしかる人です。

### 第三章 甲乙両學級六カ年の歩み

— 時の課題での作文 —

#### 第一節 甲學級四名のばあい

##### bくんの歩み

(一年)

シテカホラアラツテユハンヲタベマシタサウシテガツ  
カウヘイキマシタデンシヤカラオリテイクトコドモガ  
オトシアナコホツテキマシタソコデボクハコレソナ  
イタヅララシテハイケナイヨトイヒマシタスルトコド  
モガナニマケルモノカトイヒマシタサウシテボクニイ  
シヲナゲヨウトスルトイシオナゲヨウトオモツテイル  
ウチノオバサンガイシオナゲテハアブナイトイヒマシ  
タ、スルトイシオラトシテニゲマシタボクハガツカウ  
ヘイキマシタ。

ボクガアサオキルト、オトナリノアカチャンガ、泣イ  
テキマシタ。ソコデボクハ、オトナリエイキマシタア  
カチャンハビツクリシテ泣クノヲヤメマシタサウシテ  
ボクノハウオミテアルイデキマシタボクハアカチャン  
オダイテアゲマシタスルトアカチャンハオロシテチャ  
ウダイトイヒマシタボクハアナシテカヘリマシタサウ

こうあほうかう日

(二年)

二月一日は、こうあほうかう日です。ぼくは六時二十五ふんに、ごはんをたべて七時からべんきやうをしてふと見ると、九時出<sup>で</sup>したのでおかうさんが「あしたは、こうあほうかう日ですから早くねなさい。」とおつしやったのでぼくはねました。あさおきて見ると、五時四十五ふんに、目がさめました。あさおきかへておまじりだと思つて服にきかへてかほを先つて神様におまいりをしてそれからごはんをたべました。するとおかあさんが「二十ふんで七時ですよ。」とおつしやいたのでぼくはかばんをおほて学校へ行きました。

陸軍きねん日

(三年)

「べんたうたべてもよろしい。」といふせんせいのこへがした。みんなばら／＼にちつた僕もばしよをみつけにいつた。さうよいばしよはない。あんまりかん

がへよるとべんたうをたべるひまがない。僕はいちじくの木にきめた。一ばんふといえだにこしをかけたばうしをかけてすいたうをえだにぶらさげてべんたうをひらいた。ぼくのだいすきなじやがいもとたまごだ。あんまりあるいたのではらがぺこ／＼になつてゐたのでとてもおいしいふとみると、○○○くんが○○○○くんにやつてゐたべんたうをたべて○○○くんたちとあそんだ。

初夏の水分映

(五年)

「うー暑い。」という声が聞えた。ふとふりむくと、○○先生がにじみ出てくる汗をびったりとぬれたハンケチで、ふいておられるのが目にうつつた。僕も頭の大汗をふいた。だが汗は、出るのをえんりよもせず、にじみ出てくる。間もなく水分映についた。滝のそばまで行くと清らかな風が、からだ全体をなでるやうにし

て通り過ぎてゐくまとも風がふきさつて行った。ざざ、ざざ——とものすごく滝の音が聞へる。といつ上をむけば大陽がさんさんと頭を突らぬくもう初夏である。ぐぐ、とのどをふるはして水を飲。僕も手で水をすくつて飲んでみるなんともいへない味がからだ全体をまはる。まるで夢でもさめたやうなさっぱりしたやうな氣持になる。じじんじんとせみの鳴声が聞こえ、滝の爽な音。きらきらと光る大陽どうみても真夏ではない。また春でもない初夏である今日のお花見遠足は氣持がいい遠足だった。初夏は氣もちが広々としてゐる。

## 向洋へ

(六年)

「前へ進め。」「がらがら。」車を引く者シヤベルを特つとる者みんな笑顔だ。空は靑空ら心は晴ればれとしていまにもうかれさうな氣持がする。僕たちは馬糞拾ひだ。きたないと思つたが僕たちが一番らくだ。ほ

かの学級はくわをかたにかつぎルツクサツク水筒をつけておるから暑かつたことだと思ふ。」だが僕たちは上着をぬぎルツクサツクや水筒なども一つのかごにまとめて入れておるのだ。その上一番後からゆっくりいのだ。並んで行くわけにはいかないから前の組と後の組とにわかれてひろひながら行った。「早くあの馬まひらんかいのう。」といふ者がある。と思つてもう出しておるそれとばかりに前の組がしやべるでこさげて入れた。僕は馬車の後を見ながら拾ろつたすると○  
○先生「○○は馬車の方ばかりみていないでおしりの所へ行つて口をあけとけ。」といわれたのでおかしいやうなはづかしいやうな氣がしてたまらなかつた。だがよくみると僕だけではないみんながみてゐるのだが向洋にちかづくにつれてだんだん馬糞がなくなつてきた。おかしいなと思ひながら向ふの方を見るとこのへんの人たちは畠をつくつてゐるのだからあつめよつておられるのだ。畠につかうとしたとき向かうの方にも

りあがったものが見えた。さうだと思つて僕はいっさ  
んに走つた。ちかよつて見るとまさしく馬糞だ。「おーい  
あつたぞー。」といつたらみんなきた。「わーえつとあ  
るのー。」とみんなびっくりした。するとほかの学級  
たちは二三分ばかりまえについてはたらいでゐる。僕  
たちは車といっしよに畠の中にのり入れた。それから  
十分ばかりやすんではたらくことになつた。

c くんの歩み

(二年)

アサオキテオホヲアラツテオゴハンヲタベテ10ブンホ  
トアソンデイキマシタウチラダタノガ8デニデテイキ  
マシタエキノトケイガ85フンニナツテイマシタカラ  
ボクハイソイテエキカラウヂナユキニノツテイキマシ  
タソノトニボクガノツタ1080バンノデンシヤハーパイニ  
ナツテ子イヨコガハデフキマシタソシテボクハダイガ

ノモンノトケイガ830ブンデシタカカラボクハ大イソギ  
テイキマシタ。ボクガカバンヲオロシテアソビニイキ  
マシタソシテボクハコトウカノオネイチャントアン  
テシュウベステシヨリマストリンガナリマシタカラボ  
クハ大イソギデナラビマシタ。センセイガクルマデナ  
ランデアサノタイソウヲシテカラペンキャウヒツニハ  
イッテゾガラカイテセンチノヘイタイサンニオクツテ  
アゲマセウトイッテセンチノヘイタイサンニヨクリ  
マシタセンチノヘイタイサンハホントウニヨロコンテ  
シタカラボクハウレシユウゴザイマス。

こうあほうこう日

(二年)

きうふ先生が、はしたはこうあほうこう日ですから、  
七時四時分ですといつたので、ぼくは、びっくりした。  
それから、ごはんをたべでかへりました。そして、う  
ちで早く勉強をしました。それから、おかあさんが、

「あしたはこうあほうこうびびですよと。」おっしゃいました。ぼくは早くねて早くおきて学校へ行きましました。学校でしきをして、白神におまへりしてかへりましました。そして勉強をました。

陸軍きねん日の日

(三年)

三月十日陸軍きねん日だ。朝四時三十分三小供ぢや会がご国神社へ並らんで歩いて行くのだ。ご国神社へ着くと。えうはいをして、それからぶうんちやうきゆうをいのり。それからまた、並らんで歩いて帰つた。それから顔をあらつて食ちをすまして、遠足のやういをしてご国神社へ集まつて、行所へ出発した。たんな近くなるとみんなはへと／＼だ。僕は兵隊さんのことを思ふとなにくそといつて元氣百ばい出して歩いた。またへと／＼た兵隊さんのこと、といつたらまた元氣が出そうしてと／＼歩いた

遠 足

(五年)

朝はとても曇つてゐたので僕は胸がどきどきした。がと／＼はれたのでよかつた。埃之宮まではとてもちかいがそれから、水分峽までがとても遠い僕はあれを見い窓から蒸気がたくさん出るぢやうろが

「ほんにやー。」

とだれかが言つたが機関車のやうに蒸気をだすので中でなにをしてゐるのだらうとおもつた急に腹がへつたので歩けないががんばつてと／＼のぼって行つた。山の中でべんたうをたべた。たくさんあつたので一つのことと〇〇先生が〇〇さんのをたべていらつしやるので〇〇君が

「〇〇先生にたべてもらわんけ。」と

言つたがきしやないからと思つたのでたべてもらはなかつた。たべをわるとみんなたんけんに行つたが僕

はつつちを取つて二部の人にかしとかへこをした。た  
くさんで花がきれいだからこんべいとうをほけつとに  
一ぱいくれた。もうつかれてゐるからのほりたくない  
が先生がのほらうとおつしやつたのでとうくのほつ  
た。がおもいったよりきれいて谷水がながれてゐた。  
そこでまたなんぢかんかあすんだ。

馬糞ひらひ

(六年)

「一部六年の男子は後から馬糞を取つて行く。そし  
てあの車を大きい方から四人がひいてあとの人はし  
やるで馬糞をひらつて行く。」

と○○先生がおつしやつた。のでうへーこいつはか  
なはん。と思つた。やがて僕達は出発した。あれこの  
ちやしならぜつないに三つのかごへは一っぱいになら  
ないからと思つて僕たちはからからに乾はいたのも  
いいからと思つてもうどれもこれも入れて行つた。す

るとすぐいっぱいになつたが三分の二ぐらひの所に  
来るとずん／＼たまって行つたのでこれで案心した。  
が僕はまだまだためて行つた。

b'さんの歩み

(一年)

アサラキテカホアロテゴハンヲタベテラヂオタイソウ  
シマシタ。ソシテオトウチャントボウヤト○○○チャ  
ントワタシガラコタツヘハヘツテキマシタ。

ソシテカバンヲサゲテ○○○チャンガタヘサウイニキ  
キマシタ。

ソシテ○○○チャントワタシガ、ガツカウエキキマシ  
タ。

ソシテワタシト○○○チャントデンシヤミチワタツテ  
ガツカウヘイコウト○○○チャンノトモダチト○○○  
○チャントオトモダチトワタシガガツカウヘキキマシ

タ。ソシテガツカウノモンマデキキマシタ。

こうあほうこう日

(二年)

けふは、こうあほうこう日です。学校へ行くのは、七時四十分までに行くのです。私は早く学校へ、行きました。私たちは、少しあそんでゐますと、かねがなりましたので、うんどうぢやうへ並んで、ひらたやちやうの、うんうぢやうへ行きました。行ってから、大一のたいさうをしてから、大二のたいさうしました。私たちは、あと氏神様へつめたいのでも、元気を出して、行きました。

氏神様へ行ってから、○○先生が○○○○先生をむいて、「はいけいれ。」といはれました。そのつきには、「もくとう。」といはれました。私は並で学校へかへりました。

陸軍きねん日の日

(三年)

三月十日は、陸軍きねん日で、あつた。

私達は遠足なので、家を八時十分頃でた。

ご国神社の広場にあつまるのは、八時三十分なので私は、電車へ乗って行った。もう私が行った時には、大勢、きて居た。遊んで居ると、○○先生が、「あつまれ。」のがうれいであつた。しきが、すむと、すぐ行った。

私達は、二保へ遠足だ。みゆき橋のへんから、兵隊さんが、自動車へのつて通られた。

いよく、道のわるい所を通つて、行つた。行くところ、お宮があつたのでそこへお参りした。みんなは、石だんをかぞへてあがつた。私は、○○さんとあそんだ。先生は、石だんへ、こしかけて居られる。私は、○○先生の所へ行くと、○○さんが、さいふをたすと、先生は、私を見て、「○ねこ。」だと言はれた。

遠 足

(五年)

おべんたうがすんだ。しばらくすると、ふえの音がする。何ごとかと思つて、ふと、荷物をかたづけした。すると、○○先生が、

「もつと上の方まで行きます。用意を下さい。」とおつしやつた。私たちは、用意をして、二列に並んだ。上の方まで行くときれいな水が、さらさら流れてゐた。谷川の中へ大きい石が二つ三つおいてあつた。男子が、その石の上でがたんがたん石をゆるがすやうにした。きれいな水がびちびちした。みんながすると、水がよわるではないか、かはいさうではないかと思つた。まだうしろからくる男子も、したらなほさらかはいさうに思ふ。もう、うしろから、だれもこなくなつたらどうだろう。きれいな水が、もとのやうにさらさら流れつづくであらう。又、元氣を出して一

段のぼつて行くと、きれいな水が、たきから流れてゐる。○○先生が、

「ここで休みます。」

とおつしやつた。私たちはすぐたきから流れてゐる水の中へ入つた。きもちがとてもよかつた。もつともつと上の方まで○○さんと一しよに行く。すると下の水よりとてもきれいだ。私は、「集まれ。」の号令が聞えなかつたらどうだらう。」と考ながら下へおりてゐたらすつてんころりんと、ころげた。それは、石の上の水がかかつてゐたからであらう。私は、そこで石へ水をかけ石の上へ手をのせて手をすべらしてみると、やつぱりすべる。もうおそろしくなつた。

向洋の作業

(六年)

開墾場所に着いた。私たちは一休みをした。先生が合図をなさつたので集つた。先生が

「今からさつまいもを植ゑる。さつまいもは、幅三尺に取ればよいきつまいもができる。今この竹をあげから一組に八本づつ分ける。から取りにおいでなさい。」

とおっしゃつた。私たちは、いよいよ仕事に掛る。先生に教へてもらつて、から、私たち自分々々でやつた。皆溝を作つたのでならした。そこへ男子が馬糞をたくさんつんで帰つた。男子も又一休して手搏つてくれた。食事の時間になつたのでみんな場所についた。先生が

「場所がきまつたらたべてもよい。」

といはれた。みんなは、

「いただきます。いただきます。」

の声が四方からいつてゐる。みんなはおいしさうにたべてゐる。私は、おなががべこべこなのでとてもおいしい。とうとうたべてしまつたので先生たちのまはりであそんだ。

又午後から作業がはじまる。

「びりびり」と先生の合図だ。みんなは集つた。先生が、

「これから、また作業をはじめ。今度は一尺（三十糎）の竹をくぼつておくから、先生のお話しを聞いてから取りに來い。」

とおっしゃつた。先生から、穴のあけ方をおしへてもらつてからあけた。一尺おきに穴をあけてあるのを見んなでほつた。一部六年の所は皆穴をあけたので、高等科のと一部四年をほつた。

### c' さんの歩み

(一年)

アサネマカラヲキテヨヲフクキカエテヨフクキカルス  
グオカラアラツテゴハンヲタベテマチヨルトヲニイチ  
ヤノトモダチゴラレマシタサアモオガツカウニイ

クンダトイッテイクトキ。ハミンナデイシデス。ワタクシノトモダチハ○○○サンデス。○○○クンハイクトキハオトナシイデス。ガツカエイッテカラトテモオテンバデス。ワタクシハアレガキライデス。○○○サンガアレオシテンナカタラダイスキデスワタクシハ○○○クンワスキデス。ホジャガセンセイニオコラレテソガキライデスホカニモドノセンセイニモヨオオコラレテデスソレガキライノデタマリマセンソレガマダキライデスセンセイニヲカレテンナカッタラダイスキデス。

こうあほうこう日

(二年)

けき、早くおきて、やうぶくに、きかへて、ごはんを、たべて、すこしやすんで、○○○くんとくろへ、時かんを、きくに、いきました。すると、○○○くんが「ぼくもよくしらないのじゃないのですがねすが

ね。」といひました。それから、学校へ行きました。こんどは、ひらのまちのうんどうじようえいきました。それからこんどは、たいさうをするとき、一年生の○○○くんがうはぎがぎられないとおもってうはぎをきせてあげました。こんどは、しらかみさんえいって○○○くんをみると、○○○先生がみていたので私は、あんしんしました。

陸軍記念日

(三年)

目がさめた。時討を見ると六時だつた。すぐとびおきた。それからしたくをしてゐるとお母さんが「○○○ちゃん国旗をたてなさい。」とおつしやつた。私はそれで国旗をたてた。御飯をたべて家を出た。今日はえんそくだ。私は○○○さんと○○○さんにさそってもらつた。それからごこく神社へいった。いって見るともうたくさん来てゐた。とう／＼しゅっぱつをするこ

なった。三年生はにほであった。行とちゆに足がだる  
くなつて来た。それでもまだ行のだ。

られた。

向洋の行く通

(六年)

「おべんたうをたべてよろしい。」

(五年)

と○○先生の声、その声を聞くと、うれしいきもちが  
した。

「わあ、うれしい、だれかがいった。」

遠足で一ばんたのしいおべんとうだ。

私たち五・六人は、○○先生・○○先生の所でたべ  
た。

○○先生のおべんたうがおはると、○○さんがのこ  
したおべんたうをたべられた。のこした物の中に卵の  
ゆがいてあるのがあつた。それを○○先生が

「卵に羽がはえてひゆと飛んで来たんよね。」

といつて○○さんののこしてあつた卵を口の中にいれ

今日は六年生になつて始めてある向洋の皇軍であ  
る。学校の門を出ると急に足がいたくなつた。男子は  
後の方で馬糞を取つてゐる。私たちは竹と綱を持つて  
向洋へ向つて行つた。すこし行つてゐると○○さんが  
おくれて竹を綱でむすびかえてゐる。○○さんと私は  
○○さんが持つてゐる竹を半分持つてあげた。持つた  
時はさうでもなかつたが大分行くとおもたくなつたの  
で竹を二本持つてあとの残を○○さん○○さん○○さ  
んにあげた。さうして其二本の竹を杖について○○さ  
んがあるく影をふんで行つた。足がいたいのは少しも  
きがかかなかつた。こゝほどの辺だらうと思つてちよ  
つと顔をあげて見るともう東洋工業の前へきてゐた。  
もうすぐだと思つて勢をだして軍々進んでいつた。ま

もなく私たちの農園へつuitaと思つてため息をついた  
時〇〇〇先生が

「十分間休け！」

第二節 乙学級四名のばあい

B くん の 歩 み

(一年)

キョラアサガツウヘイクノハマダハイイトオモツモボ  
クハクジハンマデ目ガアカナイナアトオモツテタダサ  
ツテニイサンニカジダヨ〇〇チャントイッタノデボク  
ハカジハドコトトイッテトビオキマシタサウスルトゴ  
ンヲミンナタバテキタイデ大イソギテゴハンヲタバマ  
シタ大イソギデカバンヲシ ョ ッ テガツカウノモンノ前  
ニ〇〇クンカキマシタ。

といはれたのでついなんの気なしにこしをおろした。  
あととはつかれてもうたゞれなくなった。

興亜奉公日の朝

(二年)

ぼくがおきて見るとまた三時はんでした。またねてそ  
れから何時かたつておきるとこれは、しつばい、も  
う七時二十ふんでした。

ぼくは、ごはんをたべて、学校へ行って見るとあと十  
五ふありました。かばんを、おろして、外に出よ  
うとすると〇〇君が「すまふは、時かんがないからだ  
めだね」といひましたので外へ出やうとすると、べる  
がなりました。それで並らんで大学の、ぐらんどへ行  
きました。こつきけいようがありました。つぎにきみ

よを、うたいました。それから大そうをして、白神しゃへ行きました。行くとちゆで○○○君が「さむくてくるしい。」といて、なみだを出しました。

ぼくが先生にいふと「そんなものは兵たいにはなれない。」とおっしゃいました。

ぼくが「○○○君はよはむしだな。」いひました。それからまもなく白神しゃへ来ました。をがんでからこうとうかをせんとうにかへりました。

陸軍記念日の一日 (三年)

三月十日は陸軍記念日なので遠足をやる事になった。ご国神社にお参りをしてからみゆき橋を渡つて、どろ／＼の道を通つて行つた。行くとちゆうに、ところこの線ろが幾つもあつた。それから、鉄道をこえて、行つた。

それから、山へ上つて、お宮にお参りした。少し休ん

で山を下りた。それから、とてもどろ／＼でわるい道を通つた。とちゆうで○○○さんがあたまがいたいといつて帰つた。とちゆうで大住さんでどろのためにこけさうになつて、足が、どろだらけになつた。ところどころに、のりがほしてある。お寺の前ち通つてお宮に行つた。

そこでおべんとうをたべる事になつた。僕は○○○君といつしよにたべた。○○○君は木の上でたべて居た。

たべてから、○○○君たちが戦争ごっこをして居た。僕さした取つた。一部の○○○君が僕に「ささを取つてくれ。」と、いつたので取つてやつた。

それから電車のえきえ行つた。

僕は○○○さんとバスに乗つて帰つた。

(をほり)

遠 足

(五年)

「かくがきゅうごとに出発して下さい。」と〇〇生がいはれた。僕たちは、ひじ山から下り少し行くと大きな道があつた。その道を真すぐに行くと、工場があつた。鉄ぐずがたくさん山のように積んであつた。線ろをこして、行くと松の並木道があつた。ここで僕らは少しの間休んだ。

みんなはだかになつて「あつい、あつい。」と言つてゐた。〇〇先生が〇〇〇君がおしっこをした所にまるをかいで「ここに〇〇〇〇がしっこをした所だと言ひなが笑つておられた。えの宮にはたくさん人がゐた。お参りをすまして川にそつて、行くと、ぶた小屋があつた。そこから川を渡り、少し行つて、又川を渡つてしばらく行くと、とてもながめのいい所へ来た。ここでおべんとうをたべて前の川を見ると〇〇君がはだしですはつてゐる。よくみるとくつはずぶぬれでほしてあつた。

前ばかり見てゐたらおべんとうばこがひつくりかへつて、大きいなたまごがたべられなくなつた。しばらくくいくときれいな水が流れた。そこで遊そんでゐると〇〇先がふえをふいてあつまれといはれた。みんないろいろのはなを持つてかへつた。

畑 作 り

(六年)

「二部五年より向洋に向つて出発。」と〇〇先が言はれた。今日は向洋に行つてさつまいもの植ゑつけの、用意をしに行くのである。みんな、くはや、しやべるなどをもつて出発した。一部六年は車を引いて行きながら馬ふんを拾つて行のである。

向洋に着くと少し休んで、うねを作つた。はばは三尺であつた。僕は平ぐはで作つた。まだなれないのでみぞがまがつたり、浅くなつたりするのでなかなかうまくいかない。それに石がたくさんあるので、ほねがをつ

れた。

一二つの声所がすむと、おべんとうをたべた。いつまきらしいな豆も大へんおいしかつた。あまりおいしいのですぐにたべてしまつた。

お昼からはのこつた四つをみんなでやりつた。今度はあまり道にたすさん土があるのでそれを取りのけるのに苦心した。今度も又たくさん石があるのでなかなかやれない。しかたがないので石のない方から先にやつた。松の木の下でやると、いたいので、だれもやるものがないのでそこだけおくれた。それで先生がやつておられた。

帰りは軍歌を歌いながら帰つた。

(終)

## C くん の 歩 み

(一年)

アサボクハ、ハヤクヲ木手、カラソノトキボクガ目ヲ  
サマシテヅットオキテキマシタ。サウシテ、ボクハガ  
ツカウエ来マシタサウシテガツカウエ来ルトキ人カタ  
クサンキマシタ。ボクハソノトキタマゲマシタ。サウ  
シテガツカウエ来マシタソノトキボクハアスコニ一バ  
イ人カラルトラモヒマシタ。  
サウシテガツカウエマシタ。

(ヲハリ)

## 興亜奉公日の朝

(二年)

けふは、朝六時十ふんにおきました。  
おきてかほをあたひ、ごはんをたべて、学校にきまし  
た。学校にきて見るとうんどうばがまっ白でした。ぼ  
くは、きよしつにはいってしよもつをしまつて、出よ  
うとすると、お日さまがのぼつてゐるよとぼくがいふ  
と○さんは、「ほんと。」といつて、お日さまの方を見

ました。ぼくは、そのまゝあそびに出ました。出て見るともうだいぶ来てゐました。

あそんでゐると、べるがなうんどうばにあつまりました。それから大学のうんどうじようへ行つて雪の中でたいそうをして、すべりながらおもしろく白神さまに、おまいりしました。そして、さいけいれいをして、もくとうをして、白神さまからかへりました。かへつて○○先生が「あと十ぶんあるからあそびなさい。」とおっしゃいました。

ぼくは○○君と○○君とで、すべりながらあそびました。それでもぼくは、何べんでもころげました。

陸軍記念日の一日

(三年)

僕等は三月十日の陸軍記念日の日、朝八時三十分までに護国神社の前に集つた。みんな元気でうれしさうな顔をして居た。間もなく○○先生が、

「きをつけ。」

と声をはり上げておっしゃつた。すると、

「れい。」

とおっしゃつた。あの護国神社の前に行くとき、神々しい気がする。間もなく、「もくとう。」とおっしゃつた。

それからみんな遠足にでかけた。僕等はみゆき橋をわたつて高等学校の方へ向つて行つた高等学校の所で兵隊さんがたくさん出られた。みんなは一度に、

「ばんざあい、ばんざあい。」

と言つて居た。その中に

「ぜんざあいぜんざあい。」

と言ふ者が居るかと思ふと、今度は、

「まんざあいまんざあい。」

と言ふ者もあつた。中には、

「ばんざあい、ぜんざあい、まんざあい。」

と言ふ者もあつた。

それから、ずんずん進んで行つた、とうとうお宮につ

くといふ時向かふから汽車が走つて来た。そこでちつと遊んで又歩き出したそのお宮までくる時〇〇さんがぬまに足がはまつてみんなが大笑ひした。お宮で御飯がすんで竹やぶで戦さうごつこをしたかへりは、道がびちやびちやでなかなか歩るけなかつた。釣場から電車にのつて帰へつた。

(終)

遠 足

(五年)

今日は、大とうせんでんき念目で、遠足があつた。朝、ふと目がさめると、少し曇つてゐたが、用意して、家を出た。比治山には、たくさんの、学校の者が、参拝しに来てゐた。僕たちの前に、たつてゐる学校の生徒も、みんな押んでから、僕たちが、押んだのであつた。よその学校の生徒の中には、もんべをはいてゐる男もあれば、ズボンがひざの下の方まであるのもあつた。

それからおりて行くところ〇〇君が道あんなになつた、〇さんや、〇〇さんは「もうもうつかれた。」といつて、つらさうにしてゐた。僕が「ひつばつてあげようか。」といつてゐるうちにだいたいあるいて来てゐた。すると〇〇君が、

「ここをまつすぐいつたら広場があつて、のう。そこうまがて行くんで。」

といつた。ずんずん行つてゐると間もなく土ぶ川のほとりのほそい道をいくうちに、僕のはりのものが、ばら／＼じけんのことを話しました。〇〇君が又べちやくちべちやくちやと話しました。「それかのうあのう着物は広島にあつたんじやげなで。」

といふと、〇さんが

「ほうねえ。」

といひながら、ずん／＼あるいてゐつた鉄橋の所までくると向から汽車が来た

「ほーしゅ／＼しゅ／＼。」

○○さんが

「か物列車は油が落ちたりしるがおちたりするから。うちやだあいきらい。」

といつてゐた。そのうちに涼しい気持がする、川べりに来た。もう、そろ／＼えの宮の石だんがみえだした。皆、

「一つ、二つ、三つ、……………」

と七四までかぞへた時

「七四あつたよ。」

といふこえで一ばいであつた。とうとうえの宮へついた。参つた時、○○先生がお言になつたとり、神武天皇がおよりになつたような感じがした。それからすぐ山にのぼりはじめた、川ほとりをのぼつて行つて、○○君は道あんないで、水の中をじやぶじやぶとはいつて行つたみんなきやく／＼といひながらその中の石を飛んで行つた、ずん／＼行つて、川どてをのぼつて行くときがあつた。そこでべんたうをたべた。灌の所ま

ではせみがないたり、とんぼがとんだりして、なかなか、にぎやかであつた。かへりには、奥へはいつてゐつて、軍艦ゆうぎをした。大きな岩があつてそこからころげおちそうになつたこともあつた○○先生が、らんを持つて行かれたのでみんなむちうになつてさがした。終にもう一つさがそうと思ふとき「あつまれ。」の合れいがあつて、かへつた。かえり道に○○君がへんな歌を作つた。それは、

「ライオンおいし、かの山。クヂラつりし、かの川。

ゆめは、今も、めぐりて、わすれがたき、ふるさと。」

とこういふ歌をつくつた。

終

向洋へ農耕作業

(六年)

「皆くわをかつげ」の○○○先生の号令でくわをかついで校門を出発した。一部六年男子は後から馬ふんを

ひろひながら車をがら／＼やつて引いて行く。それだけに後からおそく来てゐた。今度は比治山の下を通つて近道を行つた。皆

「畠を耕しに行くんじやけ近道を通らんにやあそんじやのう。」といひながら行つた。比治山の下へ来ると〇〇君が「肩をかへ。」といつた。まだ向洋までだいぶある。だがみんな何かしやべりながら歩いて行つた。途中酒だる。将油だるがたくさんあつた。ずん／＼いつて市外に出た。キリンビール株式会社があつた。百姓さんが一生懸命にはたらいてゐた。麦がよくみのつてゐる。一列によく並んでゐてよく真すぐに立つてゐる。こんなにもよく出来るのは百姓さんより外にないと思つた。そう思つてゐる間にいつの間にか向洋の近くに来てゐた。見おほへのある自転車のおきばへ来た。もうすこしといふので皆元氣ずいでさつさと歩いたのでとう／＼向洋へついた。向洋へついて休けいがあつたがすぐ働きたした。畠をつなをびんと張つ

てそこにむねを作り出した。時々畠のそばにある家に行つて、水を飲んだ。百姓さんであつたら三〇分ぐらいで、できるのを一時間も二時間もかかつた。畠のへの道を作るのにたんと困つた、〇〇君が向かうの方へ砂を投げると〇〇君の頭から体中へ砂をかぶつた。少し自分の所へ行つてお茶を飲まうとするとにかつたので水をもらいにいつた。水の方が何となくおいしいやうなあまいやうな冷いやうなのでおいしかつた。間もなく「ピー。」と笛の合図といつしよに皆〇〇先生のもとに集つた、「これで午前中の作業はこれで終わりました。今から昼食を食べ少し休んで又午後は左の方の畑をやつてもらひます。」それより皆ばらばらになつて、昼食を始めた。「月見草。」が一面に咲きみだれたその上に松が一本あつた。その木にけむしがたくさんゐた。毛虫は〇〇君の大こう物である。その時食べた御飯のおいしさ何ともいへないおいしさであつた。皆「おいしい／＼」といつてゐた。

昼食後皆で相もうをした。ちようど僕の前に来たとき、第二回目の笛が「ピー。」と鳴つた。それから全部を耕し出した。もう皆少しつかれてゐた。〇〇先生が「〇〇お前もう少し力を出せ。」とおつしやつた。

だが〇〇君はまだのろ／＼してゐた。一時間ぐらいつて集れがあつた。その時〇〇先生が二ノ六と一ノ六をとりかへられたのでみんなぶつ／＼といひながら帰る支度をした。帰りは高等科が車をひいた。帰り皆つかれてゐる足をひきづりながら軍歌を歌ひつつ比治山のうらを通りながら四時頃学校の門をくぐつて僕は週番の役目を果して家に帰つた。

終

### B'さんの歩み

(一年)

アサ早くオキテ、オカラヲアラッタラズグ、オゴハン

ヲタバマス。ガツカウニイクトキ。オニイサントキキマス。ガツカウニキタトキ、モウヂカンハチイトカナイデス。

興亜奉公日の朝

(二年)

けふの朝五時半におきて見ると、まだくらひので、早くてっかんの水で、洗を／＼としたら、おかあさんが、そこのでっかんはでないよとおっしゃつたので、私は、ふるばのでっかんでかほを洗つて、手をゆで洗つて、ひばちの所へあたりに行つて、あたってゐると、おかあさんがごはんをついで、早くたべなさいよとおっしゃつたので、二ぜんたへて、学校へいって、学校どうぐを、つくへに入れて、赤ぼうをかぶつてそとに出てあそんでゐると、りんがなつたので、あつまつて、たいさうをして、ぐらんどに行つて、しきをすまして、しらかみしやに行とちゆうにすべりさうにあつたので、

こんどは、歩きました。さうして、しらかみしやにおまへりをして、また学校へかへりました。

### 陸軍記念日の一日

(三年)

私は、朝、早く起きて、私が下に行つて、今日は、遠足だから早く出ますよと言つて大急ぎでうちを出ました。よれから金屋町から電車に乗つて、あいよい橋を下りると○○さんが居られたので、私といつしよに行くとみんなが遊んで居られたので、私は、あんしんして遊んで居ると、○○先生がふふを吸かれたのでみんなあつまつて、○○先生がお話をされて、おまいりをしました。それがら私たち、○○先生について行きました。私は、うぢなに行くのだらうと思ひました。少し行つて居ると、丘隊さんか居られたので、ばんざい、ばんざいと言つて又行きました。

○○さんが、向かふうぢなかもわからないとおっしゃ

いました。

向かう、うぢなであつたら、どぢやうよ取つて下さいと言はれたので取つて上げると言ひました。そしたら向かううぢなではなくどろべちやの所にころげましたそして一番めの神社で体んで又歩き出しました。こんとは、穴神社で、おべんたうをたべました。それから遊びました。こんどは、どろべちやの所を通つて帰へりました。帰へる時は、まとも町でわかれて帰へりました。

### 遠 足

(五年)

朝、目がさめた。窓より外を見ると小雨が降つてゐた。私は心配でたまらない。ごはんをたべてゐると、空が晴れて来た。うれしくてさっそく、遠足の用意をして、家を出た。学校で式をすまし列をただして門を出た。比治山にお参りをして、みくまりきやうに行く

のだ。空は晴れて、かん／＼と照つてゐる。先づ府中の埃宮に、お参りした。石段がたくさんあった。しゅつぱつして、みくまりきやうに行く途中麦畠の中を見ると緑色が一面に美しく波うつてゐる。松の下で休んでゐると、キリンビールの大きなたて物が見えた。又、歩いてゐると畠の中が真赤になつて赤い毛布をひろけた様にれんげが咲いてゐる。その上にごろがりたいやうな感じがした。みくまりきやうについた。

そこには、つつじがたくさん咲いてゐた。私は、つつじを折つて、水につけて、しんぶん紙でまいて、りっくさつくの横において、おべんたうをたべた。食後○  
○先生に松かさをなげたりして、遊んだ。○先生が松かさをなげられたらいたくてたまらないそれをやめて、生生とたあむれてゐた。先生が私の脇の所をくつぐられた私はくつぐつたくてたまらない。とう／＼しまいには、土の上にごろげてしまつた。そこに木の根が出てゐたので、背中をうつていたかつた。たくさん

遊んで、もう帰るのだ。帰りしなは来た道を帰つた。駅でわかれて、それから○○さんたちといっしょに帰つた。

畑 作り

(六年)

今日は、向洋へ畑作りに行くのだ、八時までに学校へ行つた。学校へ来て、少し遊んでゐるとべるがなつた。四年生以下は、私たちの方がかり見て、うらやましさうにしてゐる。朝会がすむと、私たちは出かける。二部六年の男子は、くはをもつて一部六年の男子は、馬ふんをひろひながら行くのだ。いよいよ出発だ。行く時、川にたくさん小さなさかなが、うちや、うちやしてゐる。私たちが、向洋について、畠の中で休んでもまだ一部六年の男子は来なかつた。少し休んで畠を耕してゐると、車を引いてようやく来た。一部六年が来たので、おべんたうをたべ出した。つかれてゐ

ので、おむすびが大きいおいしくおなかの中にはいる。又午後から畠を耕し、をほつてその中にこやしをいれた。午後畠の手いれがすむと帰るのた。帰りしな私たちの畠を見ると、私たちの畠が、高一となつてゐる。私たちが、せつかく干をながしてやつた畠を○○○先生がかへられたのだ。私たちが干をながして作つたかひはない。私たちは、くちやうをいひながら帰つた。帰る時、○○○先生の下駄がわれたので、私が、なほして、先生の所へもつて行つた。少しははかれていたが又ぬがれた。今の畑作りは、おもしろかつたが、私たちがせつかくきれいにした畠がよその物になつてゐるのが、さんねんでたまらなかつた。

(終)

## じさんの歩み

(一年)

マイニチアサオキテサツサトウガイラシテ、ソウシテ、ヨフクヲキテゴハンヲタベテ、オベントウヲツクツテウチノモンヲデルトキニハ、オカアサマガ私ノスガタガミエナクナルウチマデオクツテクダサイマス。サウンテ、私ガ、ガツカウノモンノ所ヘイクト犬ガケンカラシテキマシタ。ソレカラ子ドモガイッパイアツマツテアソンテキマシタ。

## 興亜奉公日の朝。

(二年)

けふは、興亜奉公日で、朝六時におきました。ごはんをたべて七時二十ぶんごろ学校へ行つて見ますと、門がしまつてたので、ほん門の方へまはりました。まっすぐに行つて、うんどうばに出ますと、もう、向の門は、あいてゐました。けふしつにはいって、かばんを、おろして、○○○さんや、○○○さんや、○○○さ

んやなんかと、まりつきましてゐますと、「りん、く。く。」とべるがなつたので、ちようれいのとうりにならびました。それから、大学のぐらんどへ行きました。そこではうはいともくとうをして、きみがよのうたをうたひました。それからだいいかいのたいさうと、だいいかいのたいさうをしました。それから、がくたいにあはせて、出ました。そこから、白神様へ、おまへりました。○○○さんが「さむい、く。」といつて泣いてゐました。私はおかしくてたまりません。学校へかへたらあたたかくなりました。

陸軍記念日の一日

(三年)

三月十日は、陸軍記念日で護国神社へ集まつた。お参りをすまして、遠足に出た。みゆき橋を渡つて、たんなの、島けの間を、歩いて、ひゆなの方へ来た。だんく坂道をのぼつて、お宮にお参りして、一休みした。

そこを下りて又、歩いた。

きれいな、海が見えた。どてを上つて、橋の上へ来た。向かふから、煙をたてて、汽車が、勢ひよく、走つて来た。みんなは、「わい、く。」と、声を、上げて居る。細い道を、歩いて、行くうちに足が、へとくになつた。ようやくついたときは、やはりお宮だつた。つくとすぐ、○○○先生が

「おべんたうをたべていゝです。」

とおつしやつたので、私は、急いでかばんを下し○○○さん、○○○さん、○○○さん等と、並んでおべんたうを始めた。おべんたう箱をあげると、中から、私のすきな、まきずしと、ゆで卵が、はいつて居た。おなが、すいて居るのでとてもおいしい。○○○さんは、木の上で、たべて居る。御飯がすむと、まりつきによせてもらつた。とてもおもしろい。私たちは、大がちをした。其のうち、先生が、「あつまれい」とおつしやつたので、私たちは、リユックサクを、おうて、元氣に出

発した。

道がとでもわるいのと、遠いので、大分つかれたが、それでも、歩けなくなつた人もなく、無事にまとはに着いて、電車で、帰つた。

私たちは、今日の記念日をお参りと、遠足で、すごした。

遠 足

(五年)

四月二十七日はにくまれきようへ行つた。

朝は、くもつて小雨が降つてゐたがだんだん晴れて来た。

途中えの宮へおまいり、した。

そこから、にくまれ宮までだいがある。

谷川にそつて、だんく山をのぼつて行つた。○○さんが道あんないで先頭にたつて行かれた。山のだいが上に来た。

もうそこで、おべんたうを食べることになつたのでみんなは、「わあつ。」といつていゝ所をさがした。

私は○○さん、○○さん○○さん○○さん私の五人でたべた。

おなががすいてべこくなので、とてもおいしくたべた。谷川の水が気持よく聞こへる。

水の中へはいつて、遊んでゐる人がある。

かん食をたべながら、つくじをとつた。男子の人はふくろをもつて、けんきん、けんきんと、あるいておられた。

かんしよくばつかりたべてゐると先生が、「あつまれ。」とおしやつたので、リュクサツクをせおつて集つた。そこから、にくまれきようへ行くのだ。私は、もう、こゝがにくまれきようだと思つてゐた。すべりさうな坂を、のぼつたり、下つたりして、ようやくついた。たきが、いはにぶつかりぶつかりしながら流れてゐる。

私はすぐ、水管をもつて行つて、たきの水を入れた。とてもつめたくて気持がいい。

それから、かほを、あらった。

水管をおいて、○○さんと、遊んでみると、横の方にもたきがあつたので二人で行つて、はんかちをぬらしたり、足をあらつたりして遊んだ。

二人では、おもしろくないから○○さんと、○○さん  
を呼んだ。四人で、先頭まねをしてあそんだ。とても  
おもしろい。石から石へとんでみると、○○さんが、  
かた足水の中へおちた。すると、男子が、らんをと  
つてみたので私たちも行つて、とり始めた。なか／＼  
みつからなかったが、やうやく二本とれた。みんな  
は、とるのがとても上手だが私は、へたと見えて、な  
か／＼見つからない。ようやく三本見つけた。

すると先生が「あつまれ。もうかへります。」とおつし  
やつたので、すぐかへりやういをして、集った。かへ  
りは、下りぎかなのでらくだったが、もうつかれて、

元気はあつても、足がなか／＼すすまなくなつた。駅  
でかいさんした。

私は電車でかへった。

四月二十七日の遠足は、とてもおもしろかった。

向洋へ畑作り

(六年)

二十三日、火曜は、高等科一年、六年二組、二部五年  
とが、向洋へ、おいもを、うる順備に行つた。

くはをかついだり、馬ふんをひろひながら、行つた。  
ようやくついた。少し休んで、それから、いよく畑  
作りにかかった。まづ初め、女子が、畑に、はゑてゐ  
る草を取つた。その後を、男子が、つなをひいて、そ  
こを、まっすぐ、くはでほつて行く。

朝は、少しもつてゐたが、今は、もう、とてもいい  
お天気だ。あつくてたまらない。ほうほうにはえた  
草を取るの、とてもやっかいだ。「ああ、あつい。」

と、いいながらも、みんな、一生けんめいで、やっ  
てる。何かしらないけど、とても、すぐ根をはって  
ゐて、三四人でやっとぬけるやうな草もあった。すっ  
かり、ぬけて、きれいになったので、男子のほってゐ  
るくはの、ほりかたを見てゐると、とても、おもしろ  
い。上手な人は、さっさと、進んで行くのに、へた  
な、おぼっちゃま方は、なかなか、進んで行かない。  
同じ所を、何べんも、何べんも、ほってゐる。だが、  
考へてみると、人の事はっかり笑つてゐる、私でも、  
あんなのだと思ふと、ちょっと、はづかしくなった。  
すると先生が、

「女子は、遊ばないで、ほった所を、手で、たいらに  
して行きなさい。」

と、おっしゃったので、私はほつと思つて、ほつた。  
でこぼこのうねを、手で、平らに行つた。もうだ  
いぶつかれたやうだ。どうも、働くのが、いやになつ  
て来た。だが、戦地の兵隊さんの事を思へば、何んで

もない。と思ふと、又、元気が出て来た。

ようやくすんだ。それで、手を、近所の家で、あらは  
してもらつて、中食にかかった。○○さんと、○○さ  
んと、三人でおべんたうをたべた。お腹がすいてゐる  
ので、とてもおいしく、たべた。穴の中に、大きな、  
木の根があつたので、その上につて、遊んだ。しば  
らくして、又、作業に、かかった。平らにした、う  
ねの上に、三十センチぐらい、間をあけて、穴をほつ  
た。もうそれで、出来上つたので、かへり用意をし  
て、畑の方を、ふりむきながらかへつた。

## 第四章 甲乙両学級六カ年の歩みを通観して

### 第一節 「私のお父(母)さん」のばあい

#### 一 年生

昭和十四年十二月五日(火)、一年生の生活もかなりすぎたの冬に、第一回の「私のお父(母)さん」が書かれている。

すでに、一年のこの段階でも、父おやに対する敬意の表現法が、さうとうにできている。父(母)を見る目、父(母)を考える心が、このようなことばづかいをしうる程度に成長していると見てよからうか。方言的な敬語法もあるが、共通語の敬語法も用いられていて、「お……になる」式の尊敬表現法もかなりつかわれている。「れる・られる」尊敬表現法助動詞もつかわれているが、これは、広島地方でのばあい、方言的な言いかたと共通語的なつかいかたとの、両面をそなえていよう。

一年生の作文は、総体に、事実列挙の叙述体が目だつ。ことがらをつぎへつぎへと羅列していく。ただし、これを一年生なりの文章展開と言うこともできよう。

その事実列挙がおこるのは、そもそも、表現者たちの心情が、いかにも率直にはたらくからである。思いのままに、とりどりに、「父(母)」を出して、そのくせを語り、ときに、ぶざまとも見られることをもさりげなくとり出してしまふ。

生活内容の流露・展開に即応するかのように、当時かたかなで書きあらわされたこれらの作文は、句読点もほどこされないまま、れんめんと、文章の展開を見せている。

このような段階では、——文意識も不鮮明なままに、文表現のむじやきな混乱もおこされている。たとえば、このようである。

ソシテオトウサンガジテンシヤラサウコニヘレテ、ゲンカンノ所デオトウサンガカヘッタヨトイヒマスト、アカチャンカヨロコンデトウタントウタントイツテ、ヨロコンデキキマス。ソレカラスコシスルトオトウサンガシゲミチャントイツテオヨビニナリマストシゲミチャントオヨビニナリマス。

一年生作文の叙述面には、一般にこうしたことが見られがちである。

文表現を現在法の言いかたでむすんだり、完了法の言いかた(「タ」どめ)でむすんだりすることもまた、表現者たちは、むとんちゃくにこれをおこなっているかのようである。つまり、現在法や完了法の意識は、未発達であると言える。

一年生段階では、男女別について言うべきことが、ほとんどない。

昭和十六年一月二十一日（火）が、第二回めに、「私のお父（母）さん」がつづられた日である。

二年生末の段階となって、その作文は、表現者たちの能力の著しい発達を見せている。こうも伸びてくるものとおどろかされるほどである。

ひらかなで書かれたこれらの文章には、もはや相当量の漢字が出ている。漢字もつかって整然と書きあらわした作文が、ことに、女兒がわに見られがちか。

一年の作文でテンやマルをつかわなかった人たちが、この段階の作文では、そうとうにきちんと、テンやマルをうっている。

句読点にも見られるとおり、これらの文意識は成長している。「文」のとりあつかいが進歩しているのである。結果として、より明瞭な文表現が見られるようになっていく。いわゆる敬体といわれる常体との混在することも、思いのほかにすくない。

内容に即して言うならば、当然のことながら、生活の事実のとらえかたが向上している。複雑にもなり、多角的にもなっている。——これと文意識の進歩とが相即する。

ずいぶん長く書けるようになってきた。内部へ、すこしではあるが、会話も入れることができるようになっていく。主としては父（母）の会話をえがこうとしている。

作文結果の男女差については、なお、言うべきことがあまりない。

おやに対する日ごろの考えかたを反映する敬語法では、「おっしゃいました」「おでかけになりました」の類の言いかたが、人々にかなり共通的に用いられるようになっていく。——（いわゆる敬語のつかいかたが、よく

できているのは、やはり附属学校の子どもたちでもあるのでかと察せられもする。家庭での、おとなたちの日々のしつけが、かなりものを言っているよう。

### 三年生

三年生になると、甲学級では昭和十七年三月十二日（木）、乙学級では昭和十七年二月九日（月）に、それぞれ、第三回めの「私のお父（母）さん」がつづられた。

一年生の段階から六年生の段階までを通観して、私が注目したく思うのは、この三年生の段階である。どの表現者も、この段階になると、いわば自己を發揮して、あるいは興をもつてものを書いている。生活表現の作文というしごとが、このころになると、おのずから軌道にのってくるかのようなのである。読んでいて、かれらの闊達な成長を感じる。

筆者たちは、きつと、いやきなどはおおすことなく、もつともしぜんな書く気分で、書いているにちがいない。印象ぶかいのは、表現者たちの表記の状況が、かなりどっしりとしてきていることである。二年生では、用紙の字わくいっぱいをつかった大きい文字の、たどたどしく書かれた感じのものが見られがちであったのに対して、三年生のは、みな字形がよりととのってきている。ここに、書きあらかわしかたの、かなり進んだとりまどめぶりが見られる。すなわち、表記面から見ても、かれらはもはや、みずから大いに書こうとする生活にはいつているのである。

述べている内容に、各自の意見が出ている。親への愛を表現するかとおもうと、また、親への批評を表現して

いる。(すきぎらいを端的に言っているのけることもしている。) 叙述に深みがでるようになっていると、私は見るのである。女兒のものに、ときに、その点で、いっそう目をうばわれるものがあつた。

会話をに入れて、文章をつづることに關しても、あるいは、女兒たちのものが、いちだんと注目されるかもしれない。

いづれにもせよ、三年生の段階では、「父母を見る、見つめる」文章がつづられるようになってい

男児たちに、「である」調の見られるのも、なるほどと思われることである。

#### 四、五年生

第四回めの「私のお父(母)さん」は、昭和十八年五月三日(月)につづられた。もし、昭和十八年三月につづられていれば、四年生の作文ということになるけれども、昭和十八年五月であつては、五年生はじめの作文とせざるをえない。それにしても、一年おきの調査という点では、これもほぼ目的にかなつたものとすることができ。——ただし、これが十八年五月であつたために、つぎの六年生のばあいは、十九年五月・六月という時に入つまり、一年たつたところで√作文してもらうほかはなかつた。

さて、この段階になると、男児にも女兒にも(あるいは男児により多く)、父おや(母おや)尊重の念が高まつている。——ややおとなびてきた感じである。

判断力ともいふべきものの成長が認められる。女兒のばあいにも、父の職業に關する諸見解などが認められる。

表現者たちは、しぜんに、父（母）の性行をもえがくようになっていく。

この第四回めの作文結果は、つぎの第五回めの作文結果、つまり六年生のものに、かなり近いか、とも思われる。

## 六年生

昭和十九年六月二十七日（火）に甲学級で、昭和十九年五月二十四日（水）に乙学級で、それぞれ、第五回めの「私のお父（母）さん」がつづられた。六年生前期でのことである。

六年生ともなると、書かれたものがおとなびてきている。ことばづかい一つをとってみても、男児が「しかるときは」などと言っている。段落も、総体に、くっきりと立てられており、漢字の用法にも成長がある。なお注意すべきは、整字の力であろう。もはやかれらには、その心得ができており、したがって、表記全体が美しいものになっている。

六年生の作文で、多くのばあい、思われることであるが、その作文は、それまでにいろいろな述べてきたことを、最終的に総まとめするようなものになっている。たとえば、「おとうさんはやさしいけれど、おこるとこわい（ひどい）」ということについても、初期の作文からこれにふれていて、かつ、六年生ので、最終的にそのことを述べるというありさまである。たばこのくせや、新聞についてのいろいろなくせなども、とかく早くからとりあげられていて、かつ最終段階でも、論評の対象とされていがるのである。

おやへの感謝の気もちや報恩の念なども、しだいに述べられてきて、六年生の段階では、それがまた、集約的

にとりあつかわれがちである。言ってみれば、どの表現者のばあいにも、六年生の作文はみな、さすがに、それまでの全体の、よいむすびになっているのである。

この次元の作文は、おちつきと、ときに客観化とを見せる。一人の人は言う。

このやうな父であるから、僕達は安心して、のびて行くのである<sup>マッ</sup>

かれらは、父(母)の本性にふれている。あるいはまた、父(母)の本性をつかんでいる。そうした境地で、おやのだいじさを述べるのである。

※ ※ ※

一年生から六年生までの歩みを追って考えさせられるのは、つぎのことである。

一年生から二年生への歩みでは、まことに大きな伸びを示す。二年生から三年生へのうつりゆきも注目すべきものである。三、四年生は、大きく総合して観察することもできようか。五、六年生がまた、総合的な観察をゆるすと思う。それにしても、六年生ともなると、いわば最終段階であるのにふさわしく、高次元の構想力・整頓力を示すのが注目される。

小学校児童の作文能力の発達を学年順に見ていくのに、発達相を小さきみにとらえていくことも必要である。が、他面、発達相を大ききみ・大きくりとらえてみることも、また、必要かつ有効であると思われる。

※ ※ ※

「私のお父(母)さん」という題目を与えられれば、子どもたちは、まず、わるいお父(母)さんをえがいたり、

お父(母)さんはわるいと述べたりする方向にはおもむかないであろう。人は、その点をとらえて、「私のお父(母)さん」という一定形式による課題作文が、この形式化・形骸化をひきおこすと思えるであろうか。もっともな観察であると、私も思う。が、じっさいに同一題目で六カ年をとおすとなったら、今日も、私は、「私のお父(母)さん」という題を採るであろう。「私のお父(母)さん」という題にまさる一定題を見いだすことが容易でない。なかならずく定着性のある一定題目をえらぶとしたら、「私のお父(母)さん」などといったところにおちつくのが、もっとも穏当なのではなからうか。

時代がかわり、人々の諸観念に変動があっても、父母に関する話題は、今日も、依然として、親近の話題ではないか。古今の長いあいだ生きる題目として、私は、今も、「私のお父(母)さん」という題目が適当であると考えている。

およそどのような題目であっても、それが課題とされれば、すでに、児童作文の多少の形式化をまねくことは、不可避でもあろう。一般論としては、こう考えておかなくてはなるまい。ところで、私の調査の結果を見るのに、——上掲の作品に見られるとおり、形式化・形骸化は、かならずしもさほどに言う必要がないようでもある。すなわち、天真の表現者たちは、与えられた「私のお父(母)さん」に対して、こだわりなしにしぜんの反応を示してくれているのである。

多少の形式が見られたとしても、そこにはまた、その形式化をひきおこしている子どもの純真さが読みとられる。

おわりに、私は、つぎのことを述べないではいられない。

私は、各作者の、「私のお父(母)さん」を語る文章を、それぞれに、第一回から第五回へと、祈る心で読みとっていった。表現者それぞれの、家庭の幸福が、より大きくなっていくことを祈りながら、読みすすんだのである。ここに、あらためて、私は、課題作文に応じてくださったかたがたに、感謝のまことをささげ、おのおののご家庭ご親族の、永遠のご多幸をお祈りする。

## 第二節 時の課題に応じた作文のばあい

### 一年生

このばあいにも、さきの「わたしのお父(母)さん」の一年生作文と同様に「ソシテ」「サウシテ」による、羅列主義の作文が目だつ。——表現者は、なんの気がねもなしに、「ソシテ」や「サウシテ」をかさねかけていく。

また、表記面でも、句読点絶無のものなどがかなりあって、正確な意味での文の意識は、きわめて幼稚であるか、めばえていないかである。

接続詞「ソレカラ」を用いるものがすこしある。

ときに、接続詞「ソコデ」とか「スルト」とかを用いているものがある。こういう人は、「ソルト、……」といったように、接続助詞「ト」を用いることもある。(こういう人でも、句読点の「、」や「。」に関しては、

半意識的とでも言いたい状態にあることが多い。) 接続詞の「スルト」や接続助詞の「ト」などを用いるような人は、——つまり複文も書きうる人は、しぜん、長い文章を書くこともできてくる。——お話しはしぜんに長くなる、といったあんばいである。長くも書ける表現者たちもあることが注意される。ただし、複文(たとえば、「ガッコエイッテカラ、……。」)「……タラ、……。」も書けるのに、文章全体はみじかいものになっていることも、また、ありはする。

接続助詞を用いて複文をつづることもしている人たちが、一年生とはいえ、文章中に、かんたんな会話を入れていることもある。が、これはまれなことであると言える。

一年生の段階で、表現者が、いかにもこの段階のものと思わしめる、おもしろい思考を示すことがある。たとえば、つぎのとおりである。

b くん の ば あ い

スルト コドモ ガ ナ ニ マ ケ ル モ ノ カ ト イ ヒ マ シ タ サ ウ シ テ ボ ク ニ イ シ ヲ ナ ゲ ヨ ウ ト ス ル ト イ シ オ ナ ゲ ヨ ウ ト オ  
モ ッ テ イ ル ウ チ ノ オ バ サ ン ガ イ シ オ ナ ゲ テ ハ ア ブ ナ イ ト イ ヒ マ シ タ、ス ル ト イ シ オ ラ ト シ テ ニ ゲ マ シ タ

「イシオナゲヨウトオモッテイルウチノオバサンガ」との言いかた——思考法——が注目される。

## 二 年 生

二年生末の作文を見ると、一年生からの、大きな発達が見てとられる。急速の発展とも言いたいものが、ここに認められる。

漢字をつかおうとする気もちもつよくなっている。女兒のほうがより多く漢字をつかう傾向にあるかとも考えさせられた。

「そして」「そして」「さうして」「さうして」というような、単純列挙の言いかたは、かげをひそめて、表現が多少とも立体化する。文表現の構造のうえでも、「……」、「……」。」「……」ノデ、……。」などの複文構造が、よく見られる。

私は、一年生から二年生のへ読みすすんできては、くりかえし思った。まことにふしぎな成長がここにある、と。稚拙な成長とも言えようか。適切なことばが見あたらぬ。(このユニークな成長の実質を、なんとかして説明のことばで言いあらわしたいものだ。)

「これは、しっばい」などと、ことおもしろくものを書こうとする気もちも、この段階で、もはやうごきそめている。

長いセンテンスの出てきがちなこと、むろんである。

### 三 年 生

おさなさからの脱皮ということが、今、私のいちばん言いたいことである。漢字まじりに、ひらかなの文章を書いた、二年生の作文が、字わくいっばいの、大がらな文字の、稚純なものであったのに対して、この段階のものは、より小さい字わくに合わせての、より小さな文字での、みっちりとした表記になっている。二年次では、文字のために文字を書いているかとも言うてみたいところがあつたが、三年次では、表現者たちの、みな、文

章のために文字を書いているようすを、くみとることができるようである。一樣に、文字表記のひきしまった様相が見られる。

書く生活のゆとり、——第一次段階のゆとりというものが、できたということでもあろうか。冗談も書けるようになってきている。女兒の表現者にも、「です・ます」調ではない、「た」どめの文章が見えている。

男児・女兒ともに、各センテンスの文末のむすびも、さまざまに書きあらわすことができるようになってきている。一例を見よう。

〔「男児のばあじ」

三月十日は陸軍きねん日です。その日は遠足で二保へ行きました。前の日は夜雨がふって居たのでとても心配でした。

第一文は「です」どめ、第二文は「ました」どめ、第三文は「でした」どめになっている。

この、二年生の稚拙さからやや成長した段階での、思考の一端を見るなら、たとえば、遠足さきで男児が弁当の食べ場所を求めるのに関しては、

あんまりかんがへよるとべんたうをたべるひまがない。

というようなことが言えている。また一女児は、つぎのようなまとまった言いかたをしはたすことができてよいのである。

道がともわるいのと、遠いので、大分つかれたが、それでも、歩けなくなつた人もなく、無事にまとはに  
着いて、電車で、帰つた。

これを、だまって人に見せたら、多くの人は、三年生末の作文だとは思わないであろう。

右の例では、句読点の意識が顕著である。この段階の表現者たちは、概して、句点を用いる意識ははっきりとしている。

漢字をきちんと書こうとする努力も見られる。(きちんと書こうとして、いきおい、大きいめの字を書いていることも多い。)

五 年 生

会話が、自由にとりいれられるようになってきている。かりに、よわい文章と言えと言えようなばあいにも、会話が書きあらわされている。

複文の使用されることと、会話をとりこむ技法の見られることが、並行していようか。こうなって、おのずから、長い文章も生産されている。ところで、ここに注意されるのは、接続助詞が用いられて、長い複文のセンテンスのつくられるばあいにも、その接続助詞は、順接のものであるということである。逆接の接続助詞が出てこない。かれらは「〜だけれども」などとは言っていない。どうして、こう逆接の表現ができていないのだろうか。思考法の発達段階というものかと思われる。人は、より進んだ段階の思考におもむけばおもむくほど、自由に、順接・逆接の表現法を利用することができるようになるのか。

逆接表現は見せていないけれども、長く書く興味をよく見せている。表現をくふうする力もわいてきているのである。叙景も、たくみになっている。(女兒も、「です・ます」調ではない、常体の表現を、そこに自由に見せ

たりしている。」

ものに同情したりすることもできており、心情の成長がうかがわれる。「初夏は気もちが広々としてゐる。」「なども言う。」

文字になれて、やや雑にも書いてみたりするようになっていいる。

## 六 年 生

五年生のものを、六年生のものと合わせ見ることのできるのは、さきの「私のお父(母)さん」のばあいと同様である。六年生のもので、かなりはつきりとうかがわれる、段落がえの意識も、すでに、五年生のもの、かなり看取することができる。

それにしても、六年生のものを見とおすと、もはや、おとなびてきたなとも思わせられるのである。「おかしいやうなはづかしいやうな気がしてたまらなかつた。」「こんな表現もできるのである。」「ついなんの気なしに」と、女兒も言つてみせている。

おとなびたということは、思考力がたけたということでもある。分析力・総合力がついたということでもある。したがってかれらは、事実を把握するつよい力を見せるようになってもいるのである。(これを、分別力ができているとも言ふことができようか)。一例をつぎの文章に見たい。

「一男児のばあい」

馬糞拾ひ

「○○○先生に注目。」○○○先生の声だ。

僕ははいっせいに○○○先生に注目した。

「えー今から、向洋に行つて開墾いたしますが、途中二部五年は鋏十二てう、高等科同じく十二てう……一部六年男子は行く途中に落ちてゐる馬糞を○○○先生の指図にしたがつて拾ひます。」と言はれると皆が、がやがや言ひだした。○○○先生が「出発。」と太い声で言はれた。

これを読んでいて、私は、自分はこのなにいきいきと、先生のことばをうつしとることができたろうかとかえりみた。

把握力が進歩するとともに、文章の形成力が高まってきた。

六年生の段階は、ひとくちに言つて、複文（接続助詞を用いるセンテンス）の自由に書ける段階とも言えようか。それにしても、この段階でもなお、逆接の表現がほとんど出てこないのが注目される。

ここであらためて思う。さすがに六年生の人たちである、と。（——もつとも、客観的な言いかたをするならば、ここに、いわゆる能力差も見えている。）その人ごとに、その能力を發揮している点では、なにも言うことはない。

汎  
説  
  
作  
文  
教  
育  
の  
道

小学校六カ年間の児童の生活に即応して、私は、

その年次作文の成果を見ることができた。

表現者たちの、小学校生活六カ年での、

作文力の自然発展を見て、私は、

つぎのような「作文教育の道」を考える。

第一 「いかにして、その深刻な生活経験をとらえさせるか。」が、指導の第一歩になる。

これなくしては作文教育は立たない。書きたい気もちの誘発が第一に必要なである。書きたがらせることが作文指導のはじめである。

「私のお父(母)さん」は、だれにとっても、深刻な経験の対象であろう。この題目を通年の定題としたことはよかったと思う。年々に採った課題もまた、よかったと思う。両種の課題をもって一連の調査経験をしてみ、私は、生活経験の急所をつく作文指導の重要性をつくづくと思う。

第二 作文指導は、すすめはげますしごとだ。

けっして否定しない。いいところ、いいところを見つけていく。昔の寺小屋の師匠は、習い子の作文をほめるのに、まずはよくできたと言ったという。作文がまずいばあいは、字がきれいにかけているとほめたという。字もまずいばあいには、いい紙を使っていると、料紙をほめたという。

表現者たちの作文を、内容・形式について、最高の善意で理解することにした。洞察につとめて、その心(内容についてはもちろん、形式についても)をくむことにしたい。たとえば、腰くだけの内容の文章があったばあいにも、そのいわゆる腰くだけを、当人の思考発展のありさま、深刻なありさまとして理解する。

これと思うことがあっても、すぐには言わない。自己をおさえて時をまつ。忍耐づよい観察・指導につとめ

る。

作文指導は、長期計画の指導である。批評すべきことも、考えてすこしずつとりたて、気ながに指導する。人間味ゆたかな、あたたかい指導にまざるものはない。

### 第三 相手はだれしも、もともと作文ずきであったのを、忘れてはならない。

小学校の低学年の段階では、みなみな、書くことがずきであった。その段階では、だれしも奔放な表現力を持っていた。それなのに、学年が進んでくると、多少とも、作文へのすききらいもでき、あおいそいそと書いた気もちの、にぶりを見せることがすくなくない。私ども教育のがわに立つものを深く考えさせる事実がここにある。問題はけっして単純ではなからう。が、なにはともあれ、もともとかれらは作文ずきだったのを、よく思いかえずようにしたい。

教育のはたらきが、人の活動やものごとの、規格化をまねくようであってはならないことである。私どもは、相手がたの成長を見まもるとともに、たえず、「しぜんなもの」がどのようにしてさられていくかを見つめていなくてはならない。

いつまでも作文ずきであってもらうためには、かれらといっしょに遊ぶことが必要であろう。すくなくとも、いっしょに生活するつもりでいて、ものを書かせるようにしなくてはならない。いっしょに遊べば、かれらは書きやすく、こちらも指導しやすい。ともに現場に生きるからである。

かれらの言いたいことは、みんなほきださせることだ。——理屈を言わないで。(出たとこ勝負でもよい。そんな指導もときにあつてよいのではないか。)

第四 やがて伸びるのだ、と期待する。

年々に伸びるのだ、と期待して(待望して)(忍耐して)、その時々<sup>々</sup>の作文を見ていく。そして、それをやさしくとりあげる。

六年生のものを見られたい。みんな、伸びてきている。

第五 一つだけ、つねに言う。「心からのことばで書け。」、と。

「心からのことば」は、すなわち真実のことばである。ときに、作文指導上、方言か共通語かということが問題になる。今は、この共通語に關しても、私は、同じさせようとする心で(通じてもらいたいという気もちで)、自分の心からのことばをつかえば、それが共通語になっていくのだと言いたい。心をこめてのことばなら、それは、かならず人に通じる。通じたらそれは、その範囲での共通語である。やがてこの範囲が、より広いものになっていくことを考えればよいのだ。

## 第六 短作文教育を生かす。

これは教師の活力にかかわる問題である。

相手がたがどしどしと長文章を書いてくれれば、それはそれでうれしいものの、処理にはだれしもこまる。処理がなければ作文教育もない。としたら、処理能力のために、私どもは短作文教育を考えることもしなくてはならない。

表現者たちが、じっさいに生活のうえで、短作文を必要とすることなどについては、今は言わない。

## むすび

作文教育という四字をじっと見つめてみて思う。「文を作る」。つくるということは、たいへんなことなのだ。ないものをつくりだすのだから。これは偉大なことである。作文というしごとのだじさに、今さらながらおどろかされる。

作は創作の作だと、ことあらためて、自己に言いきかせてみる。つくることが、かんたんであったり、容易なことであったりするはずがない。芸術全般が、いかに生みの悩みの中で創作されていることか。

相手がたにむやみと高のぞみをしてはならないと思う。作文はたいへんなしごとなのだ。

「作らせる」(作文教育)というのは、相手の心にずいぶん強力にはたらきかけることなのだと思う。責任がある。

むりを強いてはならない。

正しくはたらきかけなくてはならない。

むすび  
正しくはたらきかけて、真に相手の心を養う。となつて、私どもは、また、作文教育のむずかしさにこうべをたれる。

けっきょく、作文の教育には、徹底的な謙虚さが必要なのではないか。

「つつしみ深く!」、これが、作文教育の効率をもっともよく高めることになるのかと思う。

本書の稿を成す時、広島大学大学院学生、中冽正堯君の援助を受けた。また、清書では、同学生、吉田則夫君の援助を受けた。銘記して、両君に深謝する。

稿の過半を了したころ、中冽君が、飯田恒作というかたを知っているかと、私に言った。全然知らないが、何か？とたずねると、同氏に、同じような継続作文の試みがある、と教えてくれた。中冽君も、研究室で、ふと、この本にめぐりあったのだそうである。私は不明を恥じ、かつ、早く同似考究の先業のあったことに深い敬意をおぼえた。稿が成ってから拝見することにした。

飯田恒作氏のご発表は、『綴る力の展開とその指導』（昭和十年九月一日発行 培風館）というのであった。おどろいたことに、氏もまた、通年一定の作文題目として、「おとうさん」を採っていられる。やはり、こういうところにおちつくものなのか。右の書の一七ページに、「私の受持つてゐた児童は全部で四十六名である。その中で父のない児童が一名あるので、調査は四十五名について行つたのである。幸にこの四十五名は尋常一学年から六学年まで、一名も欠けないで資料を提供してくれたのである。」とあって、しごととは彼我たがいに近似している。

あ と が き

ここに先覚の類例を仰ぎうるのは、私の光榮である。と同時に、ここに比較の実例を、本書読者各位の前に報知しうるのは、私の欣榮である。彼我の実践につき、対比対照のご検討をたまわるならば幸である。——（私自

身も、今、拝見して、とりあつかいの相違などにつき、多くのことを考えさせられている。」

「作文」と作文教育とを検証して、「作文」と作文教育との推進をはかろうとする、一系の思念は、いつの時代にも、かわらず生きているものであろう。一定題や時の題目によつての、継続（↓観察）作文の試みは、古くしてしかも新しい、永遠的なしごとにならぬ。

いろいろの時期の、それこれ多くのかたがたに、今日もまた諸地方に、類似のしごとができてはなからうか。この種の、沈着な実践の持つ意義と価値とは、普遍的永遠的であらうと思う。

私は、小稿を成さしめて下さった原作者のみなさんに、ここで、改めてお礼を申しあげ、感謝のまことをささげる。当方からのお願状と、作文のコピーとを見られた各位は、それぞれに、情感・感懐のおたよりを下さった。よくもまあと、広島原爆をたがいにくぐりぬけてきた身の、おどろきもまたかくべつ大きかったのである。中にはご遺族のかたの、思いに満ちたおたよりもあった。私は、ご返事をお寄せくださったすべての人と、いち、会ってお話ししている心もちになった。ありがたいことである。研究・教育のためになるのならと、まげて、なにごともおゆるしくくださったみなさまに、私は伏してお礼を申しあげる。

本書の、この特別な版行には、文化評論出版、木村逸司編集長の、かくべつのご努力があった。心からお礼を申しあげる。木村氏につづいては、荒木専務が、ことをしあげてくださった。感謝にたえない。編集の二宮千賀子さんにも深謝する。

原作のおもむきを、そのままに再現することにとめたことにつきまして、ここにおことわりを申しあげます。

私は、作文発達のありさまを、学年順に、じっくりとたずねてみたく思います。もとより、また、読者のみなさまに、そうしていただきたく存じます。ついては、作文を、いちいち、その実情のままにかかげて、と考えるしだいでございます。

「誤字・脱字」があつてはと、お気づかいの作者もおありのことかと、お察しいたしますが、私は、そのようなものも、いわば未発達段階での、まったく一般的なできごと、つまりは自然現象のようなものと考えます。それらはそれらで、まさに愛らしいものとも思うのであります。あたかも、文なり文章なりのつづりかたが、やはりおさなくて、言ってみますれば、へんなつづりかたをしてもいるのと同様に、文字のほうも、しぜんに、そのようなおさないことをしているのだと考えます。

すべては、しだいに発達していくものです。いろいろな階梯をふんで、人はしぜんに発達していきます。過去のことは過去のこととして、どなたも、やさしくごらんくださいますならば、なによりの幸でございます。どうか、すべてを、ほほえみを持って、お見とどけくださいませ。つねに、そこそこに、天真の作者の、美しい姿があるはずです。

私は、研究上、すべてを、たっといものとして、拝見してきているのでございます。

失礼ながら、ここで、小川利雄さんに、深く感謝いたします。小川さんのあたたかいお世話をいただきまして。おかげさまで、この本も、いよいよ世に巣立ちます。

編著者略歴

藤原与一 (ふじわら よいち)

明治42年 愛媛県に生まれる。

昭和12年 広島文理科大学文学科卒業。国語学専攻。広島大学文学部教授を昭和47年退官。文学博士。

著書 「日本語方言文法の研究」、「方言学」、「方言研究法」、「国語教育の技術と精神」、「日本語方言の方言地理学的研究」、「日本語方言文法の世界」、「方言研究の回顧と展望」(方言研究叢書第1巻)、「方言の山野」、ほか。

小学校児童作文能力の発達

昭和50年2月1日初版発行

定価 二、五〇〇円

〒 二〇〇円

編著者 藤原与一

装幀 志賀啓二

発行者 荒木妙子

印刷所 増田兄弟活版所

文化評論出版(株)

106 東京都港区六本木三十一番一

(電) 〇三―五八四―七六六八

(振替) 東京 一四八、二九三

733 広島市観音本町二一九―一

(電) 〇八二―三二一六二八二

(振替) 広島 九六七